
リバース

もかぱぱ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リバーズ

【Nコード】

N8595J

【作者名】

もかばば

【あらすじ】

お気に入り登録してくれている皆様ありがとうございます。

現在、作者の都合により『リバーズ』は一時連載を中止しております。

近く、必ず再開いたしますので末永く見守ってあげてくださいm)

—) m

第01章 『序章』

今日、俺は会社をクビになった。

いや…「クビになる」といったほうが正しいのかもしれない。

理由 理由は簡単だ。

今日、俺は社長をぶん殴ったのだ。

そして、そのまま会社を飛び出した。

だから、直接誰かにクビを言い渡された訳ではないのだが、社長を殴ったのだからタダで済むはずがない。

俺が会社を飛び出してから1時間が経とうとしている。

今頃、会社では俺の処分がとくに下されていることだろう。

『営業2課 主任 春山アキラを解雇処分とする。』なんてね。

クビだけで済めばいいが、もしかすると傷害罪で訴えられたりして

…。

そんな不安も一瞬頭をよぎった。社長ならやりかねない。

まあ…もしそうだったら、その時はその時だ。俺にも考えがある。

それにしても…あれから1時間も経つというのに俺の携帯がやけに静かだ。

あのとき、10人以上が一部始終を目撃していたはずなのに…。

誰も連絡してこないのはどういうことなのか？

あの会社に俺のことを心配してくれるような『友』がいないことは最初から分かっているが、1人ぐらい連絡してきてもいいのではないか？

ま、別に心配して欲しい訳じゃないけど…。

それにしても夏樹だけは、すぐに電話してくると思っていたのだが…。

＊ ＊ ＊

夏樹雄介は、俺とは同期入社で同僚だった男だ。
なつきゆうすけ

『だった』というのは…夏樹は、半年前に突然課長に昇進して“同僚”から“上司”になったのだ。

ついこの前まで一緒に飲み歩き、釣りや競馬に行っていた同僚が、今は俺の直属の上司だ。

夏樹の課長昇進は、異例中の異例の大出世だった。

俺は、そういう話には鈍感なのだが20代半ばで課長に昇進というのは普通では有り得ない話なのだそうだ。

入社以来、俺のことを『アキラ』と呼び捨てにしていた夏樹は、課長になった途端『春山さん』と名字で、しかも『さん付け』で呼ぶようになった。

「春山さん、この書類だけど…」

「春山さん、あの件だけど…」

「春山さん、はるやまさん、ハルヤマサン…」

夏樹に『春山さん』と呼ばれる度に俺は寒気がした。

夏樹は俺のことを『さん付け』で呼ぶようになったが、俺は相変わらず奴のことを『夏樹』と呼び捨てにしている。

以前は俺と同じように夏樹と呼んでいた周りの連中は、途端に『夏樹さん』とか『夏樹課長』と呼び方を変えたがこれが社会のルールなのだろうか…。連中の適応力の良さには感心する。

俺にしてみれば、『夏樹』は『夏樹』であって、それ以上でもそれ以下でもない。

あの日

夏樹の昇進の辞令が出た日以来、あいつと俺は仕事のこと以外ほとんど話さなくなった。

もちろん飲みに行くことも釣りや競馬に行くこともなくなった。

確かに夏樹は入社した頃から同期の中では、抜きん出た存在だった。だが、夏樹がこの若さで先輩たちを差し置いて課長になれたのは、夏樹が単に優秀だったからではない。要するに、上司に取り入るのが上手かったのだと俺はそう思っている。

所詮、世の中そんなものだ。いくら頑張つて働いても、上司に気に入られなければ出世なんて夢の話…。

努力だけでのし上がれるほど今の世の中、そう甘くは無いということだ。

俺は、昔からそういうことは苦手だった。

俺は、他人のご機嫌を取ったり、話を合わせる事が出来ない人間だが夏樹は違う。夏樹は、上司の命令には素直に従つたし、いつも期待以上の成果を挙げた。

何より、夏樹は社交的な人間だ。

そこところは俺とは決定的に違う。

上司に誘われればいつでも酒を飲みに行くし、仕事以外のどんな話題にもそれなりに対応できる。

上司に可愛がられる人間とは、夏樹のようなタイプのことを言うのだろう。

その点、俺はどうだ。上司に「ちょっと一杯行くか？」と誘われても「すいません、今日はちょっと予定があつて…」と、5回に4回は確実に断っている。もちろん、予定などない。面倒なだけだ。

愛想笑いして上司のご機嫌を窺いながら飲む酒ほど不味いものはない。

「そうかあ、残念だな…夏樹はどうだ？」そんな時、上司達は必ず次に夏樹に声をかける。もちろん夏樹は一発でOKする。上司も満足そうな顔をする。

上司の連中だつて恐らく初めから、俺と飲みに行きたいとは思っていないのだろう。元々、夏樹を誘つつもりで、俺には社交辞令で声をかけた…というのが何となく分かっていたので、断るのが礼儀

の様な気もしていた。出世欲など全くない俺だが、さすがに夏樹が課長に昇進した日は凹んだ。

先を越されたから。そんなことではない。異例の大出世なのだから、そこをひがんでみても仕方がない。俺が凹んだのは課長の給料を知ってしまったからだ。

あの日…夏樹の昇進が発表された日、社内の奴らは大騒ぎだった。

「夏樹さん、すごいですね!」

「夏樹課長!おめでとうございます!」

「夏樹さん!さすがです!」

「夏樹課長!おめでとうございます!」

「夏樹課長!夏樹課長!夏樹課長…!!」

この騒動を避けるように俺は給湯室に向かった。マグカップにコーヒーを注ぎ一口啜った時だった。

後輩の『冬月アヤ』がやってきた。

「夏樹さん…、あの若さで課長だなんて凄いですよね…」冬月が戸棚から自分の赤いマグカップを取り出して言った。

「ああ…」

「すごいな」と続けて言うつもりだったが、なぜか「ああ…」しか言えなかった。

事務室では、まだ夏樹の昇進の話題で盛り上がっている。そんなに大騒ぎすることなのだろうか…課長なんて仕事が忙しくなるだけじゃないのか?

「春山さん、確か夏樹さんと同期…でしたよね?」冬月が、赤いマグカップにコーヒーを注ぎながら聞いてきた。

「うん。そう、同期…。あいつには敵わないよ」と俺は心にもないことを言ってみた。

確かに、俺は夏樹のように上司と上手く付き合うことはできない。だが、仕事の面では夏樹に敵わないと思ったことは一度もない。

「そんなことないですよ、私、春山さんだって凄いなと思いますよ!」思いがけない冬月の一言に思わずコーヒーを吹き出しそうに

なつた。

「はあ！　？俺のどこが凄いだよ！」

「えーっとあ…」冬月は言葉に詰まって、コーヒーに口をつけた。やっぱり社交辞令か…。ま、いいけど。

「あ、そうそう！知ってますか？」話題を変えようと思ったのか、冬月が声のトーンを少し上げて切り出した。

「ん？何を？」

「課長になると、お給料いくらもらえるか？」冬月が、回りの目を気にするような仕草で俺の耳元に顔を近付け小声でささやいた。

いきなり下世話な話題を言い出した冬月だが、そんな冬月のことが可愛らしく見えた。

「ん？ああ、知らねー、てか給料そんなに変わるの？」出世どころか自分の給料にすら無頓着の俺は、課長になつたら給料がいくら貰えるのか？など考えたことは無かつた。

「ええ！？知らないんですかあ？　すっごい変わりますよ〜」冬月はただでさえパツチリした目を丸くして言った。こんな入社3年目の女の子が知っていることを、俺は知らないのかと恥ずかしくなつた。

「あ、そうなの？ふう〜ん…で？　いくらなの？」聞かなければ良かったと思つた時には時すでに遅く、冬月から返ってきた答えに俺は一瞬めまいを覚えた。

「そうですねえ…役職手当とか入れると…今よりも10万以上は増えるんじゃないかな〜」これが冬月の答えだつた。

「じゅ、10万!?　マジで!?!」いくらなんでも、それは大袈裟だろ。俺はせいぜい2〜3万くらいだと思つていた。この子、もしかして超テキストなこと言つてねーか？と疑つてみたが冬月は「私、入社して1年目って経理課にいたじゃないですか、だから知ってるんですよ!」と、自信満々に言い残し給湯室を出て行った。

そういうことか。あながち嘘ではなさそうだ。それにしても10万とは…急に夏樹のことが少し羨ましく思えた。そして課内の連中

が大騒ぎしているのが何となく分かった気がした。

「そうかあ、そりや確かにめでたいかもな…」

だが、今思えば本当にそうなのだろうか？本当に夏樹の昇進は「めでたかった」のだろうか？

あの日から半年が経っても、俺は素直に「おめでとう」の一言を夏樹に言えずにいた。こんなことなら、あの時、あの輪の中に入って「おめでとう！すげーな！」とでも言っておけばよかったと後悔した。

いま、もし仮に夏樹が俺の携帯に電話をしてきたら、今まで言えずにいた「おめでとう」を言ってやろうかな。「それどころじゃねーだろ！！」って怒られそうだな。

そんなことを考えながら俺は公園のベンチに腰かけてボーっとしていた。そういえば、会社を飛び出してから、この公園までどうやって来たのだろうか？歩いてきたのか、走ってきたのか、それともタクシーで来たのか。よく覚えていない。かなり興奮していたようだ。腕時計を見た。【AM11:30】あれから1時間半が経とうとしている。

まだ誰からも連絡はない。着信やメールがないか、念のため確認しようとして携帯が入っているズボンのポケットに手をつ込んだ。

…ない 「あれ？」

思わず声を出してベンチから立ち上がった。

「え？ウソ!？」
いつも携帯を入れているズボンの右ポケットには何も入っていないかった。

左のポケットをズボンの上から触ってみるが、携帯の厚みは感じられなかった。

全身から血の気が引いて行くのを感じながら、俺は上着のありと

あらゆるポケットに手を突っ込んで携帯を探したが、どのポケットにも携帯の姿はなかった。俺は、公園のベンチの前に茫然と立ち尽くした。

血の気が引いた頭の中は真っ白だった。そして、その真っ白な頭の中に記憶が少しずつ蘇ってきた。

その記憶を完全に取り戻すのにそう時間はかからなかったが、記憶が戻った代わりに俺はその場に立っていられなくなり、崩れるようにベンチに座りこんだ。

置いてきた…。

忘れてきた…。

携帯……机の上だ。

なんということだ。今日のことは、昨夜何回もシミュレーションしたはずだ。なのに、なんという失敗を！！これじゃ、連絡なんてある訳がない！！

いくら興奮していたとは言え……どうする！？ 携帯！

あの時、ベンチに力なく座りこみ肩を落とした俺は、きっと他人が見たらかなりヤバイ奴だっただろう。

どうしよう

どうしよう

どうしよう

そんな俺に追い打ちをかけることが起きた。もうひとつ、思い出してはいけないことを思い出してしまったのだ。

バッグも忘れてきたじゃないか！！！

俺は、バッグまで机の下に置いたまま会社を飛び出してきた。要するに『手ぶら』で飛び出してきた訳だ。携帯だけじゃなくバッグまで…あのバッグ中には財布、家のカギ、車のカギ…大切なものは全部、会社に置いたままだ。

「何やってんだよ！！」俺は自分の馬鹿さ加減に呆れて地面を蹴った。

腕時計を見ると、時間は昼の12時を回っていた。

今ならランチタイムでみんな外に出払っているはずだ。

取りに行くか？携帯電話とバッグ…

最悪、携帯は諦めたとしても、バッグだけは無いと困る。財布と
その中のキャッシュカードにクレジットカード。それから部屋の力
ギと車の力ギ…。

どうする？…俺！

今なら昼休みだし…人が少ないはず…とは言え、まったく無人に
なっている訳ではない。

社内で弁当を食べるヤツもいれば、出前を取るヤツもいる。そし
て、なによりも厄介なのは…夏樹だ。

夏樹は、以前は毎日俺と昼飯を食っていたが、課長になった
途端毎日『愛妻弁当』を持ってくるようになった。

…無理だ。

どう考えても、社内には入って行けない。だいいち、どんな顔を
して入って行けと言うんだ。

俺は、社長をぶん殴って飛び出してきた男だぞ。

俺は公園のベンチで頭を抱えた。

とにかく、俺はもうあの会社には戻れない。と言うか、戻りたく
ない。

でも、どうすればいい？どれだけ考えても、誰かに頼んで持ち出
して貰うという方法しか思い付かなかった。でも、誰に？

真っ先に夏樹の顔が浮かんだが、俺はそれをすぐに消し去った。

アイツにだけは頼めない。しかし、元々人付き合いが苦手な俺に
は、残念なことに他に頼めそうなヤツはいなかった。

…仕方ない。

俺は、腹をくくって立ち上がり会社に向かって歩き出した。

時刻は12時15分、できれば昼休みのうちに事を済ませたい。1
0分ほど歩き会社のすぐ近くのコンビニの前で呼吸を整えた。一度
だけ深い深呼吸をしてから「よし！」と気合を入れて会社へ電話を

しようと携帯電話に手を伸ばした　　が、携帯電話は無かった。

「ああああ！そうかあ！！！」俺は思わず天を仰いだ。

「アホか！」本当に自分がアホに思えてきた。何やってんだ…俺は。

仕方ない、公衆電話を…探すしか…

あああ！！！！

財布も無いのか！！！！！！

「なんだよつ」自分に呆れて今度は笑ってしまった。

さて、どうする？

せつかく、気合を入れて腹をくくって夏樹に電話するつもりだったのにすっかり心が折れてしまった。

もしも、今ここに無料でかけられる公衆電話があっても電話する勇氣は俺にはないかもしれない。

この21世紀の便利な世の中で電話もかけられない自分が情けなかった。ここにあるコンビニの店員に土下座して店の電話を貸してもらおうかとさえ思ったが、さすがにその勇氣もなかった。

どうする？　どうする？　どうする？

何も入っていないのは分かっていたが、無意識に俺は上着とズボンのポケットに何度も何度も手を突っ込み何かないか探したが、出てきたのはシワくちやのハンカチと、一枚の封筒だけだった。

「……あ。これも…か…」もう一つ、大事なことを忘れていた。

この封筒…上着の内ポケットに忍ばせておいた白い封筒…表には『辞表』とバランスの悪い文字が書かれている。

「こいつも…忘れちゃったか…。」思わず天を仰いだ。

社長をぶん殴った後、この辞表を叩きつけて会社を去るつもりだった。この計画は、ことごとく失敗に終わったようだ。ま、辞表など叩きつけたところで、俺はクビなんだろうけど…

「くそ！どつかに10円玉でも落ちてねーかな…」俺は、開き直り足元をキョロキョロしてみたが、当然金なんか落ちていないはずがない。しかし、ここでじつとしていることもできず俺は路地から飛

び出し、

街中をさまよった。

放心状態になりながら歩道を歩いている間も、俺は地面に小銭が落ちていないか注意しながら歩いた。

しかし、1円たりとも落ちていなかった。

世の中そんなに都合良く出来てないか…自分にそう言い聞かせて頭を上げたとき、一件のパチンコ屋が目飛び込んできた。仕事帰りに、たまに夏樹と一緒に来ていたパチンコ屋だが、夏樹が課長になってから一度も足を踏み入れていなかった。

おそらく今後入ることはないだろう。今の俺にはパチンコなんて無縁の世界だ。なにせ1円も持っていないのだから…。

パチンコ屋を横目を通り過ぎようとしたとき、ふと思い出したことがある。

あ…そうだ…もしかすると！

俺は次の瞬間、パチンコ屋に飛びこんでいた。

平日の昼下がり。。

パチンコ屋の客はまばらだった。

ほとんどが、暇そうなおばちゃんと仕事もしないでフラついている若者ばかりだった。

俺ももうすぐコイツらの仲間入りになるのかと思うと少し切なくなつたが、今はそんな感傷に浸っている場合ではない。俺は、店に入るとそのまままっすぐ奥へ進んだ。

たしか、トイレの入り口の所に……

あった!!!我ながら、自分は機転の良さに感心した。

トイレの入り口の前、男子トイレと女子トイレの間の壁にテープルがあり、そこには小さな機械が2台並んで置かれていた。

【無料携帯電話充電器】

店がサービスでやっている無料の急速充電器だ。

しかし、こんな機械…使ってるヤツを見たことないが今日はどうだろう。

いた！あるぞ！

充電器の前には、確かに白い携帯が1台繋がっていた。デジタルのタイマーは『09』となっていた。

さりげなく近づき、周りを見る。幸い、この携帯の持ち主はパチンコに興じている最中らしい…。

充電器の説明書が置いてあった…：…見てみると『20分で充電完了』と書いてある。

もう一度、その機械に目をやると、デジタル表示が『10』に変わった。

あと10分ということか…。

俺は、一度その場から離れて、周りに誰もいないことを確認してからその他人の携帯に近付いた。

「ちよつと借りるだけ…すぐ返すから」

自分に言い聞かせるように、携帯から充電ケーブルを引き抜き足早に店の外へ出た。

よし！誰にも気付かれていないようだ。

「これって立派な犯罪だよな…」

と、少々心が痛んだが、考えてみれば数時間前に社長を殴ったのだから立派な犯罪ではないか。

そもそも、こうなったのもすべてあの社長のせいだ。

俺がこんなところで他人の携帯を盗む羽目になったのも、あの社長のせい…。

俺は自分に言い聞かせた。重大な犯罪を犯すヤツは、こうやって罪を上塗りしていくんだな…きつと。

俺は、店の裏側に回りさっそく他人の携帯から会社に電話をかけた。

夏樹の携帯に直接電話するのが一番いいのは分かっていたが、もちろんアイツの番号なんて覚えていた訳もなく、営業一課に電話する以外方法はなかった。

頼む…。

夏樹、直接電話に出てくれ！！

「もしもし、丸川商事営業部第一課です。」

運が良かったのか、悪かったのか、電話に出たのは夏樹ではなかった。

「あ…もしもし。…冬月？」電話に出たのは冬月アヤだった。

「…冬月か？」もう一度聞き返した俺に、冬月は一瞬言葉を失った様だったが、すぐに「…はい。お世話になってます。」と、返事をしてきた。

まわりの連中に相手が俺だと悟られまいとしたのだろう。

さすが…。俺は、冬月の気遣いに感謝した。

見た目や言葉使いこそ今時の感じだが、冬月は、実はすごく冷静で頭のいい女だ。

滅茶苦茶な人事ばかりしている会社だが、冬月を総務部から営業に異動させたことには俺も賛成している。冬月は、俺が営業一課で夏樹を別とすれば唯一、まともに話ができるヤツだった。

「ごめん、冬月…。何も言わずに聞いてくれ。」

「はい。」

「この電話は、すぐに切らないといけないから…ごめんな」

「いえいえ。」

「俺、さつき会社を飛び出したとき、手ぶらで飛び出しちゃったんだよ」

「あ、そうですか」

「で、俺の机の上に携帯があるだろ？」

「えーっと…あ、はい。ございますね。」

「それと、机の下に俺のバッグもあるよな」

「ええ、ええ、そうですね。」

「悪いけど、それ：外に持ち出せるか？」

「え？ すいません、もう一度お願いします。」

「今、俺：会社の近くのパチンコ屋から電話してるんだけど…：持ってこれないか？」

「え〜つと、少々お待ちください。」と冬月が言ったあと受話器からは、保留メモデイが流れはじめた。普段、自分の会社に電話することなんて滅多にないので気付かなかったがこの会社の保留メモデイは『となりのトトロ』だった。

早くしてくれよお…

こうしている間にも、この携帯の持ち主が盗まれたことに気付いていないか気がかりで仕方なかった。

となりのトットロ、トット〜ロ…と何回か繰り返した後、突然その陽気なメモデイは消え、代わりに冬月の声が聞こえてきた。「お待ちせしました。ご依頼の件、了解いたしました。」

「マジ!? 大丈夫!? ありがとうございます！」

「はい。それでは、後ほど…」

「ありがとうございます！ じゃあパチンコ屋：あ、やっぱり隣の本屋で待つてるから！」

「はい。かしこまりました。失礼致します。」冬月は最後まで冷静だった。

電話を切った俺は、小さくガッツポーズをし、本気で冬月に感謝した。

よかった。夏樹に頼むつもりだったが、冬月がいたじゃないか。なぜ気付かなかったのだろう。

夏樹に頼むよりも、冬月に頼む方が全然気が楽だった。それにしても、冬月はどうやって俺の机から携帯とバッグを持ち出すつもりなんだろう。

俺が会社を飛び出したあと、恐らく誰かが俺の携帯に電話をかけたはずだ。そして、持ち主を失った俺の携帯の着メロが机の上で鳴り響いたはずだ。

そう『となりのトトロ』が…。

俺の着メロと会社の保留メロディが偶然にも同じ『トトロ』だったことに妙な運命を感じそうになったが、それは大きな勘違いだと首を横に振った。

俺のトトロが鳴れば、俺が携帯を忘れたこと、ついでにバッグも忘れたことを誰もが気付くだろう。

それが、突然なくなっていれば「誰が持っていた？」ということになるだろう。

本当に冬月は、携帯とバッグを持ち出せるのだろうか？

あの時、冬月は俺の話に適当に合わせていただけで、こんな俺のためにそこまでリスクを負うようなことをしないのではないか。今さらながら不安になってきた。

しかし、ここは冬月を信じるしかなかった。

俺は、パチンコ屋の駐車場を横切り隣のビルの1階にある本屋へ向かおうと歩き出したが、すぐに足を止めた。

「やべー！携帯返さなきゃ！」そういえば、あれから何分たったのだろうか？

タイムリミットは10分。たぶん、まだ10分は経っていないはず。今なら、そつと返しておけば間に合う…はずだった。

俺が、パチンコ屋の店内に入るとトイレの前では何人かが深刻な顔をして話していた。

その光景を見て、何が起きているのか俺には一瞬で理解できた。

充電中の自分の携帯が無くなっていることに気付いた持ち主が、店員に

何やら訴えていた。

恐る恐るそのすぐ脇を通り過ぎると、どうやら俺が盗んだ携帯の持

ち主は

20代半ばの金髪の男らしく、そいつは「警察を呼べ」とかなんとか物騒な

話をしていた。

俺は、ズボンのポケットの中でギュツとその金髪男の携帯を握りしめた。

「どうするかな…」

こんなとき、冷酷非道な奴なら何も考えずに携帯をその辺に放り投げってしまう

のだろうが、窮地を救ってくれたこの携帯の持ち主にそこまでする気にもなれず

俺は、気付かれないように休憩コーナーのテーブルの上にそつと携帯を置いた。

そして、逃げるようにパチンコ屋を飛び出して隣のビルへと急いだ。

本屋に向かう途中、何度かパチンコ屋を振り返ったが誰も俺を追いかけては来なかった。

本屋に入り、店内を一回りしたが冬月の姿はなかった。

さすがに、そんなにすぐ来れるはず無いよな…。

俺は、深いため息をついて目の前にあった読みたくもない本を手を取った。

俺が偶然手にした本のタイトルは『リバーズ/逆転』という名前の小説で、俺は

よく知らないが、なんとか大賞という有名な賞を受賞したらしく20冊近くが平積み

されていた。作者は、新人の美女作家ということで話題になっているようだ。

大袈裟なポスターには作者の横顔の写真が出ていたが、サングラスをかけていて

本当に美人なのかどうかは分からなかった。

俺は、他に行くあてもなく、ただここで冬月が来るのを待つしかできない身だ。

冬月がすぐに会社を抜け出せるとは思えない。

長期戦を覚悟して、俺はこの本の表紙をめくった。

偶然手にした小説を読み始めて、俺は5分もかからずに夢中になっていた。

普段、本などというものには無縁の生活を送っていたが、こうしてたまに

小説を読むのもなかなか面白いものだ。

基本的に活字嫌いのこの俺が、この小説に夢中になったのには理由があった。

最初この本を手にしたとき、タイトルの『リバーズ／逆転』というのを見て

俺は、『スポ根もの』の小説かと思った。

よくありがちな”弱輩チームが努力と根性と友情でライバルチームに逆転勝ち

する”とかいう…

しかし、読み進めていくうちにそうではないことがすぐに分かった。

俺は、最初の1ページ目から引き込まれた。

* * * * *

リバーズ／逆転

第1章 『決意』

私は殺していない。

アイツを殺したのは間違いなく私ではない。

なのに、この状況はいつたい何だ！

何故、私は拘留所の中にいる？

「関係者全員から事情を聞いているから」と言われ、半ば

強制的に警察（じい）に連れて来られてから3ヶ月が経った。

接見の弁護士には、何百回、何千回と無実を訴えてきたがいまだに何の進展もない。

はじめのうちは「何があってもお父さんを信じてるから！」と涙ながらに話していた妻と子供たちも、今や面会にすら来なくなつた。

弁護士に「妻と子供たちはどうしている？」と聞いても、うまく話をそらされてしまう。

これが冤罪ということとは、ちょっと調べればすぐに分かるはずだ。それなのに、私はここに拘束されたままでいる。

私の知らないところで何かが動いていることは明らかだった。

しかし、私にはどうすることもできない。

私は、決意した。

私は、ここを出る。

そして、真犯人をこの手で捕まえる。

そして…

というはじまりだった。

店内に貼られたポスターの解説によると、どうやら、この主人公がこのあと

更なる不運に見舞われて転落の人生を歩んでいくということだ。

しかし、もちろんそれだけでは終わらない。そのあと、主人公は事件の真相と

真犯人を突き止め人生を大逆転させるという内容のようだ。

俺は、読みながらこの主人公と自分をダブらせた。

この主人公は俺だ。

俺は、今まさにこの小説の主人公のように転落人生の第一歩を踏み出したのだろうか。

社長を殴り、そのまま会社を飛び出した。恐らく俺がそのまま会社をクビに

なるのは間違いない。場合によっては障害罪で訴えられるかもしれない。

そうなれば、俺もこの主人公のように拘置所に入れられるのだろうか？

俺はこの先どうなっていくのだろう。収入もなくなり、わずかな貯金もすぐに

底をつくだろう。家賃も払えずアパートも追い出されるだろう。

と言って、孤児だった俺には帰れる場所は……ない。

転がり込める友達もいなければ、もちろん彼女もいなかった。

いつそのこと傷害罪で捕まって刑務所に入れば、住まいも食事も保障される

のかもしれないが、人を殴った程度ではすぐに釈放されてしまう……

その後はどうする？

前科者を誰が雇ってくれる？

それ以前に俺にはやることがある。

どうしても果たさなければならぬことがあった。

そう、この人生をかけてでも果たさなければならぬことが……。

第1章を読み終え、第2章に入ろうとページをめくった時だった。

「春山さん」

すっかり本に夢中になっていたので、突然名前を呼ばれて心臓が止まりそうになった。

振り返ると、そこにいたのは両手いっぱい荷物をつら下げた『冬月アヤ』だった。

「あ、冬月……。急に变なこと頼んでごめんな！」

と言いながら、こんな時に呑気に小説を夢中になって立ち読みして

いたことを

隠すように、小説をさりげなく後ろの平積みされた山の上に戻した。

「春山さん…。」

気のせいか、冬月の声が震えているような気がした。

俺は、何の罪もない冬月にこんなことをさせてしまったことを

心から申し訳なく思った。

「冬月…ごめんな。」

軽く頭を下げてもう一度謝った。

そして、「ありがとう。大丈夫だったか？マジで助かった…」

と言いかけた時だった。

俺の言葉をさえぎって冬月が口を開いた。

「春山さん…！」

冬月の声は、さっきとは違い何かを決意したような力強い声だった。

「ん？」

「春山さん。私、会社辞めてきました。」

「ふ〜ん… ええええっ！！！！？？？？」

冬月の告白に、俺は思わず大声を出してしまった。

静まり返っていた本屋の店員と客が一齐に俺と冬月に注目した。

俺は、申し訳なさそうに近くにいた客の何人かに軽く頭を下げ

今度は、声を押し殺して冬月に迫った。

「おい！冬月！辞めたってどういうことだよ！」

冬月は、真剣な顔でしばらくのあいだ俺の目をじっと見つめていた。

その顔は、今にも泣き出しそうにも見えだし、笑い出しそうにも見えなかった。

「…おい。…冬月？」

俺が会社を飛び出してから今までの数時間の間に、冬月に…いや、

あの会社で何が起きたのか分からないが、冬月に何かがあったことは間違いのないようだ。

その『何か』に俺が関係していることも間違いないだろう。

俺はここで冬月が大声で泣き出すのではないかと腫れものにも触るかのように出来るだけ優しい声で話しかけた。

「…ふゆつき？」

が、冬月から返ってきたのは意外な一言だった。

「春山さん。ランチご馳走してください！ 私、お昼まだなんです。」

そう言って冬月は微笑んだ。

それは、いつもの爽やかな笑顔だった。

*

*

*

*

*

突然の冬月の告白に俺は言葉を失っていた。

口を開いたのは冬月のほうだった。

「さあ、行きましょ！」

そう言うと冬月は、両手いっぱい抱えた荷物をドサツと床に置いて店の外へと出て行った。

ランチはどうでもいいが、確かに場所は変えた方がよさそうだ。

「あ、ああ…」と言つと

俺は、床に置かれた荷物を慌てて拾い上げて、冬月のあとを追いかけた。

冬月が持ってきた荷物は、俺のバッグの他に女性用のトートバッグが2つと、会社の手提げ袋が1つ、そして小型のスーツケースが1個。

男の俺でも持ち切れない程のこれだけの荷物をここまで運んできた冬月に

改めて驚かされた。

スタスタと歩道を歩いている冬月のうしろを大荷物を抱えて

追いかけながら考えた。

さつき、冬月が言った「会社を辞めてきた」とはどういうことなんだ？

この荷物の量を見る限り辞めてきたというのは冗談ではなさそうだが、

冬月が突然会社を辞める理由が、いくら考えても俺には分からなかった。

いったいあの会社で何が起きているんだ？

冬月は何も言わずに歩道をスタスタと歩いている。

俺は、いったん立ち止まり肩に食い込んだ黒いトートバッグを反対の肩に

かけ直して、冬月の隣までかけ寄った。

「なあ、冬月……」

冬月に聞きたいことは山ほどあったが、何から切り出せばいいのか分からなかった。

そのとき、冬月が口を開いた。

顔は正面を見たままだった。

「春山さん、なに食べますかあ？」

どうやら、ランチをおごれというのは冗談ではなかったようだ。

「あ、ああ……何でもいいよ」

本当に何でもよかった。

交差点を過ぎると、ラーメン屋の看板が見えた。

なんとなく沈黙が嫌で「そこにラーメン屋あるけど……」と声をかけてみたが

「春山さん、安く済ませようとしてるでしょ」

とあっさり切り返された。

「いや、そういつつもりじゃ・・・」

本当にそういつつもりじゃなかったが、確かに冬月の言つとおり

こんな時にラーメン屋はどうかと自分でも反省した。

しかし、女性と二人きりで食事などしたことがない俺は、こんなとき
どういう店に入れば良いのかまったく見当がつかなかった。

しばらく二人で通りを歩いていると、冬月が無言で俺の肩に手を伸ばしてきた。

「ひとつ持ちます。」

「あ、ああ・・・悪いな・・・」

と、右の肩に食い込んでいた黒いトートバッグを冬月に渡した。

「いえ、これ私のですから」

考えてみればそうだった。いま渡したトートバッグ以外にももう一つ、ピンクの

トートバッグ、それから会社の大きな紙袋、それと小型のスイーツケース。

すべて冬月の私物が詰まったものだった。

…と言って、「全部自分で持てよ」なんて、恐ろしくて言いだせなかった。

冬月は、俺から受け取ったトートバッグを軽々と肩にかけると

「ここにしましよう！」

とニツコリ微笑んで一件の店を指差した。

冬月が指差した先には、いかにも重たそうな木製のドアに小さな金色のプレート

が埋め込まれていて、そこには【シェ・フルール】と上品な文字が刻まれていた。

この通りは毎日通勤で歩いていたはずなのに、こんな店があったことを俺は

初めて知った。

「ここ？ …いいけど」

ドアの横に大きな三色の国旗が垂れ下がっていた。

「イタメシかあ…」

「フレンチです！ ふ・れ・ん・ち！」

「あ、そっか。」

俺は苦笑いしながらナイフとフォークで料理を食べている自分の姿を想像してみたが、それはとても恐ろしい光景だった。

「ここ、お箸も使えるフレンチだから大丈夫ですよ！」

どうやら冬月に俺の心の中を覗かれていたようだ。

「あ、あはは」

俺が困った顔を見ると「さあ、行きましょ！」と、

両手をふさがれた俺に代わり、冬月が重い木製ドアを押すと

カランコロンと心地のいい鐘の音が響いた。

「いらっしやいませ」

店に入ると蝶ネクタイの店員に、薄暗い店内の一番奥のテーブルに案内された。

思ったよりも広い店内は、OLらしき若い女性でいっぱいだった。

男性客の姿は、俺が見たところ一人もいない。

普段からOL達はどこで昼メシを食っているのだろうと疑問に思っていたが

こういうことか。長年の疑問が解決された気がした。

両手にぶら下げたバッグとスニーカーを邪魔にならないように壁際に置いて

席に座ると清楚な真っ白いブラウスを着た女性の店員が「いらっしやいませ」と、

水が入った魚の形をしたガラス瓶とコップ、そして必要以上にバカでかい

メニューを手渡してきた。

黒い皮のカバーのメニューを恐る恐る開いてみると、中には左右に1枚ずつ

メニューが書かれた紙が挟んであった。

左側には『ランチタイムMENU』、右側には『DRINK MENU』と書いてある。

こんな店で何を頼めばいいんだろう?と心配したが、その心配は無用だった。

なぜならランチタイムのメニューは、ひとつしかなく、メインの料理を肉か魚の

どっちにするか選ぶだけだったからだ。

さっきの女性店員を呼び、冬月は肉、俺は魚でランチメニューを注

文した。

店員が注文を繰り返すと、冬月が思い付いたようにもう一度メニューを開き

しばらく眺めたあと「それと生ビール2つください。」と言って、パタンと

メニューを閉じた。

「あ、ビール…いつちやう?」

俺が苦笑いしながら聞くと「もちろん」と短く答えて冬月は笑った。

こんな冬の笑顔を見ていると、さっきの言葉が悪い冗談に思えてしかたなかった。

注文を終え、俺はコップの水を一気に飲み干してから切り出した。

「なあ…冬月。会社辞めてきたってどういつこと? 何があったの?」

ずっと気になっていたことをやっと聞けた。

すると、冬月は静かにこう言った。

「春山さん、その前に春山さんが答えてくださいよ…。春山さんこそ、なんで急に

社長のこと殴ったりしたんですか?」

冬月の言う通りだった。

冬月のことを問い詰める前に、まず俺がすべてを話すのが筋だろう。

「…だよな。まずは、俺だよな。」

と、俺は空になったコップに目を落とした。

しばらくして、生ビールが運ばれてきた。

居酒屋の感覚で、生ビールと言えば持ち手の付いた中ジョッキしか

知らなかったが、さすがはフレンチレストラン。

琥珀色のよく冷えていそうなビールが、お洒落な細長いグラスに注がれていた。

グラスのふちギリギリまできめの細かいクリーミーな泡が浮かび、底からは

炭酸の気泡が立ちあがっている。

いつもの習慣で、俺はグラスを手にとってから乾杯しようと冬月のグラスに

自分のグラスを近付けたが、冬月はグラスをまっすぐ自分の口に運んで

涼しげな顔をしてビールを一口飲んでグラスを元の場所に置いた。

それもそうだ…。

俺はいつたい何に乾杯しようとしていたのだろう。

俺も、グラスを口に運びよく冷えたビールを一気に半分ほど飲むと
グラスを静かに置いてから口を開いた。

「冬月…。」

「はい。」

「今朝、俺が社長を殴った件だけ…。」

「はい。」

「悪いが、今の俺…上手く説明できる自信がないんだ。

いつか必ず冬月にはちゃんと話す。約束する。絶対だ。だから今は…

今、俺が話せる部分だけを話すけど許してくれ。」

俺はこつ前置きをしてから話をはじめた。

まず、俺が今朝、社長を殴ったのは発作的にやった訳ではなく
計画的だったこと。何日も前から何度もシミュレーションして

いたのに本番はその半分も達成できなかったこと。

上着の内ポケットに辞表を用意してあって、社長を殴ったあと叩きつける

つもりだったが忘れてしまったこと。

社長を殴り、クビになるかもしれないが後悔はしていないこと。

ずっと前から我慢してきたが、ついに我慢の限界を超えてしまったこと。

できることなら、俺一人の胸にカギをかけて閉まっておきたかったこと。

これらを、一気に冬月に打ち明けた。

我ながら、かなり支離滅裂な説明だった。たぶん誰が聞いてもこの説明で

納得するヤツはいないだろうと思った。

実際、俺が話をしている間、冬月は相槌も打たずにキョトンとして俺の

説明を聞いていた。

そして、話の途中、料理が運ばれて来ていたことに二人とも気付いていなかった。

ひとしきり、話をしたあと我に返った俺は目の前に置かれた料理に

目をやった。

「あ、料理来てたんだ…。」

「…ですね」

冬月は、”心ここに在らず”といった感じだった。

恐らく、今の俺の説明を冬月なりに理解しようとする中で整理していたのだろう。

だが、しばらく沈黙したあと

「食べましょう」

と言って冬月は微笑んだ。

どうやら、整理は失敗したようだ。

料理は想像以上に美味かった。

冬月の言うとおり、本格的なフレンチにも関わらず箸が添えられていたのが

ありがたかった。

そして、何よりも冬月がステーキを箸を使って食べていることに俺は感謝した。

とても食べにくそうではあったが…。

俺も冬月も無言で食べていた。

他人から見ると、俺と冬月はどう見えるのだろうか？

兄弟？ 恋人同士？ それとも…

半分ほど、食べたころ沈黙を破ったのは冬月だった。

「あ、春山さん。すっかり忘れてました。」

と言って、冬月が自分のセカンドバッグを開いて何かを探しはじめた。

「はい、コレ。」

冬月がバッグから取り出したのは、俺の携帯だった。

「ごめんなさい。遅くなって」

そうだった。いろいろあってすっかり忘れていた。

俺はこの携帯とバッグを取り戻したくて冬月を呼んだのだ。

「あ、ああ…すっかり忘れてたわ。ありがとな。」

俺は携帯を受け取ると同時に携帯を開いて着信履歴を確認した。

携帯の画面には【着信あり：1件】と表示されていた。

その着信履歴を開くと、発信者は案の上『夏樹雄介』となっていた。携帯の着信履歴で夏樹の名前を見て、ふと思った。

もともと俺はこの携帯を取り戻すため、夏樹に頼むつもりで会社に電話をかけた。しかし、電話に出たのは冬月だった。

もしあの時、夏樹が電話に出ていたらどうなっていたのだろうか？

少なくとも、今ここでこうしてフレンチを食べる羽目にはなっていないだろう。

もしあの時、夏樹が電話に出ていたら…

それでも、冬月は会社を辞めていたのだろうか？

やはり、冬月が会社を辞めたのは俺のせいなのだろうか？

そのことを、どうしても確認したくて俺は顔をあげた。

と、同時に冬月が先に口を開いた。

「春山さん。私が会社辞めたからって、春山さんが責任を感じないでくださいな。」

凶星だった。

こいつは本当に人の心が読めるのかと少し怖くなった。

「え？」

俺が困惑した表情を見せると冬月が続けて言った。

「今度は、私の番ですね。」

「は？」

俺は、冬月の言った意味がすぐに理解できなかった。

「私の番ですよ。私も会社を辞めてきた理由を説明しないと……」

そういうことが

「あ、うん。何があったの？」

俺が聞くと、冬月は静かに語り出した。

*

*

*

*

*

冬月は、しばらく沈黙した。

自分が会社を辞めた理由を、俺にどうやって説明するか考えているようだった。

サラダの中のミニトマトを箸で転がしている。

俺も、冬月の心の準備がととのうまで無言で待った。

そして、ようやく冬月が動いた。

ビールグラスを手に取り一口飲んだ。

それを見て、俺も残りのビールを一気に全部飲み干して、空のグラスを置いた。

俺がグラスを置いたのとほぼ同時に冬月が話しはじめた。

「えっと…、さっきの春山さんじゃないけど、私も何から話せばいいのかよく

分かんないな…。

まず、最初にこれだけは言っておきたいんですけど…私が会社辞めたのは、

本当に春山さんのせいじゃ無いですから責任感じたりしないてくださいね。

あ、でもきっかけを作ったのは春山さんかもしれないね。

もし今朝、春山さんがあんなことをしなければ今日いきなり辞めることも無かった

でしょうから…。

あ、だからと言って、春山さんのせいだって言ってるんじゃないですからね。

春山さんには、逆に感謝しているくらいです。

ごめんなさい。なに言ってるか分かりませんよね。

辞めた理由…。そう、理由ですよ。

えっとお、なんて言えばいいのかな…。こういふことかな…。」

そういうと冬月は、テーブルの隅に置かれていた水の入った瓶を手に取った。

ワインの空き瓶を水差しとして再利用したのだろうか。

高さ30センチほどのガラス瓶、というよりもボトルと言った方がぴったり

なのかもしれない。

魚の形をしたそのガラスのボトルは、上の注ぎ口が魚の口に見立っている。

そして、中の水には何かがフワフワと漂っていた。

さっき飲んだ時にほのかにレモンの香りがしたので、この浮いているものは

レモンの果実なのかもしれない。

やっぱり、「こつこつお洒落な店は”お冷や”まで気取ってるんだな」と感心した。

冬月は、その魚のボトルを持ち上げて、空になっている俺のコップに水を注ぎ

はじめた。

突然の冬月の行動を、俺は何も言わずに見つめていた。

冬月が瓶を傾けると、魚の口からは水がトクントクンと音をたてて空のコップを

満たしはじめた。

8割方コップに水が入ると、冬月はボトルを元に戻し水を注ぐのをやめて

こつこつ言った。

「つまり、こつこつことです。」

さっぱり意味が分からなかったが

「…うん。」

と、一応分かったフリを試してみた。

「…って、分かんないですね。」

分からなくてよかったのか…。

こいつは何が言いたいのだろう。

「今まで、ずっと私は…と言っても、一年くらい前からですかねえ
ずっと我慢してたんです…。」

冬月は、そう言うと今注いだばかりの俺のコップをおもむろに持ちあげた。

何をするのかと思って見ていると、冬月はおしぼりの白いタオルをテーブル

の上に広げた。そして、その真ん中にコップを置いた。

冬月が何をしようとしているのか、さっぱり分からなかったが、俺はそのまま

事の成り行きを見守っていた。

「このくらい。そう…ずっと、これくらいまで我慢してたんです。

8割くらいかな…。」そう言うと、冬月はコップに注がれた水の表面の高さに

人差し指を水平に並べた。

もの凄く抽象的な表現だったが、なんとなく冬月の言いたいことが

理解できた。

女という生き物は、みんなこういう物の例え方をするのだろうか？
面倒くさい生き物だな。と思ったが、ずっと前から冬月が何かに我慢していて、

それが限界の8割ぐらいだった…ということは十分伝わってきた。

そういえば、俺もついさっき同じようなことを冬月に言ったような気がする。

俺のは、もっと支離滅裂な表現だったが…。

俺も、ずっと我慢してきた。だが、ついにその我慢が限界を超えた。

そして、あの行動に出たのだ。

冬月が言いたいこともこういうことだったのだろうか？

「さっきの、春山さんの話…」

冬月が言った。

「ああ、何が言いたいかわかんなかったよな…。」

俺が苦笑いして言うと

「はい。全然」

と、冬月は素直に答えた。

「悪かったな……」

俺は、困った顔をして右のほっぺたを搔いた。

「冗談ですよ。でも、確信部分はわかりませんが、たぶん春山さん私と同じだったんだと思います。春山さんも私と同じ、このコップの水だったんですね……。」

そう言うと、冬月は再び二人の間に置かれたコップを大袈裟に覗き込んだ。

そして「……で、」と、言ったあと再びボトルを手に取り、コップにゆっくりと

水を足しはじめた。

冬月はコップに顔をぐっと近づけて「ずっと我慢してたのが……」
と言い

ながら少しずつコップに水を注いでいる。

そしてコップのふちギリギリまで水が満たされるまでの間、冬月はその模様を

実況中継でもするかのように

「ああ、もういっぱいいい…あああ、もうだめえ・・・」

と言いながら、まるで無邪気に遊んでいる子供のような顔で少しづつコップに

水を垂らした。

コップに注がれた水が、ふちいっぱいまで満たされたところで冬月は手を

止めた。

コップの水は表面張力でコップの高さよりも2、3ミリ盛り上がって見えた。

あと1滴でも水を足せば間違ひなく溢れてしまうだろう。

そんな微妙な光景を眺めながら冬月がぼそっとつぶやいた。

「これが、昨日までの私の気持ち…。」

今度は冬月の言っている意味がはっきりと分かった。

「そして、俺の気持ち…か…」

俺もつぶやいた。

確かに、冬月の言つとおりだった。

コップのふちギリギリで表面張力しながら耐えているこの水は

俺と冬月なのかもしれない。

何か些細なきっかけさえあれば、いつでも感情が溢れてしまう状態だったのだろう。

そのきっかけが、ついに起きたと言っことか。

冬月にとって、そのきっかけが俺のあの行動だったのだろう。

俺と冬月は、無言でそのコップの水を見つめていた。

「一度こうなったら、この水を減らすのって難しいですよね…」

冬月が言った。

「コップを持ち上げようとしてもこぼれちゃうしな」と俺が言っこと

「そうですねですよねえ」と言いながら冬月が、サラダの皿から、ミニトマトを

素手で摘まんだ。

そして、なんのためらいも無く表面張力で盛り上がっている水の表面に落とした。

「ドーン…」

ミニトマトはコップの底に沈み、かわりにギリギリで留まっていた水がコップから

溢れだした。

俺は、そこではじめてコップの下に敷いたタオルの意味が分かった。それにしても、冬月がそこまで我慢していた事とは何だったのだろうか？

俺とは違い社内で友達も多そうだし、上司達ともうまくやっていたように見えた。

冬月は、そのキャラクターから営業一課のアイドル的存在でみんなから好かれて

いたはずだ。

「冬月が、そんなに我慢してたことって、何だったの？」

俺は、単刀直入に聞いてみた。

すると、冬月の顔が一瞬暗くなったように見えた。

「あ、ごめん！言いたくなければいいよ。」

俺は慌てて手を振った。

「違うんです。私、嬉しいんです…。」

「え？ 嬉しい？」

「はい。今まで、こんな話できる人…会社にいなかったから」

『今まで、会社にいなかった。』って、俺もその会社にいたんだけど…」

と思ったが、あえてそこには触れずに

「そうなの？ だって冬月、会社に友達いっぱいいるじゃん」と聞いてみた。

「うん…友達っていうか、みんなそこまで深く付き合っていないから」

そうだったのか。

俺に比べりゃ、冬月の交友関係は相当『深い付き合い』だと思うのだが。

やはり、女というのは不思議な生き物だと思った。

「実は、私…」

冬月が、真剣な顔をして言った。

「うん。」

「私、実はずっとセクハラを受けてたんです。」

「は？」

冬月は、平然と喋ってのけた。まるで、他人事のような口ぶりだった。

しかし、よく考えてみれば若い女性にとってこんなことを俺の様な男に告白するのは、

相当な勇気だったに違いない。

しかし、俺は、何と言ってよいのか分からなかった。気の利いた言葉のひとつでも

言えればよかったのだが。

「そうだったんだ……」

としか言えなかった。

正直、男の俺にはセクハラを受けている女性の気持ちを100%理解してやるのが

できるのか…自分でもよく分からなかったが、会社を辞めるほどのだから、それは

相当ツライことなのだろう。ということは俺にも容易に推測できた。

そして、そこでひとつ単純な疑問が湧いてきた。

「誰に？」

湧いてきた疑問を思わず声に出してしまった。こんな質問をして冬月は気を

悪くしないだろうか？と少し心配になったが、質問の答えはすぐに返ってきた。

「社長です…。」

そう言いきった冬月の顔は怒りと悲しみと憎しみを押し殺している様に見えた。

「社長！？」

冬月がセクハラを受けていた相手は社長だった。

そう、俺が今朝ぶん殴ったアイツだ。

アイツならやりかねないな。と思った。

そして、冬月がアイツにセクハラを受けていたことなど全然知らなかったが

今になって思えば、もっとボコボコにしてやれば良かったと後悔した。

「うん。…丸川。」

冬月がうなずいた。

社長のことを『丸川』と呼び捨てするのを聞いて、冬月の心の傷と憎しみの

深さを知った気がした。

その時、俺たちのテーブルに店員がやってきた。

「空いたお皿、お下げしてもよろしいですか？」

店員はそう聞いてきたが、二人とも料理はどれも中途半端に残っていて

空いたお皿は一枚もなかった。

しかし、すっかり冷めきった料理を今さら食べる気にもならず

二人同時に「あ、はい」と答えると、店員がまだ料理が残っている皿を

片付けながら「デザートご用意してよろしいですか？」と聞いてきた。

「へ、デザートも付くんだ……」

「うん。ここのデザート、美味しいんですよ」

と俺に言った冬月だったが、店員にはこう答えた。

「すみません。デザートの前にビールおかわりお願いします。」

冬月は冗談を言っているのかと思ったが、そうでもなさそうだった。

店員もキョトンとしていたが「はい、ビールおひとつで?。」と注文を確認してきた。

「春山さんも飲みますよね?。」

「あ、うん…。」

「じゃあ2つ」

「はい、かしこまりました」

こんな時にたいしたヤツだと思った。

それとも、こんな時だから飲むのだろうか?

そしてまた、よく冷えた新しいビールが俺と冬月の前に運ばれてきた。

俺がそのビールグラスに手を伸ばした時だった。

「カーーン」

とグラス同士がぶつかる音が聞こえた。

「乾杯」

冬月が小ぢくくじぶちいて、ビールをおいしそじに口にした。

第02章 『冬月』

私は今日、会社を辞めた。

自分でも不思議なくらい未練や後悔はなかった。

もともと希望して入った会社ではなかった。

私には両親がいなかった。兄弟もない。

と言つて天涯孤独という訳でもなかった。

私は、ずっと叔母夫婦に育てられてきた。

私の実の両親は、私が生まれてすぐに事故で死んだと聞かされている。

顔も知らない人達なので実の両親には何の感情も持たなかったが

それは、私がひねくれているからなのだろうか…。

私を引き取つて育ててくれた叔母夫婦には、実の子供がいなかった。

しかし出来なかった訳ではない。作らなかった。

子供が嫌いだったのだ。

そんな叔母夫婦に私は“仕方なく”引き取られ、育てられた。

このような場合、『実の子ではない』というのを必死に隠して育てるのが普通だと思うが、それはテレビドラマの中だけのようだ。もっとも、私はテレビドラマなど、ほとんど見たことはないが…。私に物心がついた頃、叔母達は私に告げた。

「あなたは、私たちの本当の子じゃない」…と。

それから、私は叔母のことをママと呼ぶのはやめた。

『叔母さん』と呼ぶようになった。

そのせいだろうか？

その頃から叔母は私とほとんど会話をしなくなった。

もともと無口な人だったが、私との会話は必要最低限になった。

そして、私を抱きしめることもなくなった。

叔父…つまり私の“育ての父”は、大企業の役員をしており、私達は経済的には恵まれていた。

叔父は、忙しい人でほとんど家にはいなかった。たまに帰ってきても叔母同様、私と話をすることはなかった。

私は、欲しい物は何でも買ってもらえたいし、友達の中でも一番いい服を

いつも着ていた。

しかし私は、どんなに高価な人形よりも、どんなに可愛いワンピースよりも、

叔母に抱きしめて欲しいと思っていた。

優しい言葉をかけて欲しかった。

温かい家族の団らんというものを味わってみたかった。

私は、子供のころ夢が3つあった。

1つ目は、叔母に抱きしめてもらうこと。

2つ目は、親子三人で手をつないで歩くこと。

そして、3つ目は、小説家になること。だった。

残念ながら、1つ目と2つ目の夢は、叶わないまま私は大人になった。

叔母の子供嫌いは変わることがなかったし、父は他界した。

最後の夢は

私は、幼いころから本を読むのが好きな子だった。

家にいる時間のほとんどを、本を読んで過ごしていた。

友達がいな訳ではなかったが、私にとって本が一番の友達だった。いろいろな本を読んだ。

本を読んでいると、辛さ、悲しさ、寂しさを忘れることが出来た。

そして私は、いつしか小説家になりたいと思った。

しかし、叔母も叔父も反対した。

『小説家など職業ではない』

と一言で切り捨てられた。

そして、私は叔父の勧めで、ある大きな会社に就職した。

その会社は、叔父の仕事の取引先でコネがあつたのだ。

その会社の名前は『丸川商事 株式会社』と言った。

* * * * *

私は、就職してすぐに家を出た。

これが、私が出した『丸川商事』で働くための条件だった。

反対されると思ったが、意外にも叔母も叔父も簡単に了承した。

それもそうだ…考えてみれば、私はあの人たちにとってはお荷物だったのかもしれない。

もっと早く出ればよかったと後悔した。

一人暮らしは予想以上に楽しかった。

何しろ、叔母の顔色を窺って生活しなくて良いのが嬉しかった。

就職すると、私は『総務部、経理課』という部署に配属された。

主に社員の給料の計算や、経費の精算などを担当していた。

やりたい仕事ではなかったが、それなりにやりがいのある仕事だった。

そして、あっという間に一年が過ぎた時だった。

ある日、私は、課長に呼ばれた。

『開発部、営業一課』への異動を言い渡された。

入社してわずか一年での異動に私は戸惑った。

通常、5年をサイクルに異動があるらしいが、わずか1年で異動など聞いたことないと同僚や先輩達には不思議がられた。

「なにか問題でも起こしたのか？」

と聞かれたが、そんな覚えはない。

だいたい開発部と言えば、この会社のエリート達が集まる部署だ。

問題を起こして左遷されるような部署ではない。

理由はどうであれ、上の命令は絶対だ。

私は、『開発部、営業一課』で働くことになった。

そして、営業一課で半年が過ぎた頃だった。

私への、セクハラがはじまった。

相手の名前は、『丸川哲也』

『丸川商事 株式会社』の社長の肩書を持つ男だった。

丸川のセクハラは陰湿だった。

はじめは、私のPCへの社内メールだった。

毎日のように

『今夜、食事に行こう』

『今日も色っぽいね』

『スカートが短すぎるぞ』

『私の愛人にならないか』

など…気持ちの悪いメールが私のパソコンに届いた。

もちろん、メールはすぐに削除し一切無視した。

丸川は、メールだけでは飽き足らず、用もないのに営業一課に

顔を出し、私の体を舐め回すように見つめ、人目に付かないように

胸やお尻を触ってきた。

私は、丸川の行動に耐え切れず、直接会って抗議をしようと思い

はじめて丸川のメールに返信した。

『お話があります。お時間を作ってください』と…

こんなメールを送った私が馬鹿だった。

『話があります。時間を作ってください。』

こんなメールを女子社員から受け取ったら、男はどんなことを

想像するのだろうか？

今になって思えば、ほとんどの男は『勘違い』するはずだ。

丸川もそうだった。

丸川は、私がメールをして5分後に返信メールを送ってきた。

『じゃあ、今夜7時に社長室に来てください。』

私は、丸川の指示通り夜7時に社長室のドアをノックした。

「どうぞ」

丸川の声がして、私は部屋の中に入った。

はじめて入った社長室は、とても会社の一室とは思えない作りだった。

部屋に一步足を踏み入れた瞬間、床の感触の異様さに思わず後ずさりした。

趣味の悪い毛足の長いふかふかの絨毯で、思わずハイヒールを脱いだ方が良いのか？

と確認したほどだ。

「脱ぎたければどうぞ」

と、気持ちの悪い返事が返ってきたので、そのまま土足で部屋の奥に進んだ。

丸川は、いかにも高級そうな皮張りのソファーに背中を向けて座っ

ていた。

そして、私が「失礼します。突然すみません。」

と、声をかけると

「いいよ。ここに座って」

と、気味の悪い笑顔で振り返った。

そのとき、『絶対に座るもんか。』と私に決意させたのは、丸川の前に置かれた

ガラステーブルの上に、オードブルとワインが並べられていたからだ。

「待ってたよ。どうぞ、かけて」

丸川は、私のことをパーティにでも招待するかのようになり、反対側のソファへ招いた。

「いえ、ここで結構です。」

本当に”結構”だった。

「まあまあ、そんなに緊張しないで。話があるんだろ？ 座りなさい！」

丸川は、私の”話”の内容をいったい何だと思っているのだろうか。

まさかとは思うが『愛の告白』でもしにきたと思っていたのだろうか？

私は、かたくなにソファアに座るのを拒んだ。そして、こんな部屋に長居は無用だと、手短に用件だけ伝えようと思ったときだった。

「さあ、座りなさい」

丸川が、ソファアから立ちあがって私の背中を押した。

と同時に私は無意識に身体をそらし「やめてください！」と叫んでいた。

そして、丸川から3メートル程の距離を置いてから話を切り出した。

「今日、お時間をいただいたのは社長にお話があったからです！」

「ああ、そう言ってたな」

丸川は、私に拒絶され少しムツとしていた様子だった。

「話とは何だ？」

どうやら、私が『愛の告白』をしに来た訳じゃないらしい。ということに

やっと気付いた丸川は、当てが外れて完全に不機嫌になった。

「私にメールを送るのはやめてください！ 社長のしていることは、

立派なセクハラです。これ以上続くようでしたら…」

と私が言うと、話を最後まで待たずに丸川が口を挟んだ。

「続くようなら…どうするって言うんだ?」

丸川の口端はニヤついていた。

「…わ、私にも考えがあります!」

考えなど無かったが、思わず叫んでいた。

丸川は、ふふつと他人を小馬鹿にしたように笑って言った。

そして、私の言葉を無視してソファから立ち上がると、机の上から

一枚の紙を取り出した。

そして、私に向かってこう言った。

「これを見せてくれるか?」

丸川は、そう言うとその紙を私の目の前に差し出した。

「…これは?」

私が受け取ったその紙には、何人かの名前が書かれていた。

どれも見たことのある名前だった…。

そう、ここに書かれていたのは全員、開発部の社員の名前だった。

「これは…?」

私は、紙から目を離し丸川を見た。

丸川は、何かを企んだような目で言った。

「うん…その前に、キミ…今夜、時間あるかい?」

この男は何を言っているのだろうか。

「え?」

「今夜、食事に行かないか。」

この男には、私がここに来た意味がまったく伝わっていないようだ。

「だから、お断りします!」

私はきつぱりと言い放った。

「ふふ…キミ、そこに書かれている奴らのことをどう思う?」

丸川が言いたいことが分からなかった。

なぜ、こつも話がかみ合わないのかと、私はイラついた。

「どつ…って…みんな開発部の人たちじゃないですか。それが何か

「？」

「そつだ。開発部の連中だ…。実は、最近そいつら生意気でね…」

この台詞を聞いて、この先この男が何を言いたいのか…私には

直感的に分かった。

「…何を言いたいんですか？」

「ああ、この連中には会社を辞めて貰おうと思っている…」

丸川は、簡単に言つてのけた。

この男は、なにを言い出すのだ！！

私の知る限り、ここに書かれた人たちは、間違つてもクビにされる
ような

人材ではない。

それどころか、この不景気の時代、この会社がこれほどの業績を伸
ばせた

のは、この人たちの努力があつたからだ。

「ど、どうしてこの人たちがクビに…！？？」

私は声を荒げた。

「ふふ…怒った顔もなかなか色っぽいね…キミは」

丸川の言葉に吐き気を覚えた。

1秒でも早くこの部屋を出たいと思った。

「さっきも言っただろ…生意気なんだよ、そいつらは」

丸川の顔が一瞬強張った。

このことか…私は思った。昔から、この会社にはこのような突然の解雇通告があると誰かが話しているのを聞いたことがある。

こういうことだったのか…要するに、この男は気に入らない社員は簡単にクビにするのだ。

理由など何でもよい。後からいくらでも理由は付けられる。

この男の卑劣さに怒りで体が震えるのを感じた。

「どうして、そんな話を私に…？」

私は怒りを抑えながら聞いた。

「もしキミが…」

丸川は、自分の顎を擦りながら話を切り出した。その瞬間、私の心の

中に例えようのない不安が立ち込めた。

「私に付き合えば、この連中を助けてやってもいいのだが…」

私の不安は的中した。

「何を言ってるんですか！！！」

私は、隣にあった机に思い切りその紙を叩きつけた。

「あ…そ…。まあ、いいけど…じゃ、やっぱりさよなら…だな。」

丸川は再びソファーにドスンと身を沈めた。

私は、この男に一瞬殺意さえ抱いた。

こんな卑劣な男が、この会社の社長だと思つと情けなくて涙が出そう

だった。

そして、私はしばらくそこに立ち尽くした。

こんな部屋には1秒たりとも居たくなかったが、その場から動けなかった。

「私が…付き合えば………」

私は、何を言っているのだ!?

「私が…付き合えば、この人たちはクビにならないんですね………」

な！なんてことを！私は何てことを言っているのだ！？

自分でも、何故こんなことを口走ったのか…分からない。

でも、どうしてもこの男のことが許せなかった。

「ほほう…、分かってくれたようだな…」

「…約束してくれるんですね」

「もちろん、約束しよう。」

丸川は、悪魔のように口端を上げて笑った。

第03章 『談』

「なあ、冬月？」

「はい？」

「会社…どう？」

「え？ どうって？」

「あ、ああ…うん、とま…」

「春山さんの暴行事件のことですか？」

「ぼー！暴行事件って…あ、でもそっか。で？ どうなんだ？」

「はい。大騒ぎでしたよ」

「…そっか。だよな、なんか冬月にまで迷惑かけちゃってごめん
な」

「いえいえ、全然…ってゆーか、大騒ぎになったのって…」

「ん？」

「私のせいだから」

「は？ どういーじいよ？」

「…。」

「あ、言いづらかったらいいよ。無理に話さなくても」

「いいえ、そういう訳じゃないんですけど…」

「そっか…。あ、そういえば、冬月…?」

「はい?」

「お前、会社辞めたのって…セクハラだけが原因なのか?」

「うーん…」だけ”と言うと嘘になりますけど」

「そっか、他にもありそうだな」

「ええ、ちょっと」

「本当に俺のことと関係ないの?」

「うーん、だからさっきも言ったけど、きっかけは春山さんかな…」

「あ、やっぱりそうなの?」

「あはは…そんな顔しないでくださいよお」

「だって!気にするじゃんかよ!」

「本当に気にしないでください。私、春山さんに感謝してるって

「言ったじゃないですか」

「うん…それがよく分かんねーんだよな」

「あ、春山さん。デザート貰っていいですか？」

「あ、ああ…そうだな。もうビールはいいのか？」

「さすがに、もういいですよ」

「あはは、だよな」

「すいませーん、デザートお願いしまーす。」

「それにしても、こんなときに…冬月は強いな…」

「春山さん、それ本気で言ってます？」

「え？ うん。そう思ったんだけど…」

「春山さん、だから彼女できないんですよ」

「はあ？ なんだよ、それ」

「私、全然強くなってるんです…。」

「あ、ごめん…。気い悪くしたか？」

「うん、大丈夫です」

「ごめん、俺デリカシーないよな…」

「そうですよ…ほんと」

「ところで、冬月…」

「あ、ちょっと！春山さん！」

「ん？ なんだよ？」

「いま、私に聞こうとしたでしょ？」

「なにを？」

「あのあと、会社で何があったか」

「…うん。よく分かったな。」

「ふふ、どうしよっかなあ」

「なにもつたいぶってんだよ」

「違いますう！どっちを先にしようかなあ…:…と違って」

「どっちが先？」

「はい、あのあと会社で起きたことと、春山さんが社長を殴った理由」

「ああ、そういうことが」

「はい、そういことです。春山さん、よかったら聞かせてください」

「うん？」

「春山さんのコップ…溢れちゃった理由」

「ああ、そうだな…。冬月には、ちゃんと話さないとな」

「はい。私たち、運命共同体ですから」

「運命共同体ねえ…。確かにそうかもな」

「あ、デザートきた！ おいしそ〜！」

「冬月…。」

「はい？」

「これ食ったら、ちよっと付き合ってもらえないか？」

「え？ どこにですか？」

「…うん。ちよっと」

「別にいいですけど…」

「そこで、全部話すよ。話長くなるし」

「わかりました。じゃあ、早く食べちゃいましょー！」

「そっだな、もうお客さん、俺達しかいなくなっちゃったしな……。」「

第04章 『帰省』

「ありがとうございます。またお願いしまーす。」

と店員が言うと、先に店を出た冬月が、そのままドアを片腕で押さえてくれていた。

「あ、ありがと…」

俺が両手に何個もバッグを抱えて足早に店の外へ出ると

「どーも、ごちそうさまでした!」と、冬月が軽く頭を下げた。

「あ、いえいえ、こちらこそどーもでした。」

ランチコースが一人1,800円で

生ビールが1杯600円…それを二人で2杯ずつ飲んだ。

合計6,000円丁度!

恐ろしく高い昼メシになってしまった。俺の10日分の昼飯代だ。

昨日、金を下ろしておいて本当によかったと思った。

「で、春山さん。どこに行くんですか?」

冬月は、左の肩に黒とピンクのトートバッグを2つぶら下げている。

俺は、冬月の私物が詰まった『丸川商事』のロゴが印刷された大きな紙袋と

同じく冬月の…何が入ってるのか実際には知らないが、恐らく私物が詰まった

小型のスーツケースを持たされていた。

「うん、ちょっと電車に乗るんだけど…大丈夫？」

と冬月に言ったものの、俺の方が大丈夫じゃなさそうだ。

この荷物を抱えて電車に乗ることを想像すると、一気に酔いが回ってきた。

「別に、私は全然大丈夫ですよ」

涼しい顔でこう答えた冬月は、どうやら俺よりも酒が強いようだ。

というよりも、俺が弱いだけか？

俺は「よし、じゃあ行こう！」と気合を入れて、重たい荷物を持ち上げ歩きはじめた。

駅へ向かう途中、冬月に何度か「荷物、どれか持ちますよ」と言われて、

「だいじょぶ、だいじょぶ」と強がって答えていたが、駅にたどり着いた頃には

へろへろになっていた。

「なあ、この荷物…コインロッカーに預けていいか？」

情けないとは思ったが、駅の長い階段を見て心が折れてしまった。

荷物をコインロッカーに預けて身軽になった俺と冬月は、ちょうどホームに

滑り込んできた電車に飛び乗った。

「どこまで行くんですか？」

冬月は、吊り革に人さし指1本だけを軽くひっかけていた。

色白なのは前から知っていたが、こうして見ると冬月の手指は本当に白かった。

冬月は、顔も美形だが、顔がきれいな女性は手も綺麗なんだな…

と、今さらながら関心した。

「うん、1時間くらいかな」

「え〜！そんなに？」

冬月は、もっと近くを想像していたらしく、素直に驚いていた。

「うん、ごめんな」

外の景色に目をやりながら、俺はつぶやいた。

「うっん、全然OKですよ！ どーせ暇ですし」

確かに、俺と冬月は、これからの予定など決まっていなかった。まったくの白紙だ。

二人とも、今日会社を辞めたのだから。

いや、正確には冬月は、自ら“辞めた”ようだが、俺の場合は“クビ”だ。

と言っても正式にクビを言い渡された訳ではないが、100%間違いないだろう。

社長をぶん殴って会社を飛び出してきたのだから、ただで済むはずがない。

そういえば、あの後：俺が会社を飛び出した後、会社では何があったのだろう？

いま俺の隣で車窓の風景を眺めている冬月は、その答えを知っているはずだ。

しかし、その答えを俺は、あえて聞かなかった。その前に、冬月には打ち明け

なければならなかったからだ。

そのために、俺は冬月を連れてこの電車に乗った。

そう、“あの場所”に向かうために…。

二つ目の駅に着いた時、目の前のシートに座っていた親子連れが電車を降りた。

俺と冬月は、無言で目を合わせて小さくうなずくと、ほぼ同時にシートに腰をおろした。

「ラッキー！」

冬月が俺の耳元でささやくと「プシュ！」という音と同時にドアが閉まり

電車がゆっくりと走りだした。

冬月は、ほっとしたのだろうか、それともビールのせいだろうか…

電車が走り出してすぐに眠りについた。

まもなく次の駅…とのアナウンスが聞こえてきても冬月は目を覚まさなかった。

それどころか、ますます熟睡し俺の右の肩に頭を預けてきた。

冬月の奇麗に染まった茶色い髪から漂ってくる香りがとても心地よかった。

熟睡して俺の肩にもたれかかった冬月のことを見ていて、こみ上げるものがあつた。

その感情がなんだつたのか、よく分からないが、こんなに華奢かしゃな体で

こいつはどれだけの苦痛に耐えてきたのだろうか？

そう思うと、涙が出そうになった。

会社を辞めた理由を、“セクハラを受けたから”と言っていたが、それだけが理由とは思えなかった。

こんなことを言っただけでは、世の中の女性たちを敵に回しそうだが、セクハラなんて

大なり小なり世間ではよくある話なのではないか？

冬月ほどの美しさがあれば、セクハラは当然されるであろうことは、容易に想像できた。

だが、いつも冷静で、クールで、そして頭のいい冬月が、セクハラごときに負けるのだろうか？

会社を突然辞めるほど、冬月を追いつめたものとはいったい何なのだろうか？

俺が社長を殴ったことが“きっかけ”と言っていたが、それはどういうことなのか？

もしかして、あのあと冬月は、俺をかばって社長に何か言ったのだろうか？

冬月はセクハラの手がかりが、あの社長の丸川哲也だと言っていた。

『丸川』と呼び捨てした時の冬月の怒りに満ちた表情が目には焼き付いていた。

だとすれば、俺が社長を殴ったのを見て、抑えていた自分の感情を爆発させて

しまっても不思議ではない。

それとも…

そんなことを考えているうちに、いつの間にか俺も眠りについていった。

先に目を覚ましたのは、冬月の方だった。

「春山さん…」

冬月が、俺の手の上に自分の手をそつと重ねてささやいた。

他人ひとにそんな風に起こされたことがなかった俺は、夢を見ているのかと

錯覚した。

「あ、ごめん…寝ちゃった」

そういうと、俺は振り返って窓の外を見た。

あぶない。どうやらギリギリで寝過ごしていなかった。

ちょうど次が降りる駅だ。

「セーフ！次で降りるよ。」と俺が言うと

冬月は「そっか」と優しい笑顔でうなずき、俺の手に重ねていた手をそっと離れたが

目的の駅に着くまでの間、俺の手は冬月の温もりを覚えていた。

電車が駅に着き、俺と冬月はホームに降りた。

ホームの柱には、ひらがなで『あけぼのちよう』と表示されている。

「へえ、私、この駅はじめて降りるな…」

冬月は、ちょっとした旅行気分を味わっていたのかもしれない。

キョロキョロする姿はどこか嬉しそうにも見えた。

「あ、はじめて？」

と一応聞いてみたが、普通こんな場所…よほどの用がなければ来ないよな…

と思った。

改札を抜けると、そこには以前と変わらない風景が広がっていた。

「ちっとも変わらないな」

俺は、つぶやいた。

「ここに…なにがあるの？」

「うん、いまに分かるよ…」

俺は、冬月を焦^じらしてみたくなくなった。

「もお！ そろそろ教えてよ…」

冬月は、口を尖がらせて言ったが、その目は笑っていた。

「すぐそこだから、行こ！」

俺は、冬月の背中をポンッと叩くと駅前の商店街のある方に向かって歩き出した。

俺が、ここに来るのは5年振り…いや、6年振りかもしれない。

とにかく、俺は丸川商事に就職してからはじめて“ここ”に戻ってきた。

駅前には、昔と何も変わっていないかった。相変わらずの“田舎”だった。

商店街も、シャッターを閉じたままの店がいくつもあったが

見慣れた名前の店が今でも変わらず並んでいたことに、俺は嬉しくなった。

都会では、5年もすれば街並みがすっかり変わってしまふことは珍しくないが、

こんな田舎は5年、6年では何も変わらない。

そこが、良いところでもあるし、悪いところでもあるのだらう。

冬月は、俺と肩を並べて相変わらずキョロキョロしながら商店街を歩いている。

そういえば、俺は会社以外の冬月を知らなかった。会社があるオフイス街では、

それほど感じなかったが、こういう田舎では冬月は浮いて見えることに驚いた。

俺の知る限り、この街に冬月のような都会的で美しい顔立ちの女性はいなかったし、

服装や髪型も、この街のセンスとはほど遠いものだった。

実際、商店街を歩く冬月のことを道行く人たちの全員が振り返って見ていた。

俺は、そんな冬月を引き連れて歩いていることが、少し誇らしげに思った。

「見えてきた。」

小さな商店街を抜けて、交差点を右に曲がったところで俺は言った。

「え？ なにが？」

冬月は、周りを見回したが、残念ながら特に目を引くような目標物は、

発見できなかったようだ。

「なにがあるの？」

冬月はもう一度聞いてきた。

「うん…。俺んち」

俺が、そう答えると

「えええええ！！ ホントにい！！？？」

冬月は、大袈裟に驚いた。そして「どどここ！？」とさらに大袈裟に

キョロキョロと首を振った。

「ははは…うじだよ」

そう言って、俺は足を止めた。

俺と冬月の前には、一件の古い建物が建っている。

「えっ？」

冬月は、俺の顔と目の前の建物を交互に見比べながら、キョトンと
していた。

「ここ、俺の実家…」

冬月は何も答えなかった。

そして、目の前の建物に釘付けになっていた。

『児童養護施設 あけぼの園』

その建物の入り口には、大きな看板が掲げられていた。

その看板の文字を何度も読み返してから、冬月はようやく口を開い
た。

「え？ ここって…」

「うん。そう…。ここが俺んちなんだ。」

冬月は、言葉を失ったようだった。その表情からは、冬月がその時
なにを

考えていたのかは読みとれなかった。

「そう…俺の家…俺が育った家…」

俺は一步前へ出て、傾きかけた入口の扉を手で押した。

『児童養護施設 あけぼの園』

「実は俺、孤児だったんだ…。それで、ここで育ったんだよ…。」
その時、冬月がどんな顔をしていたのかが見ることが出来なかった。

「びつくりしたたる…?」

相当驚いたことだろう。

だが…

このあと、冬月が言った一言に、俺も驚かされた。

「…私も似たようなもんです。」

6年振りに訪れた『あけぼの園』は、心なしか小さく見えた気がした。

空を見上げると、太陽が傾き赤く染まり始めていた。

*

*

*

*

*

「知らなかったな…」

冬月がつぶやいた。

「ああ、そりゃそうだよ。このことを知ってるの、会社では夏樹だけだもん」

あ、それから…あいつ…」

「そうなんだ…」

「うん。まあ、わざわざ言うことでもないしな」

俺は、こめかみのあたりをポリポリと掻いた。

「さ！ 行こうか」

俺は、外れかけた木製の門扉を慎重に押しして敷地の中に入った。

冬月は「あ…うん。」と返事をしてから俺の背中を追いかけた。

門から玄関までの数メートルの間に広がる庭は、畑として使われていて

様々な野菜類が所狭しと栽培されている。

6年前と何一つ変わらない光景だ。

冬月は、この畑を見て思わず「わあ〜すごい〜！」と驚嘆していた。

『児童養護施設 あけぼの園』

俺が、育った場所。俺の家。

ここにいる子供たちは…と言っても、これは俺が園こゝにいた頃の話だが、

2歳から18歳までの子供たち10人が共同で暮らしていた。

その子供たちのほとんどが、交通事故や病気などで両親を失った子供たちだったが、

なかには、親からの虐待を受け保護された子もいたりした。

あけぼの園は、子供たちから”父ちゃん、母ちゃん”と呼ばれている一組の夫婦

が経営し、若い住み込みのボランティアが3名ほど一緒に生活していた。

収入は、国や県からのわずかな補助金と、企業などからの援助金で賄っていたが

その経営はいつも火の車だった。

母ちゃんは、食べ盛りの子供たちの胃袋を少しでも満たすため、園の庭を耕し

野菜を作った。それは、いつしか家庭菜園の域を超え本格的な畑となった。

父ちゃんは、園の経営をする一方、建築現場などで日雇いの仕事をしていたが

働き過ぎで体を壊した。それでも体調の良い日は仕事に出かけていくほどの

働き者だった。

もちろん、俺が園にいた頃はまだガキだったので、園の経営のことなど考えも

しなかったが、今になって思えばあの夫婦には感謝してもし切れな
い思いがある。

自分の子でもないクソガキどもに、どうしてあれだけの愛情を注ぎ
こめるのだろうか。

父ちゃんも母ちゃんも、いつも笑顔を絶やさない夫婦だった。

どんなに経営が苦しくても、そんな素振りを子供たちの前では一切
出さなかった。

父ちゃんと母ちゃんがいつも笑顔だったので、園の中には常に笑いが
絶えなかった。

みんな、この夫婦のことを本当の父ちゃん、母ちゃんだと思ってい
た。

そして、ともに暮らす子供たちはみんな歳の離れた兄弟だった。

年上の子は、誰に言われるでもなく下の子の面倒を見、女の子は年

頃になると

母ちゃんの畑仕事や家事をすすんで手伝った。

もちろん”兄弟げんか”もしょっちゅうだったが、仲直りするまではメシ抜き

というルールのおかげで、引きずることはなかった。

あけぼの園は、築70年以上の2階建ての木造家屋で大小合わせて8部屋あった。

1階の6畳ほどの小さな部屋は、小学生以下の子供たちが2〜3人で一緒に使い

それよりも大きい2階の部屋は、思春期を迎えた中学生以上の子供たちが一人に

一部屋与えられたが、部屋に閉じこもる子は一人もいなかった。

常に全員が1階の食堂に集合してワイワイと大騒ぎしていた。

誰一人として、自分に親がないことを不幸だ、などと思っていなかった。

今になって思えば、あの頃が一番楽しかったのかもしれない。

玄関ドアの前で、一瞬俺は躊躇ちゅうちゅうした。

6年ぶりの”我が家”

父ちゃんと母ちゃんは元気になっているだろうか…。

「春山さん？」

冬月が、なかなかインターホンを押さない俺に向かって声をかけた。

その声に我に返り、俺は思い切ってインターホンに手を伸ばした。

その時だった。

「アキラ？」

俺の名前を呼ぶ声が背後から聞こえた。

俺と冬月は驚いてうしろを振り返った。

そこには、両手に尋常でない量の買い物袋をぶら下げた女性が立っていた。

「アキラ…なの？」

その女性は、2、3歩近付いてから立ち止り、また同じ質問をした。

その女性は、自分と俺の間にいる冬月のことなど、まるで視界に入っていないようだった。

そして、その目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「…うん。」

俺が、言うと同時にその女性は、ドサドサつと買い物袋を地面に落として

俺に向かって走り寄って来た。

「アキラ…！」

女性の目からは涙があふれ出していた。

そして、俺がその女性に抱き付こうとした瞬間

バチン！！！！

女性の右手が俺の左頬を思いっきり叩いた。

「アキラ！　今まで何やってたんだい！！　連絡もしないで…！」

そう言っつて女性は俺の体にしがみついて泣いた。

「…ごめん…ごめん…母ちゃん…」

俺の目からも涙がこぼれ落ちた。

*

*

*

*

*

ひとしきり、”涙の再会”にどっぷり浸り、お互い少し冷静になった。

その時だった。

「春山さん」

冬月が声をかけてきた。

母ちゃんも、その声ではじめて冬月の存在に気付いたようだった。

第三者がその場にいたことに、驚いて母ちゃんは俺から慌てて離れた。

「あ、あああ、あたしったら……ごめんなさい！」

母ちゃんは、そういうと涙と鼻水でぐしょぐしょになった顔を両手で

ゴシゴシ拭いた。

そして「アキラ！ いったい……どういう……!?!?」

母ちゃんは、あからさまに混乱振りを表に現した。

「うん、母ちゃん……いきなりごめんな……。」

「ほ！本当だよ……!?!あんだ、連絡ぐらいしてから……」

そこまで言つと母ちゃんは、次の言葉に詰まった。

俺と冬月の顔を交互に見ながら、何を先に問いただせばいいのかわからずに口だけをパクパクさせている。

「母ちゃん。」

母ちゃんがパニくつてるのを見て、俺は気の毒になり肩に手を置いた。

母ちゃんが、振り返って俺の顔を見たときだった。

「突然、すみません」

冬月だった。

母ちゃんは、その声に反応し今度は冬月の方を振り向いた。

冬月は、母ちゃんが地面に置き去りにした大量の買い物袋を両手にぶら下げていた。

「あ、あああ！ごめんなさい！！」

母ちゃんは、見ず知らずの女性に買い物袋を持たせてしまったことを平謝りして

その袋を取り戻そうと冬月の元に駆け寄った。

「大丈夫ですよ！ 持ちますから」

冬月は、やさしく微笑んで母ちゃんの行動を制した。

「いえいえ、そんな訳には…」

母ちゃんは、恐縮して何とかその袋を奪い返そうと手を伸ばしたが冬月は、「大丈夫ですってばあ」と言いながら馴れ馴れしい笑顔で微笑んだ。

そして、そのまま母ちゃんの隣を通り抜け俺の元に近付いてきた。

その嫌みのない笑顔と、あまりにも自然なしぐさに、さすがの母ちゃんも

「あ、はい…」と言うのが精一杯だったようだ。

両手に大量の買い物袋をぶら下げた冬月は俺の前まで来ると

「はい、ア・キ・ラさん！」

と、につこり笑って俺の目の前に差し出した。その笑顔は、さっきの母ちゃんに

見せた笑顔とは違って、いたずらそうな笑顔だった。

*

*

*

*

*

6年ぶりに訪れた『あけぼの園』は何も変わっていないかった。

良く言えばノスタルジック、悪く言えばオンボロの木造家屋は、歩くたびに廊下の

杉板がギイギイ鳴いている。

夜中に、これを知らずに泥棒が入ったらびっくりして逃げ出すだろう。もつとも、

この家には泥棒が目当てにするような金目のものなどないのだが…

それにしても、やけに静かだ…

「子供たちは？」

母ちゃんに尋ねると、今は宿題の時間らしい。

俺がいた頃には、そんなもんなかったのに…。

父ちゃんの姿も見えなかった。

もういい年だと言うのに、まだ現場に出ているのだろうか？

俺と冬月は、食堂に通された。

食堂と続いているキッチン…いや、厨房と言った方がぴったりか。

厨房では50代半ばくらいの女性が一人、忙しそうに夕食の支度をしていた。

俺は知らない顔だ。恐らく俺が園を出た後に働きだしたのだろう。

その女性は、突然の訪問者に不思議そうな顔をして見せたが、母ちやんが

「アキラよ！」と一言言っただけで、すべてを理解したように大きくうなずき

俺に向かって軽く会釈した。

「アキラ」だけで話を通じってしまうとは……どうやら俺は、この園では有名人

のようだ。それもそうか……あんな風にしてここを飛び出したのだから。

* * * * *

6年前

俺は、高校時代、勤労学生だった。高1の頃から俺は、毎朝新聞配達をしていた。

もちろん、そのわずかな収入は『あけぼの園』のために…と言いたいところだが

そうではなかった。その収入は、すべて俺の小遣いになった。

このような施設では、もちろん『お小遣い』など貰えない。

ましてや、あけぼの園にはそんな余裕がないことくらい、ガキの俺にだって

薄々分かっていた。

働ける年齢になれば、自分の小遣いは自分で稼ぐ。これが、暗黙のルールだった。

俺は、高1から新聞配達を始めて卒業するまでの3年間、雨の日も雪の日も1日も

休まずに新聞を配達した。

それは、実は凄いことだったらしく、県知事に表彰され全国紙に名前と写真が

デカデカと掲載された。

そんなある日、俺は父ちゃんに呼び出された。高3の冬だった。

「アキラ…卒業後のことだが」

「また、その話かよ」

「ああ、何度でも言っぞ」

「行かねーよ！俺は、あんなところ行かねーし、ここも出ていかねー！」

「これは、お前にとっていい話なんだ！いいから俺の言っどおりにしるー！」

話の内容はこうだ。

俺は、卒業後の進路について、バイト先の新聞販売店で働くつもりでいた。

この歳で、すでに店では一番仕事が出来たし、仲間たちとも気が合った。

人付き合いが得意でない俺にとって、今さら新しい職場で一から人間関係を

築くなんて考えるだけでぞっとした。

それに、新聞店で働いていれば、あけぼの園にずっと居られる。

と思った。もし万が一、園を出て行かなくてはならなくなっても、新聞店には

住み込みできることになっている。店長の了解も取ってあった。

新聞店なら、園からも近いし兄弟たちとも離れずに済む。

何より、母ちゃんと父ちゃんの傍を離れるのが嫌だった。

園に残って、園を、家族を守りたかった。

しかし、父ちゃんは、俺に東京の会社で働けと言う。

父ちゃんの話では、ある東京の会社のお偉いさんが、新聞で俺のことを知り、

「是非、我が社で働いてほしい！」と懇願してきたそうだ。

この就職難の時代に、そんな嘘みたいなのがあるのかと思っただが、本当の

ことだった。

この俺でさえ、どこかで聞いたことがあるような会社名が印刷された名刺を見せられた。

普通に考えれば、確かにこれは美味しい話なのかもしれない。

なぜなら　その会社とは、いま福祉事業を中心に急成長している
総合商社

『丸川商事　株式会社』という会社だった。

だが、俺にはそんなことはどうでもよかった。

どんな一流企業で働くよりも、俺は園こいで家族みんなとワイワイ楽しく暮らせることの方が大切だった。

俺と父ちゃんの話はいつまで経っても堂々巡りだった。

俺は新聞店で働くと言い、一步も譲らなかった。父ちゃんは父ちゃんんで

そのナントカ商事のお偉いさんと勝手に話を進めていた。

そのたびに俺と父ちゃんは大喧嘩をし、メシ抜きになる日が続いた。

そんなことが毎日のように続き、いつしか俺は、父ちゃんと一言も口を

きかなくなった。お互いに避けるようになった。

父ちゃんは、何で俺の気持ちを分かってくれないんだろ？

俺は、園こいを守りたいだけなのに

しかし、最終的に俺は『丸川商事』に就職することになった。

最後まで納得はしていなかった。

俺が丸川商事への就職を渋々決めたのは、ある日、母ちゃんが俺に土下座をして

「あなたの将来のためだから…」と言って泣いたからだ。

父ちゃんに言いくるめられた訳じゃない。

俺は、こんな”おいしい話”を持ち込んだ父ちゃんを許せなかった。

しかも、俺は高校を卒業したら就職するために『あけぼの園』を出ることになった。

会社は園からは通える距離ではなかったことと、父ちゃんが、俺に内緒で会社の近くに

アパートを借りていたからだ。ますます許せなかった。

そして、俺は結局父ちゃんと一言も口をきかずにあけぼの園を卒業した。

それ以来、俺は仕事の忙しさを言い訳に、一切の連絡を絶った。

父ちゃんも母ちゃんも、俺の就職先は分かっているはずなのに、電話の一本も

かけて来なかった。

アパートの住所も知っているくせに、手紙の一枚も届かなかった。

俺は、園を追い出され、見捨てられたのか…と思った。

そして、あっという間に6年の時が過ぎた。

* * * * *

「かあちゃん、今まで何の連絡もしないでごめん…」

席に着くなり俺は、まず今までのことを詫びた。

それから、怒られるのを覚悟で切り出した。

「かあちゃん、実は俺…会社、辞めてきたんだ…。」

かあちゃんは、「え！」と小さく驚いた顔を見せたが、すぐに

元の涼やかな顔に戻り「そうか…」とだけ返事した。

そして

「とりあえず、アンタの話とアタシの説教は後回しだ…」

と言いながら、母ちゃんは冬月の前にお茶の入った湯のみを差し出した。

「はい、どござ…」

冬月は、無言で軽く頭を下げた。

「アキラはこれね」

そう言って、母ちゃんは黄色いマグカップを俺の前に置いた。

「あ、これ…」

「なに？ あんたのだよ。忘れたの？」

そう、この黄色いマグカップは、俺が昔からずっと使っていたマグカップだった。

あれから6年も経つというのに、このマグカップが当たり前のよう
にすぐに

出てきたことに俺は胸がいつぱいになった。

取っしておいてくれたのか…

母ちゃんは、自分の湯のみを取りに行くとき「あ、そっだ！」と言
い、思い立った

ように流し台で何かを洗い出した。

そして「はい、もしよかったです…」と言って、真っ赤に熟したトマ
トをカゴに

乗せて持ってきた。

「こんなのしかなくて、ごめんねー。」

母ちゃんは、そう言ったが全然悪びれた様子はなかった。

そして、「」どっこいしょ」「と言いながら、やっと席に着くと

「さて!じゃあ、ゆっくり話を聞かせておくれよ。まずは」

と言って、母ちゃんは冬月の顔をちらっと見た。

「冬月です。」

俺が紹介するまでもなく、冬月が自ら名乗って深々と頭を下げた。

満を持して…と言った感じだった。

俺は、内心ほっとした。冬月のことを、母ちゃんにどうやって紹介しようか

頭の中でいろいろシユミレーションしていたが、いい答えを見つかられずにいたからだ。

「あ、冬月…さんね。」

母ちゃんも、急にかしこまって頭を下げた。

「はい。冬月アヤと申します。」

冬月は、もう一度丁寧に頭を下げた。

ただ自分の名前を名乗って頭を下げただけのシンプルな自己紹介だが、この自己紹介を

されて、冬月に悪い印象を持つ人間がいたら会ってみたいものだ。

と思うほど、完璧に人の心をつかむ紹介だった。

そして、冬月は顔を上げると、自分の好印象に輪をかけるような笑顔でこう言った。

「このトマト、おいしー！このお庭で採れたんですかあ？」

その台詞は、母ちゃんの心を掴むのには十分だった。

母ちゃんは、満面の笑みを浮かべて

「そうなのよー！！甘くて美味しいわよ！食べてみて！」

とても嬉しそうだった。

この笑顔だ。俺は、この笑顔に育てられたのだ。

まさか、と思ったが

冬月は、なんのためらいもなく、差し出されたトマトを「いただきまーす」と言い

丸ごとかぶりついた。

じゅるじゅる…と音をたてて、トマトを旨そうに食い出した。

「おいしいー！！こんなに甘いトマト、初めてたべましたあー！！」

と、誰が聞いてもお世辞とは思えない言い方で感想を述べた。

そんなに騒ぐほど、美味しいのか？

と思いながら、俺も冬月に付き合っ

た…美味かった。

俺は、こんなに美味しいトマトを食って育ったのかと、改めてここでの暮らしを

誇らしく思った。

「あのお…失礼ですけど、アキラとは」

母ちゃんは、聞きづらそうに冬月の顔を覗き込んだ。

「後輩だよ！」

冬月もその時なにかを言おうとしていたようだったが、食いかけのトマトに

苦戦している様だったので思わず答えてしまった。

「あ、そうなの…後輩さんですか…」

母ちゃんは、さすがに”後輩”という説明では納得出来ないようだった。

それもそうだ。

今まで往信不通だった息子が6年ぶりに突然帰ってきた。しかもモデルの様な

美女を連れて…それを、”後輩”の一言で片付けようとは虫が良すぎた。

「会社の……かい？」

母ちゃんは、疑り深い目で俺と冬月の顔を交互に見た。

誰がどう見ても、不釣り合いの目の前の二人の関係が不思議で仕方ないようだ。

「うん…会社の…」

俺は、母ちゃんの質問にどう答えたもんかと一瞬言葉を詰まらせた。

確かに、冬月は会社の後輩だ。いや、後輩だった。が正しいのか。

その時、冬月が俺の代弁をしてくれた。

「そうです。春山さんは、私の会社の先輩なんです。

あ、でも

私も実は…理由があって会社を辞めてしまったんですけどね。」

おいおいおい！と、内心俺は焦った。

いきなりそんなこと、母ちゃんに言っても…冬月が、この後の説明を

どう展開させるか、俺はドキドキしながら次の言葉を待った。

しかし、それは甘かった。冬月は、そこまで話すと、隣にいる俺の顔を見て

あとはよろしく的な目で訴えてきた。

あの、いたずらな目付きで…

「そ、そうなんだよ。冬月は、会社の後輩で」

俺は、冬月が”投げてくれた”バトンを仕方なく受け取った。

「なあ、母ちゃん。聞いてくれ。」

俺は、改めて母ちゃんに向き直って言った。

「さつきから、聞いてるじゃないか」

そうでした。

「う、うん。そうだな…。母ちゃんだけじゃなくて、冬月もだ！

俺が今から話すことを冬月も、よく聞いてくれ。」

冬月は、急に言われ不思議そうに俺の顔を見た。

「はい。」

そして、俺は話をはじめた。

*

*

*

*

*

「母ちゃん……」

「うん」

「冬月……」

「はい」

俺は、黄色いマグカップから、すっかり冷めきったお茶を一口すった。

母ちゃんは、それに気付いて席を立った。

食堂と台所を仕切るカウンターテーブル上の電気ポットから、でかい急須に

熱湯を注いだ。

そして、冬月、俺、母ちゃん、冬月、俺、母ちゃんの順に2杯目のお茶を

注ぎ足した。

その時だった。

「なあ、アキラ……」

母ちゃんは、残った最後の一滴まで絞り出そうと、急須を上下に大きく振り

ながら言った。

「ん？」

俺は、短く返事をする、煎れたてのお茶を一口飲みカップを置いた。

「話の腰を折るようで申し訳ないんだけど……」

と、母ちゃんはチラッと壁に掛けた時計に目をやった。

その視線に気付いた俺は、後ろを振り返りドアの上に掛けられた時計を見上げた。

無意識にその時計の位置に目をやったが、その位置には6年前と同じ時計が同じ

場所で時を刻んでいた。

「あ、もしかして……」

「そう」

「そろそろ、メシの時間…か？」

時計の針は、6時30分を指していた。

「そうなんだよ…。すまないね。話は後でゆっくり聞くからね」

そういうと、母ちゃんは、俺の返事も聞かずに席を立って厨房に入った。

そして「アンタ達も食っていくんだろ！」と、嬉しそうな声をあげた。

*

*

*

話の腰を折る。とは、まさにこのことだ。

すべてを告白するつもりで、覚悟を決めていたのだが

すっかり拍子抜けしてしまった。

俺は、もう一度マグカップからお茶をすすり、冬月の顔を覗いた。

冬月も、湯のみから一口お茶をすすり俺と目を合わせた。

そして、軽く微笑み

「あとで、いいんじゃない？」

と小さな声でつぶやいた。

それも、そうか

別に急ぐ理由もないしな。

「はあく！美味しかった」

冬月は、お茶を一気に飲み干すと、何を思ったか自分の湯のみを持って厨房へ向かった。

そして、「手伝います！」と言って厨房の中へ入った。

それは、まるでずっと前からそこで働いていた人なのかと錯覚するほど自然で、

そんな冬月を、母ちゃんも当たり前のように受け入れていた。

久しぶりに食べる『あけぼの園』の食事は美味かった。

厨房から出てきた冬月は、いつの間にかちゃっかりエプロンをしていた。

俺にも見覚えがある古びたエプロンだったが、冬月が着るとそれはそれでお洒落に見える

から不思議だ。

園の子供たちは、俺を見て大騒ぎだった。

と言っても、子供の数は俺が居た頃の半分になっていた。

俺が園を出るとき『あけぼの園』には、俺を含めて10人の子供たちが暮らしていたが、

当時、高校3年生だった俺が一番年上で、その下には中3のゆかり、中2のひろ子…

小学生の健二、直人、悠斗…と悪ガキどもが続いた。

あの頃まだ、保育園に通っていたおチビちゃん達は、それぞれ新しい家族に引き取られ

今はみんな幸せに暮らしているそうだ。

みんな、立派(?)に成長していた。

ゆかりとひろ子は昨年相次いで結婚して子供もいるらしい。

俗に言うヤンママってやつだ。

母ちゃんは、『孫』の写真を嬉しそうに俺に見せた。

高1になった悠斗は、俺がやっていた新聞配達を今年から始めたそう
だ。

あんな風に園を飛び出してから6年間、何の連絡もよこさなかった

この俺を、兄弟たちは責める訳でもなく暖かく迎えてくれたことに、俺は

心から感謝した。

この街もこの施設も何も変わっていない。と思っていたが、子供たちだけは

確実に変わっていた。成長していた。

そして、もうひとつ…

『あけぼの園』に大きな変化があったことを、

俺はそこで始めて聞かされた。

父ちゃんが、死んだ

2年前の夏…心不全だったそうだ。

*

*

*

外はすっかり日が落ちていた。

俺は、外に飛び出した。

泣いているところを見られなくなかったからだ。

園を出ると、なるべく人気のない所を求め河原へと続く道を走った。

そして、街灯もない暗がりの道まで出るとトボトボと力なく歩き、立ち止まり

泣き崩れた。

何年ぶりだろう？ いや、生まれて初めてだ。

俺は、声をあげて泣いた。

堪えようとしても涙が止まらなかった。

父ちゃんが…死んだ。

孝行したいときには親はなし という言葉を聞いたことがあるが、

まさにそれだった。

俺は、自分のことを呪った。

泣きながら、自分で自分の頬やこめかみを何度も殴った。

こんな親不孝者がいるだろうか？

俺は今まで何をやっていったんだ

どれくらいの間が経ったのだろうか…

涙は止まっていた。

枯れたのだろうか…。

その時だった。

「春山さん…」

冬月の声が聞こえた。

振り向くと、そこには冬月の姿がぼんやりと見えた。

*

*

*

*

*

俺は、冬月と無言のまま河沿いの道を歩いた。

街灯もほとんどなく、寂しい道だ。

しばらく歩くと、自動販売機の明かりが見えた。

その横を通り過ぎる時、冬月の横顔が一瞬照らし出された。

その時、冬月が突然立ち止まった。

「春山さん…」

自販機の明かりで、かろつじて冬月の横顔が見えたが、その横顔は気のせいか

泣いているように見えた。

「ん？どうした？ あ、なんか飲むか？」

俺は、この明かりで自分の泣き顔を見られるのが嫌で、財布を開き大袈裟に

覗き込んで小銭を探す振りをした。

その時だった。

「違うの…」

そついうと冬月は、俺の腕を掴んだ。

「え？」

俺が顔を上げると冬月はもう一度つぶやいた。

「違うの…」

自動販売機に照らされた冬月の顔は、どこか寂し気に見えた。

冬月は、「違うの」と言っただけ、そこから何も言わなかった。

「俺…最低だよな…」

俺は、うなだれながらつぶやいた。

「こんなことなら、意地張ってないでもっと早く会いにすればよかった」

心から後悔していた。

「俺、ずっと…父ちゃんに謝んなきゃって思ってたんだ…」

俺は、また胸がいつぱいになってきた。

冬月は、そんな俺の腕をまだ掴んだままだった。

「春山さん…」

冬月がゆっくりと俺の腕を離した。

「…うん？」

俺はうつむいたまま答えた。

「私…春山さん、最低だなんて思わない…。」

「え？」

「春山さん…お父ちゃんのこととは…気の毒だったけど…」

きつと、お父ちゃん…怒ってないと思うし」

冬月は、俺を慰めようとしてくれているのか…

ここで、その慰めを否定するのも申し訳なかったので

「…うん」

とは言ってみたが、俺の後悔の念はちつとも薄れなかった。

「春山さん…幸せですね…。あんなに素敵な家族がいて…」

冬月が、意外なことを口にしたので、俺は思わず顔を上げた。

「…え？　俺が幸せ？」

俺は、今まで自分のことを不幸だと思ったことは無かったが、

決して幸せな人間だとも思っていなかった。

それは、俺が孤児で本当の両親の顔も知らず施設で育ったから…と
いうことは

理由にはしたくないが、常に心のどこかで負い目を感じていたから
なのかもしれない。

そんな俺を冬月は幸せだと言っ…。

これも、冬月なりの慰めなのだろうと思ったが、そうではなかった。

「春山さん…さっき、施設の前でお母ちゃんと再会した時、お母ち

やん…

泣きながら春山さんのこと抱きしめてくれたでしょ？」

「あ…うん」

何を言い出すのだろうと、俺は冬月を見た。いま気付いたが、冬月はお母ちゃんの

エプロンをつけたままだった。

「私…あんな風に親に抱きしめられたこと、一度もないから…」

冬月の顔が一瞬歪んで見えた。

「だから、私…すごく春山さんが、羨ましい…」

冬月はうつむきながらそう言うと、体を半回転させた。俺からはその表情を見ることは

できなかった。

『親に抱きしめられたことがない』冬月が言ったこの言葉の意味が、その時俺には

分からなかった。

「冬月…」

俺が冬月の肩に手をかけようと思ったとき、その肩が小刻みに震え

ているのが見えた。

そして、その震える肩をしばらく見守った俺は、無言で冬月の腕を掴んで3歩ほど前に

引っ張って立ち止まった。

自販機の明かりから離れ、お互いの顔が見えなくなったのを確認して俺は、

冬月の名前を呼んだ。

「冬月…」

冬月は、顔をあげたがその表情はよく見えなかった。

「はい」

小さく冬月が返事をした。

「俺なんかで申し訳ないけど…」

そう言うと、俺は冬月の腕を引き寄せてそのまま冬月の体を抱きしめた。

何するんですか！！と引っ叩かれるかな…とも思ったが、冬月は何も

言わず、俺の肩に顔を埋めた。

抱きしめた冬月の体は、想像以上に細かった。これ以上力を入れたら

壊れてしまうのではないかとさえ思った。

この華奢な体で、冬月はどれだけのものを抱えているのだろうか
親に抱きしめられたことがない…とはどういうことなんだ？

俺は無意識に冬月を抱きしめた腕に力を込めた。

そのとき俺の肩に顔を埋めながら冬月は言った。

「春山さん…痛い…」

「あ、ああ！ごめん！！」

俺は慌てて、冬月から体を離した。

やっぱり、迷惑だったのだろうか。

冬月が「やめて」とは言えず「痛い」と訴えたのだろうかと思っ

「ごめんな…調子に乗ったかな…」

と、バツの悪そうな顔をしたが、暗くて冬月には見えていなかった
だろう。

しかし、冬月は…

「うつん…」と小さく首を振った…ように見えた。

そして

「ありがとう」

と言いながら、そのまま自ら俺の胸に抱きついてきた。

俺は、冬月の壊れそうで消えそうな華奢な体を、もう一度強く抱きしめた。

しかし今度の冬月は「痛い」とは言わず、俺よりももっと強く、抱きついた

腕に力を込めてきた。

俺は、しばらくのあいだ冬月のことを抱きしめた。

そして、言った。

「冬月…園に戻るう…。腹減った。」

そういえば、俺たちは晩メシの途中だった。

だが、本当に腹が減った訳ではなかった。

この先、どうしていいのかわからなくて苦肉の策で思い付いた言葉だった。

そして、俺からゆっくり離れた冬月は

「もう、本当にデリカシーないんだから…」

と言つて笑つた。

第05章 『告白』

『あけぼの園』に戻ると、食事の時間は終わっていた。

食べかけの俺と冬月の食事だけがテーブルの上に置かれていた。

子供たちは、気を使ったのかどうかは知らないが、他の部屋で

遊んでいるようだ。元気な声が食堂まで響いてくる。

母ちゃんが「温め直すね」と言っつて料理をレンジでチンしてくれた。

「母ちゃん……」

俺は、レンジの前でタイマーをぼんやり見ている母ちゃんの背中に声をかけた。

「うん？」

母ちゃんも、背中を向けたまま返事をした。

「…父ちゃんのお墓は？」

すこしの沈黙のあと、母ちゃんは答えた。

「ああ、行くかい？」

「うん」

「じゃあ、今夜泊まってくな」

「え？」

俺は、隣の冬月の顔を見た。

冬月も、複雑な表情で俺と目を合わせた。

「だって、こんな時間に墓参りも変だろ」

母ちゃんが言った。

そりゃそうだが…

「泊まれって…いきなり言われても…」

俺は　もちろん冬月も、泊まる用意などしてきてはいない。

冬月だけを電車で帰すのも気が引ける。

まさか、こんな展開になるうとは夢にも思っていなかった。

「明日　」

母ちゃんは、そんな俺たちはお構いなしに続けた。

「お父ちゃんの命日なんだよ」

俺と冬月は、もう一度顔を見合わせた。

「そうなのか？」

「ああ」

「そうか…」

どうしたものかと俺が考えていると…

冬月が声を出した。

「おかあさん。私も泊まっていいいんですかあ？」

おいおいおいおい！何言ってるんだよ！

と、俺は心の中で叫んだ。

「なに言ってるの！ アヤちゃんも一緒に決まってるだろ！」

お母ちゃんは、冬月のことをいつの間にか『アヤちゃん』と呼んでいた。

「やった！ あ、おかあさん。パジャマありますかあ？」

俺のことは蚊帳の外で、勝手にお泊りの話は決まってしまった。

「やれやれ、大変なことになったな…」と思いつつ

冬月が、園（こ）に泊まることになり、俺はなんだか嬉しくなった。

「これで、ゆっくり話も聞けるし…ね！」

そう言つと、冬月はウィンクした。

*

*

*

*

*

後片付けも一段落し、俺と冬月、そして母ちゃんは食卓に着いた。

俺の告白の”仕切り直し”だ…。

「母ちゃん、冬月…じゃあ、改めて、話すから…」

「うん」

母ちゃんと、冬月は同時に返事をし、俺は語り始めた。

まず

「母ちゃん、この人知ってるだろ」俺は、母ちゃんに一枚の名刺を差し出した。母ちゃんは、老眼鏡をかけてからその名刺を手にとった。

「…あ、アキラ、なんでこの人を…？」

母ちゃんは、少し戸惑っていた。その様子を見て、冬月も立ちあがって

その名刺を覗き込んだ。そして、そこに書かれている会社名を見て思わず

声をあげた。

「え！？ これって…！？」

この二人のリアクションは、俺が想像していた通りのものだった。

「だよな。驚くよな…。特に冬月は」

「う、うん。だって、これ…」

「そう、MK建設 俺達ของบริษัท『丸川商事』の子会社だ。

そこに書かれてる高橋って人、冬月も会社で何度か見たことが

あるだろ。」

冬月は、あんぐり開いた口に手を当てたまま、ゆっくり腰をおろした。

MK建設

丸川商事の子会社で、総合建設業者いわゆるゼネコンだ。

丸川商事は、もともと福祉事業で大きくなった会社だ。

福祉関連機器の製造、販売、輸入などを主としている。

数年前からは、特別養護老人ホームやグループホームなど
介護施設の業界へも進出し、毎年数件の高齢者施設をオープン
させている。

その施設建設に関する一切を請け負うのがMK建設と言う訳だ。

「なんで、あんたがこの名刺を？」

母ちゃんの質問はごもつともだった。恐らく、母ちゃんは

自分がこの会社を知っているということをし、出来れば俺には
隠しておきたかったはずだ。

「もしかして…」

冬月が静かに口を開いた。

「さすがだな…冬月は、やっぱり勘がいい。たぶん、いま

冬月が考えてるとおりだよ。」

俺は、あえて冬月の考えを聞くことはしなかった。が、頭のいい

冬月のことだ。恐らく正解だろう。

いや、本当の答えを知っているのは俺ではないのだが…。

「母ちゃん」

俺は、まだ状況が掴めないでいる母ちゃんに声をかけた。

「うん？」

母ちゃんは、俺がこの名刺を差し出したことに少なからずショックを受けているようで気の毒になった。

だが、ここまできて話をやめる訳にもいかず俺は心を鬼にして続けた。

「この名刺の人…ここに来ただろ？」

「え！？」

母ちゃんは、一瞬動揺したが、すぐに気を取り戻してすっかりした口調で答えてくれた。

「ああ、きたよ…何回もね」

母ちゃんの表情がかすかに曇った。

「やっぱり…な」

俺は、お茶を啜った。そして、覚悟を決めて話を続けた。

「母ちゃん、このMK不動産の高橋って人…なんて言ってた？」

って言っても、母ちゃんの口からは言いつらいよな。じゃあ、

俺が母ちゃんの代わりに話すからもし、もし違ってたら言ってくれ。

えーっと、まず、このMK不動産の高橋だけど…。

母ちゃん！ストレートに聞くぞ。

この人…園（こ）を売ってくれって言ってきただろ。」

俺は、ここまでを一気に話した。

母ちゃんは、何も言わずにうつむいて俺の話を聞いていた。

代わりに口を出したのは冬月だった。

「売れ？…ここを？」

どうやら、さっき冬月が予想したこととは若干違う方向に話が進んでいるようだったが、母ちゃんは俺のここまでの話を否定しなかった。

そして、俺は冬月の言葉を勝手に”独り言”としてスルーさせて貰い話を先に進めることにした。

「…どうやら、ここを売れと言われたのは間違いないようだな。」

母ちゃん、なんで俺が、そのことを知っているのか聞きたいだろ。

それを今から話す…。

あ、その前に…母ちゃん、俺あの会社…やっぱり入らなきゃ

良かった。ん？ 何でって？ うん、もともとあんな大会社…

俺みたいなヤツが入れるような会社じゃなかったんだよ。

だって、そうだろ？ あの会社…『丸川商事』って言ったら、普通

大卒でもなかなか入れない大企業だぜ？ なんで、あの時に気付かな

かったんだろうな。

まあ、入るって決めたのは自分だから、そこを今さら言っても仕方ない

んだけど…。あ、ごめん！ そんなこと言われても何のことだか

わかんないよな。

あのな…あの頃…そう、俺が父ちゃんと毎日喧嘩してた頃だけど

丸川商事の社長が園三を訪ねて来ただろ？

もう6年以上前になるのかな？」

ここまでの話を聞いて冬月が声を漏らした。

「え…社長がここに!？」

俺は小さくうなづいて話を続けた。

「ああ、来たんだよ…社長が、ここに…」

『春山アキラ君を是非、丸川商事にください!』ってな…」

冬月は口を開けたまま俺の顔を見据えている。

そんな冬月に、俺は事の経緯いきわづを説明した。

「俺：高校時代、新聞配達のバイトをしてて、俺はそのバイトを3年間1日も

休まずに続けたんだ。そのことで俺は、なぜか県知事表彰を受けてそれが

全国紙の新聞にでっかく掲載されたんだ。その記事を見た丸川の社長が

『あの記事を見て私は深く感動いたしました。春山アキラ君のような、根性の

ある青年に是非とも我が社で働いて貰いたい!』ってスカウトしに来たんだよ。」

母ちゃんは、その昔話を何度もうなづきながら聞いていた。冬月は、俺の意外な

過去にただただ驚いた様子だった。

そして母ちゃんは、遠い記憶を思い出しながら言った。

「ああ、その通りだ…。その話を聞いて、あたしも父ちゃんも大喜びだったよ。

あんたの頑張りが認められたんだからね…。父ちゃんは、泣きながら喜んでたよ。

何度も何度も社長さんに頭を下げてお礼を言ってたっけ…。」

そんな話を聞かされて、俺はなかなか次の言葉を言い出せなかった。

しかし、俺は母ちゃんに真実を伝えるため重い口を開いた。

「かあちゃん…。あれ…嘘だったんだ。」

母ちゃんは、もう相槌を打つことさえも忘れて俺を見ていた。

「嘘、だったんだよ……。」

俺は、もう一度つぶやいた。

「嘘って…どういこと？」

母ちゃんが老眼鏡を外して俺の顔を覗き込んだ。やっと言葉が出たようだった。

「うん。実は…社長が、俺のことを新聞で知ったのは事実らしい。だが、奴は

俺が高校時代の3年間、1日も休まずに新聞配達して表彰されたって記事を見て

感動したからスカウトしに来た…って説明は大ウソ。

俺に近付いてきた本当の理由は、他にあったんだ。」

ここまで話すと、母ちゃんにもこの話の終着点がぼんやりと見えてきたらしく

「…え？ まさか…」

と絶句していた。そして、その伏せた目線の先にはMK建設の名刺があった。

俺は、軽くうなづいてから話を再開した。

「アイツらの本当の目的は、初めから園こだったんだよ。」

母ちゃんと冬月が同時に顔をあげた。

「アイツらは当時、大規模な介護施設を建設する計画を立てていたんだ。

そして、この土地が第一候補地になっていたんだ。おそらく、この話は

母ちゃんも覚えてるはずだ。」

ここで、母ちゃんが口を挟んだ。

「ああ、そういえばそんなことあったねえ……」

と、母ちゃんは遠い記憶を呼び起こすように天井を見上げながら目を閉じた。

そして、大きなため息をひとつ吐き出してからゆっくりと口を開いた。

「アキラの言うとおり、あの頃、ここに何かの施設を建てるから、是非土地を

譲ってほしいって、何度も訪ねて来た建設業者がいたよ。

ここに何を建てるのかは……まあ、聞いたんだろうけど、忘れたね。

ここを売る気なんてさらさら無かったからね。

でも、確かにそう言われてみれば、老人ホームがどうか言っていたかも

しれないねえ。

名刺も受け取らないで門前払いしてたからさ。覚えてないよ。

ところが、ある日……あんなにしつこく来ていた奴らがピタッと来なくなっただ。

あたしも父ちゃんも、『他にいい場所が見つかったんだろっ』って話してたんだ。」

母ちゃんは、記憶をたどるように言った。

「そうじゃなかったんだ。」

俺が言うと、冬月が合の手を入れてきた。

「と言いつと？」

「うん。奴らは何回頭を下げてても、父ちゃんと母ちゃんは絶対に土地を手放さないって思った。そんな時に、あの新聞記事が出た。

そう、俺がでっかく載ったあの記事を奴らは見たんだろっ。

それで、”コイツは利用できる”と思ったに違いない。

要するに…あの頃、ここに交渉に来て父ちゃんに門前払いされてたのは

MK建設…そして、そのあと俺をスカウトに来たのは、その親会社

『丸川商事』の社長、丸川哲也だったって訳だ。

まさか、父ちゃんだって母ちゃんだって、裏でこの二社が繋がって
いたなんて

想像もつかないよな…。

丸川の狙い通り、まんまと俺は丸川商事に就職した。そして園こを出た。丸川にしてみれば、これでお膳立ては出来た…はずだった。

だが、そう世の中都合良くいかないもので、俺が丸川商事に採用される

同時に会社は不景気の煽りを受けて施設建設の計画は一時中止になった。

俺を利用する機会がなくなっちまったんだ…。

しかし、あくまでも『一時中止』だったんだけどね。

俺は、もちろんそんな理由で採用されたことは知らずに仕事は頑張ったよ。

本当は、こんな所で働くのは性に合わなかったけど、俺が頑張れば『あけぼの』

の子供たちにも何か道が残せるかもしれない。と思っただし、何よりも父ちゃんと母ちゃんの顔に泥を塗るような事だけはしたくなかったから

俺は死に物狂いで働いたよ。

人付き合いとか苦手な俺だけど、友達もできた。

同期の夏樹ってヤツだ。

そして、あっという間に5年が過ぎた頃だ

その夏樹ってヤツが、ある日突然、課長に昇進したんだ。

本当は、入社5年目の若僧が課長になるなんて、あの会社では有り得ない

ことなんだ。

まあ、母ちゃんには、それがどんなに凄いことか分からないと思うけど…。

冬月なら分かるよな…ってゆーか、あのとき冬月も営業一課にいたもんな。

夏樹は、課長になってそりゃ〜喜んでたよ。結婚して子供も生まれただばかりで

これから金もかかる時だったから、余計に嬉しかったんじゃないかな…。

なんせ課長になると、給料が…10万だっけ？ 上がるんだよな、冬月。

え？ あれ、うそ？ なんだよ！ 5万！？

ま、5万でも凄いか…。だそうだ、母ちゃん。

とにかく、課長になると給料がいっぱい増えるらしく、それに関し
ては俺も

夏樹を羨ましいと思ったよ。

あの事実を知るまではな…。

夏樹は、確かに仕事は出来た。みんなアイツが課長になっても、驚
きはしたが

それほどの違和感はなかったはずだ。

冬月もそう思っただろ？

だが……そんな夏樹も利用されてただけだったんだ。

うん、うん、冬月が驚くのも分かる…実は、こういうことなんだ…。

実は…夏樹の実家は、ある田舎町で先祖代々続く酒屋をやってるん
だ。

夏樹は次男だから、酒屋は両親と夏樹の兄貴がやっているらしい。

夏樹が課長になる前、俺はよく夏樹とつるんで飲みに行ったり釣りに
行ったり

する仲だったから、よく自慢話を聞かされたよ。

地元じゃそれなりに有名な酒屋らしく、政治家が使う高級料亭に酒

を卸してるとか

言ってたっけ。

とにかく、夏樹にとってあの酒屋は自慢みたいだ。

でも、その夏樹の実家も狙われてるんだ…。

アイツは課長になった代わりに…もうすぐ大きな代償を払わされる。

「

母ちゃんは、無言で俺の話を聞いていた。

冬月は、さすがに夏樹の話には驚いたようだった…。

「冬月、夏樹のこと…ビックリした？」

冬月は、小さくうなづいて複雑な表情でつぶやいた。

「夏樹係長のご実家の話、私もよく自慢話を聞かされました…けど

あの酒屋さんが、狙われてるって…？ まさか、そこにも会社（つひ）が

施設を建てる気？」

「ああ、残念ながら…」

「何てこと…！ひどい…！」

冬月は怒りを込めて、湯のみを握りしめた手を震わせていた。

「そのことを、夏樹課長は…?」

「実は、夏樹はまだこのことを知らない。」

「え? 知らない? ご両親は…?」

「…うん…」

俺は、ここまで話しておきながら、一瞬ためらった。

「…春山さん? どうしたんですか?」

「うん、夏樹の両親は知っている。だって、連中は、夏樹本人ではなく」

夏樹の両親に直接、交換条件を突き付けたんだから。 」

「そんな! 交換条件って、どんな?」

冬月が身を乗り出して聞いてきた。

「うん…夏樹の両親に出した会社の条件ってのが、」

立ち退かないと…夏樹をクビにするってことなんだ。」

「ええ!? クビ!? 何それ! じゃあ、なんで課長なんか昇進させたの!?!」

「そりゃ、夏樹は交渉の材料なんだから、わざと昇格させたんだよ。」

同じクビにされるのでも、平社員の時よりも課長になってからクビにされる方が

心情的にキツイからな…」

「でも、そんな理不尽な条件！ 簡単にご両親が飲む訳…」

冬月が声を荒げて言った時だった。

「飲むわ。」

母ちゃんが言いきった。

「親だったら、理不尽な条件だろうと、飲むわよ…私でもきつとそうする。」

食堂の中に重苦しい空気が流れた。

その空気を押しつけて、口を開いたのは冬月だった。

「でも…」

「うん？」

「クビにするって、簡単に言うけど…クビにするには、それなりの理由が必要でしょ？ 夏樹課長みたいに仕事ができる人を、そう簡単に

クビするなんて出来ないはずだわ！」

冬月は、どこか確信めいたように言っているが、残念ながら『丸川商事』では、

今までもそんな不当な解雇は日常的に行なわれていたようだ。

最近では、そういう話はあまり聞かれなくなっていたのだが…。

「ああ、そつだよ。普通は…な。でも、あの会社は普通じゃないんだよ。」

と、俺が吐き捨てたように言うと、しばらくの沈黙のあと冬月が小さな声でつぶやいた。

独り言のつもりだったのだろうか、それとも心の声が無意識のうちに言葉に

なって吐き出されたのか…そんな感じの声だった。

「約束が…違う…」

俺は、耳を疑った。いま冬月は確かに「約束が違う」と言った。

約束とはなんだ？ いや、そう聞こえただけなのかもしれない。

「約束って？」

俺は、聞かすにはいられなかった。

俺の質問に、冬月は思わず『しまった』というような顔をしたが、すぐに冷静さを取り戻した。

「あ、うん…。あとで、話す…。」

こう言った冬月に、これ以上の詮索も無用かと思い俺は自分の話を続けることにした。

「なあ、母ちゃん？」

母ちゃんは、急に名前を呼ばれ少し驚いたように顔をあげて俺を見た。

「ん？なんだい？」

「母ちゃん、さっき、私でもそうする…って言ってただろ？」

母ちゃんの顔色が明らかに曇った。

「うん」

「母ちゃん、正直に答えてくれ。」

「何をだい？」

母ちゃんは、これから質問される内容に覚悟を決めたようにも見えた。

そんな母ちゃんの顔を見て、俺は一瞬言っつのをためらったが、思い切って

切り出した。

「母ちゃんも、連中まじゅうに言われたんだろ？」

母ちゃんの顔は『やっぱり来たか』という諦めの表情に変わった。

そして、俺はもう一度同じ質問をした。

「母ちゃんも言われたろ？ 連中まじゅうに…」

園こいを立ち退かないと俺をクビにするぞって

胸が詰まって息が苦しくなった。

まるで喉の奥に鉛の塊を押し込まれたようだった。

母ちゃんは、唾をぐくりと飲んでゆっくりと答えた。

「ああ、言われたよ…。」

「そ、そんな…！」

冬月が、声をあげて立ち上がった。

「だって！ここに建設する話は…」

「…再浮上したんだよ。」

俺は、冬月の言葉をさえぎって答えた。

「一時中止されてた、例の話が…最近になって再浮上したんだ。」

今度は、かなり本気だ。おそらく、ほぼ100%計画通りに実行される

はずだ。もう、凶面も出来あがっている。

連中は、ここを大規模な老人介護施設にする計画だ。」

「そ、そんな…」

冬月は、言葉を失った。

「で、母ちゃん…なんて答えたんだ？」

俺は、母ちゃんの答えを聞くのが怖かった。

内心、答えなくてくれと願っていたのかもしれない。

それより何より、こんな質問に母ちゃんは答えるのだろうか？

だが意外にも、母ちゃんはすぐに口を開いた。

「さっきも言っただろ…」

この一言だけを言うと母ちゃんは口を閉じて目を伏せた。

しかし、この質問の答えは、俺にはこの一言だけで十分だった。

「そうか……。やっぱりな……。」

なぜなのか分からないが、そのとき俺の目から涙がこぼれた。

母ちゃんが、俺のために園（こ）を手放そうとしたこと。

俺の知らないところで、母ちゃんが一人苦しんでいたこと。

それらを思うと自然に涙がこみ上げてきた。

悔し涙だったのかもしれない。

俺は、うつむいて肩を震わせた。

「母ちゃん……ごめん……。俺のせいで……。」

俺は、喉に詰まった鉛のせいで、うまく声が出せなかった。

そして、そんな俺を見て母ちゃんは言った。

「あんたのせいじゃないよ……。」

*

*

*

「許せない!!」

冬月が突然怒鳴った。

「なんの権利があつて、そんなことを!!」

冬月の言いたいことは分かる。だが、これが現実だった。

立ち退きを迫る場合、一番手っ取り早い方法が『脅し』だ。

「一昔前、ヤクザまがいな『地上げ屋』ってやつが、社会的に問題になって

いたが、まさにアイツのやっていることは、悪質な地上げ屋だった。

いや、これはもっと卑劣なのかもしれない。

欲しいものを手に入れるためには、手段を選ばない。

子供を人質に欲しいものを手にいれるなんて…。

「あ、でも…」

冬月が思い立ったように言った。

「うん？」

「もう、春山さん、あの会社辞めるんだから、そんな脅しに乗る必要も

ないじゃないですか!」

「ああ、そうだ。もう俺はあの会社とは関係ない…。」

俺と冬月の会話を聞いていた母ちゃんがゆっくり口を開いた。

「アキラ…あなた、会社辞めたって…そのことが原因なのかい?」

母ちゃんの顔はどこか悲しげに見えた。

「ああ、そうだ。母ちゃん、俺は園こを守りたい。俺のせいで

ここを手放そうなんて馬鹿なこと考えないでくれ。」

俺は、胸が詰まり声を出すたびに喉の奥が痛くなった。

「あなた…そんなことで、会社を…」

「そんなこと、じゃないだろ! ここを手放すなんてダメだ!」

俺は震える声で母ちゃんに迫った。

「でも、もう…」

かあちゃん表情が暗くなった。

「まさか…もう、契約しちゃった…とか?」

冬月が椅子から腰を浮かして身を乗り出した。

そして、母ちゃんは、しばらく沈黙したあと、無言のまま首を縦に振った。

「…そんな!」

冬月は、母ちゃんのその返事に落胆して、力なくそのまま椅子に座りこんだ。

母ちゃんも冬月も首をつなだれたまま、動かなかった。

「大丈夫だ。」

俺がそうつぶやくと、母ちゃんと冬月がゆっくりと顔をあげた。

「大丈夫だよ…。」俺は、もう一度言った。

「え?」

母ちゃんが不思議そうな顔で俺を見た。

「そんな契約は無効だ。俺に任せてくれ。」

俺は、ゆっくりと言った。

「任せてくれ…って、どうする気?」

冬月がそう言うのも無理はない。

だが、その質問は俺が逆に聞きたかった。

母ちゃんに「任せてくれ」と言ってみたものの、実はこの時点で俺は何の方策も持ち合わせていなかった。

どうすればよいのだろうか。

社長を殴って会社を飛び出してみたものの

俺があのお社と繋がりがなくなっただけで、この契約が白紙になった訳ではない。

俺は、俺のクビを守るため、園^園を失うくらいなら、自ら辞めてやると決めた。そして、どうせ辞めるなら…と、あの男をぶん殴ってやった。

会社との繋がりがやしがらみが無くなれば、こんな馬鹿げた話は消滅するもの

だと俺は安易に考えていた。

しかし、そんなに世の中甘いものではなかった。

母ちゃんは、すでにMK建設との契約を済ませていた。

母ちゃんと子供たちが、園^園から退去を迫られる日は

そう遠くないだろう。

まじいおなげさうじい。

まじいおなげ...

まじいおなげさうじいおなげ...

まじいおなげ。

第06章 『目覚め』

その夜、俺と冬月は事の成り行き上『あけぼの園』に泊まることになった。

母ちゃんには、まだ話したいこと…話さなくてはならないことがたくさんあったが、とりあえず俺も冬月も、今日はいろいろあり疲れていた。

話の続きは、明日…ということ、今夜は寝ることになった。

冬月は、昨年嫁いだひろ子のパジャマを借りることになったが

残念ながら俺は、お下がりを着れる相手がいなかったたので下着だけで寝ることとなった。

もちろん、部屋は別々だった。

6年前、俺が使っていた2階の部屋は今悠斗が使っていたので、

俺は、昔チビたちが使っていた部屋の2段ベッドで寝ることになった。

久しぶりに横になった2段ベッドは、膝を90度近く折り曲げないととても寝れる大きさではなかったが、その狭さが不思議と心地よか

った。

俺は、とても疲れていたが、なかなか寝付けなかった。

俺は2段ベッドの中で体を折り曲げ、今日一日の事を思い返した。

今朝、目覚めた時は…まさか、今夜ここで泊まることになるなんて夢にも思っていなかった。

社長をぶん殴って、辞表を叩きつけて…そのあとは…実際、その先
のことは

何も考えていなかった。

とりあえず事を起こすためには会社を自ら辞めるのが一番だと思っ
た。

俺が会社（こ）にいるから、脅しの材料とされてしまうのだ。

こんな会社にはもう末練は無いと思った。

一日も早く会社（こ）を去り、園を守る事だけを考えていた。

しかし、すべて俺一人で方を付けるつもりでいたが、まさか冬月まで
巻き込むことになろうとは…いや、まだ巻き込んだ訳ではないが…

だが、冬月には申し訳ないが、冬月も今日『会社を辞めてきた』と
いう。

この事実にも多少なりとも俺が関わっていることも事実だ。

冬月は『シエ・フルール』で言っていた…。

「私たちは運命共同体ですから」と。

その言葉を都合よく解釈させて貰えるならば、俺は冬月に巻き込まれて

欲しかった。おそらく今の冬月なら全面的に俺への協力を惜しまないだろう。

なぜなら、冬月は俺と同じくらい…いや、それ以上なのかもしれないが…

アイツ…丸川社長に恨みを抱いている。

冬月の真の理由は、まだ聞けずにいたが冬月もその小さな体に相当な闇を

抱えているようだった。

俺は、『あけぼの園』と同じくらい、冬月のこともその闇から救ってやり

たいと思った。

冬月と一緒にならそれが出来るかもしれない…俺はその時、ただ漠然とそう

思った。

しかし

その冬月は、突然俺の前から姿を消した。

*

*

*

*

*

朝、寝ぼけながら目を覚ますと、見知らぬ天井が目に飛び込んできた。

やけに低い。

俺の部屋の天井はこんなに低かったっけ？

そんなことを考えながら左に寝返りを打つ。

見知らぬ部屋…勉強机…俺はここでようやく思い出した。

そつだ！ここは『あけぼの園』だ。

俺は、昨夜ここに泊まったのだ。

そつ…冬月と一緒に！

一瞬にして昨日からの事が頭の中を駆け巡り、俺はベッドから飛び起きた。

ガン!!!

一瞬、目の前が真っ暗になった。

「イッテー!!!」

2段ベッドの低すぎる天井にしこたま頭を打ち付けた俺は、頭頂部を押え

ながらしばらくのたうち回った。

打ち付けた場所を何度か触ってみたが、どうやら血は出ていないようだ。

その代り、たんこぶが出来た。

俺は、頭を押えながら部屋を出て食堂に向かった。

壁にかかった目をやると時計は8時45分を指していた。

「げ!寝過ぎたか…」

冬月はまだ起きているだろうか…

「おはよう…」

俺が食堂に入ると、そこには誰もいなかった。

子供たちは……学校か……。

そういえば、今日は水曜日、本当ならば俺も出勤なんだな…と一瞬罪悪感に似た感情が湧きあがったが、すぐにそれを打ち消した。

それにしても、母ちゃんと冬月はどこに行ったのだろうか？

母ちゃんが、今日は、父ちゃんの命日だと言っていた。

まさか、俺を置いて先に墓参りに行っちまったのか？

とも思っただが、まさかそれはないだろう。

だって、母ちゃんは俺を墓参りに連れていくために泊めたのだから。

洗面所を覗いてみたが、姿はなかった。

風呂場は…さすがに覗けなかったが人の気配はないようだ。

俺は、食堂の掃き出し窓をガラッと開けて身を乗り出した。

目の前には『あけぼの菜園』が広がっている。

「かあちゃん、いるう？」

返事がないので、犬走りに置いてあったサンダルを履いて庭に

出ようとした時だった。

「あら、起きたの?」

裏庭の方から母ちゃんが歩いてきた。

右手には、大根と左手には菊の花が握られていた。

どうやら墓に飾る花のようだ。そんなものまで作っていたのか。

「おはよう、寝過ぎたわ…」

というと俺は両手をあげて伸びをした。

「あ、冬月は?」

俺が母ちゃんに聞くと、母ちゃんは少し驚いたような顔で振り返った。

「え?あんた聞いてないの?」

「は?何を?」

「何を…って、それだよ」

かあちゃんは、大根を使って食卓の上を指した。

「は?」

俺が振り返って食卓の上を見ると、そこには一枚のメモが置いてあった。

冬月が書いたものだった。

『急用が出来てしまいました。ごめんなさい。』

この御礼は必ず近いうちに伺います…

冬月アヤ』

俺は膝の力が抜けたような気がした。

「なんなんだ…これ？」

思わずつぶやいた。

「私が起きた時には、もうこれがここにあったのよ…」

母ちゃんが掃き出し窓から食堂に上がりながら言った。

「そうか…」

急用？ いったい何があったのだろう…。

こんな風に突然いなくなるようなヤツじゃない。

きっと何かよほどのことがあったのだろう…。

そういえば、夕方辺りから冬月の携帯がしきりに鳴っていたのと

何か関係があるのだろうか？

俺は、言い知れぬ不安に襲われた。

こんなことなら、冬月の携帯番号を聞いておくんだった。

メールアドレスを交換しておくべきだった。

俺は激しく後悔した…。

「なんだ…あんたに何も言わずに帰っちゃったのかい？」

母ちゃんに言われるまでもなく、その通りだった。

せめて俺には一言くらい言ってけよ…。

昨夜の抱擁は何だったのか…と複雑な思いだった。

それほど深い意味は無かったのだろうか…。

それから、俺は母ちゃんと、命日だからと言ってかけつけた

ゆかり、ひろ子の4人で父ちゃんの墓参りに行った。

6年ぶりに再会したゆかりとひろ子はすっかりママになっていた。

ようやく首の座った子供に「ほら！アキラおじちゃんだよ！」

と言われ、いきなり老けた気がした。

父ちゃんの墓は、歩いて15分ほどの場所にあった。

俺は墓前に手を合わせ、今までのことを父ちゃんに詫びた。

そして、『あけぼの園』を守ることを誓った。

第07章 『慟哭』

『あけぼの園』は、私にとって理想的な場所だった。

あそこにいる子供たちは、世間一般では『可哀相な子たち』なのかもしれない。

実際、私も今まで『施設の子』をそういう目で見ていた。

私には実の両親がいない。

しかし、叔母達夫婦が引き取り育ててくれた。

叔母達にとっては、”仕方なし”とは言え、なかなか出来ることではない。

私は幸せなのだ。と自分に言い聞かせてこれまで生きてきた。

しかし、はたしてそうなのか？

『あけぼの園』の子供たちを見てそう思った。

分からなくなった。

実の両親ではないにしろ、私は叔母という血の繋がりのある親類に引き取られた。

血の繋がりは何ものにも変え難い尊いものだ。

私は可哀相な子では無いはずだった。

たとえば、そこに『愛』など無くても…。

しかし、『親と子』に血の繋がりなど関係ないと言つ事を思い知らされた。

春山さんに連れられて訪れた『あけぼの園』には、『愛』が溢れていた。

青臭い言い方なのかもしれないが『無償の愛』というものを生まれて初めて

見せつけられた気分だった。

私は、ここで育ちたかった…と素直に思った。

私は、叔母達夫婦には愛されていなかった。残念ながら、これだけは自信をもって断言できる。

いや、叔母の真意は分からない。本当は、私が鈍感なだけで叔母は叔母なりに精一杯の

愛情を注いでくれていたのかもしれない。

私が、『よくばり』なだけのか？ 普通の親子関係を私はよく知らない。

母親が子供を抱き締めないことは当たり前のことなのだろうか？

分からなくなつた。

こんなことを考えながら、私は成り行き上『あけぼの園』に一泊することになった。

突然のことだったが、母ちゃんの心遣いが嬉しかった。

ほんの数時間、滞在しただけで私はその居心地に酔いしれた。

会社を辞め、行くあてもなかった。

許されるなら、ここで住み込みで働かせてくれないか…とさえ本気で考えた。

春山さんは、幸せだと思った。

こんなに素敵な家族がいて本当に幸せ者だと思う。

父ちゃんが亡くなっていたのは…心から気の毒に思った。

だが、春山さんが父ちゃんの訃報を聞いて号泣していた姿を見て、
どれだけ

春山さんが両親を愛し、そして愛されていたのかが分かった。

私は、育ての父…叔父を昨年亡くした。

しかし、泣くことは無かった。

私が眠りについた時、突然携帯電話が鳴った。

昼間から…私が春山さんのあとを追うように会社を出てから、何度も会社から

着信があつたが、すべて無視していた。

やがて就業時間が過ぎると着信は1件もなくなった。

こんな時間に誰だろう？ 私は、半分虚ろになりながら携帯を開いた。

その電話の相手は……ある病院からだった。

（冬月小夜子さんのご家族の方ですか…？）

叔母が、倒れ病院に運ばれた…という知らせだった。

私は、少ない荷物をまとめ『あけぼの園』を去った。

春山さんには声をかけようと思ったが…やめた。

*

*

*

*

*

『あけぼのちょう』の駅へ走った。終電はもう終わったか？

…と心配していたが、その心配は的中してしまった。

『叔母が倒れた…』 『叔母が…』 『母が……』

幸い、駅前のロータリーにはタクシーが1台だけ『空車』で待機していた。

車内を覗くと、運転手がない。

しかし、エンジンはアイドリングされたままだ。

運転手はどこでサボっている！？ 私は周囲を探した。

この際に限定1台のこのタクシーを他人に奪われないかと、無用な心配をしながら

ロータリーの周囲を夢中で見渡した。

しばらくして、駅舎のトイレから大きな欠伸あくびをしながら一人の男性が現れた。

「タクシーの運転手さんですか!？」明らかに運転手の制服を着た男性に、私は

分かり切った質問をした。

「あ、はい」運転手は、こんな終電も終わったこの深夜に突然声をかけられ多少驚いた

ようだった。

「お願いします!!」私は、催促した。

私が運転手に告げた行き先が病院だったことと、私の慌てた様子で運転手は事ならぬ

状況だということを感じたようだった。

無言でタクシーを飛ばしてくれた。

そして、たつぷり45分かけて私は叔母の運ばれた病院に到着した。

夜間受付の窓口で叔母の名前を告げると、職員が確認のためどこかに内線電話をかけた。

深夜の救急受付…待合室のベンチには深夜にも関わらず何人かの人が座っていた。

こんな時間に何をしているのだろうか？ と素朴な疑問が一瞬湧いてきたが、「もじゃ!？」

とも思い、その人たちの顔を見た。

がやはり、私の知っている顔は一人もない。居るはずがない。

どうやら、急に熱を出した子供を連れてきた家族連れのようなのだ。

叔母は夫を昨年亡くして以来、一人で暮らしていた。

叔母は、親戚とも疎遠だった…。倒れたからと言って駆けつけるような家族はいない。

『一人娘』の私を除いては…

受付の職員が、受話器を置いた。

「冬月さん…ご案内します…」

職員は、それだけ言うとドアを開けて事務室から出てきた。

案内？

少し違和感を感じたが、夜間だからか…と思いその病院職員のとを追った。

エレベーターのドアが開き、職員に乗るよう案内された。

まず私が先に乗り、職員が続いた。深夜の病院は、当然だが必要な場所以外の明かりは消され

不気味な静けさが漂っていた。

エレベーターが閉まると、職員はボタンを押した…

私の胸の中に、言いようのない不安と恐怖が襲いかかってきた。

心臓の鼓動が急激に激しくなった。

そして、間もなくエレベーターが地下2Fへの到着を告げ、ゆっくりとドアが開いた。

薄暗いエレベーターホールに、一人の男性が立っていた。

医師……であろうか？ 白衣を着ている。

その白衣の男性は、エレベーターから降りた私に深々と頭を下げた。

その姿を見て、私は悟った……。

叔母は亡くなったのだ。

*

*

*

*

*

私は、久しぶりに叔母と対面した。

自分でも意外だったが不思議と涙がこぼれた。

しかも、次から次へと溢れてきた。

涙だけではなかった。

言い知れぬ寂しさと悲しさと恐怖に襲われ体が震えた。

私は、号泣した。

叔母に抱きついた……。

しかし、叔母は最後まで私を抱きしめてはくれなかった。

第08章 『迷走』

あの日から二ヶ月が経とうとしていた。冬月からは何の音沙汰もなかった。

お互い電話番号もメールアドレスも知らなかった。

しかし、お互い同じ会社で働く仲間だったのだから、調べる気になれば調べる

ことは出来たはずだ。

だが、冬月からの連絡はまだない。

俺も連絡先を調べる気にはならなかった。

いや、調べる気は十分あった…。

しかし、冬月はあの日、自分の意思でここを去った。

よほどの事があつたに違いない。

残されたメモに書かれていた『この御礼は必ず近いうちに…』という社交辞令と

も取れる言葉を鵜呑みにした訳ではないが、俺は冬月からの連絡を待ってみよう
と思っていた。

俺がいま置かれている状況に冬月を巻き込みたくない…という思い

もあつた。

俺は、あの日：社長を殴って会社を飛び出した日からずっと『あけぼの園』にいた。

アパートも出た。

収入もなくなり、いずれ家賃が払えなくなるのはそう遠い将来ではないことが

分かり切っていたので、僅かな貯金が底を突く前に…と思い、すぐに解約した。

そして、園ニに戻ってきた。

母ちゃんも園の子供たちも、俺がここにまた住むことを快く受け入れてくれた。

そして、1ヶ月　2ヶ月が経ち、俺はここでの生活が日常になりつつあつた。

あの日以来、仕事はしていない。

実際のところ、俺が『丸川商事』を本当にクビになったのか？

それすらも確実ではない。『クビ』とは、俺が勝手に思い込んでいるだけで、実は

まだ在籍していて、俺は『休職中』という扱いになっているのかも
しれない。

しかし、だからと言って、あの会社に戻る気はなかった。
戻れるはずもなかった。

『あの日以来、仕事はしていない。』と言ったが、まったく何もしていない訳では

なかった。金にならない仕事は毎日していた。

そう、俺は園こいの運営を手伝っていた。

朝、誰よりも早く起きて、菜園に水をやり、朝食の支度をする。

チビ達を叩き起こし、着替えさせて朝食を食べさせ、学校に送り出す。

子供たちが出ていったあと、束の間の休息もそこそこに掃除、洗濯、
買い出し…と

俺は専業主婦よろしく朝から晩まで”こき使われ”た。

でも、そんな暮らしはちつとも苦ではなかった。

毎日、毎日、同じ事の繰り返しだが飽きることはなかった。

一日があつという間に過ぎた。

それほど充実した日を過ごしていた。

しかし、俺がすべき事はこんなことではないのではないか？

俺は何のために社長を殴り、仕事を辞め、ここに戻って来たたのか…

俺が今やるべき事は何なのか？

毎日、自問自答していた。

どうすればいい？

どうすれば、園こいを守れるのか…。

毎日考えていたが、良策は浮かんでこなかった。

母ちゃんは、すでにここを譲渡する契約書にサインしてしまった。

もちろん、猶予期間はある。

一年間…。

この一年間が長いのか短いのか、俺にはよく分からなかったが決して長くはないはずだ。

何故なら、この一年の間に『あけぼの園』は、新たな土地と家を探さなければならぬ。

ただの引越しではない。

児童養護施設という性質上、県や国との協議やら手続きやら…想像を絶する煩雑な事務量がある。

なによりも、子供たちだ。

この近辺でいい物件が見つければ良いが、もしも遠く離れた場所へ引越しとなると、

子供たちも転校を余儀なくされる。

それだけは避けたかった。

というか、それ以前にこんなバカげた契約など白紙にしてやりたかった。

しかし、母ちゃんが差し出した契約書の約款に何度目を通して、白紙に戻せるだけの

材料は見い出せなかった。

母ちゃんは、至って呑気だった。

「なんとかなるさ!」母ちゃんは、いつも話をはぐらかした。

それが、本心でないことは分かっていた。

母ちゃんが、俺…いや、俺たちに心配をかけまいとポジティブに振舞っているのが

かえって痛々しかった。

「なんとかなるさ!」 「なんとかなる…」 「なんとか…」

なんとか……

なるのか？

*

*

*

*

*

3ヶ月が経つても冬月からは何の連絡もない。

俺は…相変わらずだ。

その日もチビ達を学校に送り出し、商店街に買い出しに出た。

昔からずっと変わらぬ商店街…。

その一番駅寄りの場所に小さな本屋がある。

6年前には無かった。

いつ頃出来たのかは不明だが、本屋があるだけで何もなかった駅前
の雰囲気か

それらしく見えるのが不思議だった。

「たまには本でも読んでみようかな…」何気にふらっと立ち寄って
みた。

なんで急にそんなことを考えたのかは分からないが、あの日…

冬月を待つわずかな時間に読んだ小説の一説がずっと頭の中に残っ
ていたせいも

あるのかもしれない。

そういえば、あの時は『第1章』しか読んでいなかったが…続きは
どうなったの

だろう？

確か…タイトルは……リバー…あ、あった。

あの時は、新刊だったこともあり店先に平積みされていたが、今は
1冊だけが

ひっそりと本棚に収まっていた。

俺は、その小説を手に取り3ヶ月ぶりに表紙をめくった。

どうせなら…と、第2章からでなく1ページ目から読み進めてみた。

一度読んだ文章をもう一度読み返すなど、以前の俺なら『無駄』と
思っただろうが

これが意外と同じ文章とは思えない新鮮さがあるものだ。

「こっつて、こんな言い回しだったか…とか、ここの台詞ってこっつだっけ?とか」

一端いっぺんの読書家を気取って第1章を読み返していた。

そして、いよいよ第2章に差し掛かったところで俺は本をパタンと閉じた。

「1,400円になります。」

買ってしまった…。

俺が小説を買うなんて世も末だ…と一人で苦笑いした。

こんなもん読んでたら、母ちゃんはきつと俺がおかしくなったと思うに違いない。

部屋で隠れて読むことにしよう…。

* * * * *

『十文字勇人』

(じゅうもんじ) はやと(と)ルビがふられていた。

この小説の主人公の名前だ…。

こんな名前有り得ねーだろ、とツッコミを入れたくなるネーミングだが、小説の

登場人物とは、得てしてこういうものなのだろうか？

さて、お待ち兼ねの第2章の始まりだ。

読み始めてすぐに話は急展開をむかえた。

十文字が釈放されたのだ。

* * * * *

第2章 『迷走』

私は、釈放された。

それは、突然のことだった。

看守が現れた。壁にもたれ膝を抱えていた私は静かに顔をあげた。

看守は無言のまま鉄柵扉の鍵を開けた。

『面会か？』それともまた今日も、無意味な取調べだろうか…
私は扉を開けた看守を無視するように再び両方の膝の間に顔を埋めた。

『十文字、出る…』看守が言った。私は一度だけ聞こえない振りをした。

『聞こえなかったのか？ 出る。』看守が再びいらついた様に言った。

そして、そのあと看守が続けた言葉に私は耳を疑った。

『釈放だ。』

『釈放？』私は思わず声をあげた。

『何故』私の問いに看守は短く答えた。

『知るか』

よく考えてみれば『何故』と聞いた私が愚かだった。

そもそも私は人を殺してなどいないのだ。冤罪なのだ。

釈放されて当たり前だ。

そして私は簡素な…本当に簡素な手続きを終え出所した。

冤罪で3ヶ月もの間、私を拘束しておきながら、謝罪の言葉は何一つなかった。

私は、出所後、真つ先に自宅へと向かった。

そして私は驚愕した。

家が… 私の家が……

無かった。

『無かった。』という表現が、このような場合に適切なのかどうかわからないが、

そこに家らしき建築物は存在していなかったのだから仕方がない。

『無かった』としか言いようがないのだ。

そう…3か月前までは確かにそこにあつた私の…私たち家族の…家が…
取り壊されていた。

そして、今…私の目の前にあるものは、ただの空き地だった。
妻は、子供は…!? どこに行ったのだ!?

これは、一体どういう事なのだ!? 私は、全身の力が抜け落ちその場に崩れ落ちた。

しばらくの間、私はその空き地の前で放心状態となっていたが、何とか平常心を取り

戻すことに成功し、隣家のチャームを押しした。

『留守だった…』2件先の隣家のチャームを押しした。『留守のようだ…』

仕方なく向かいの家のチャームを…『誰も出て来ない』その隣…『留守…』

その後、数件先まで、すべての家を訪問したが結果は同じだった。
こんな時に…!!

そこで私は気付いた…。何かが変だ。何かがおかしい。

当然、突然我が家が消失していたのだから『変』なのだが、そうではない。

この地域一帯がおかしいのだ。

良く見れば、私が訪問した家は洗濯物や布団が干してあったり、車庫には車がある家

ばかりだ。雰囲気的にも留守にはとても見えない。

『居留守?』私の心の中に闇が広がった。
何が一体どうなっているのだ!?

私は、思い付いたようにバッグから携帯電話を取り出した。

そして、弁護士に電話を…しかし、3ヶ月振りに開いた携帯電話は、当然の如く

充電が切れていた。私は1キロ先のコンビニまで全速で走った。

無我夢中で走った。そして、電池式の携帯充電器を購入し店を出る

と同時に封を切り

震える手で携帯電話に突っ込んだ。

PWRボタンを押す。真黒だった画面に3ヶ月ぶりの起動画面が浮かび上がった。

『HELLO!』と無機質な文字が画面中央に踊った。

ようやく待ち受け画面に切り替わり、私は初めてここで涙が出そうになった。

待ち受け画面の画像：私と妻、そして娘の笑顔が三角形に並んで写っていた。

私は、乾いた唾を潤すため一緒に買った缶コーヒーを袋から取り出した。

手が震えて上手く開けられない。なんとか開けて一気に全部飲み干した。

ようやく手の震えも収まり、私は弁護士の電話番号を探した。そこで頭を鈍器で殴られた様な衝撃が再び私を襲った。

携帯電話のメモリーがすべて消されていたのだ。

刑務所に引き返して『どういうことだ!!!』と詰め寄ったところで、どうにもならない

ことは分かっている。

これは、畏だ…。何かが、何かとてつもなく大きな力に私は嵌められている。

警察も家族も弁護士も近所も……私にはすべてが敵に思えた。実際にそうであった。

何が起きている!? どういう事なのだ!?

*

*

*

*

*

「エライことになったな……」

俺は、つぶやいて本を閉じた。

この十文字に比べれば俺なんて幸せなのかな…とアホな事をぼんやり考えた。

部屋を出て食堂に向かった。そろそろ夕食の支度をする時間だ。

母ちゃんは、すでに食堂で畑から採れたての野菜を洗っていた。

「あら、あんた…珍しく部屋にこもって何してたの？」

母ちゃんは、じゃがいもの皮を剥きながら聞いてきた。

「ん？…うん、別に…寝てただけだよ」

俺は、小説を読んでする。なんて言えなかった。

どうしたんだい！？ と、おでこに手を当てられるのは目に見えていたから。

「今日は、カレー？」

「ごまかすように言っと、俺は母ちゃんに並んで流して手を洗った。

「ああ、そうだよ。今夜は、ゆかりとひろ子も来るんだってさ！」

「へえ、そうか…じゃあ、よりに腕をふりかけるか！」

母ちゃんと俺は並んで大量の野菜たちに挑んだ。

ゆかりとひろ子がやって来たのは、丁度カレーが出来上がった時だった。

「わあ！いい匂い！」入って来るなり大声をだしたのは、ひろ子だった。

「あ、あけぼのカレーだ！ よかったね、ルイ！」どう見てもカレーなんか

食べそうもない赤ん坊に言いながら、ゆかりも入って来た。

『あけぼのカレー』

読んで字の如く、あけぼの園…というか、母ちゃん特製のカレーだ。子供が一口で頬張るにはデカ過ぎる野菜がゴロゴロ入っていて、肉の代わりに

魚肉ソーセージが入っている。俺が…いや、俺だけでなくあけぼの園の子供たち

全員がこのカレーを食べて育った。

第09章 『閃き』

子供たちも宿題を終えて食堂に集まってきた。ゆかりとひろ子、その旦那と

子供、そして園の子供たち…

食堂は、いつにも増して大騒ぎだった。隣同士で話をするにも大声を張らないと

聞こえない程、おしゃべりと笑い声が絶えなかった。

そんな賑やかな家族たちの笑顔を見て、俺は思った。やはり、園を^こ

無くしてはいけない……と。

食事が終わり、みんな思い思いの事をしていた。俺は、厨房で大量の皿を洗っていた。

カウンター越しに食堂に目をやると、ゆかりとひろ子、そして母ちやんが食後のコーヒー

を飲んでいた。

そして、突然思い出したようにひろ子が食堂を見渡して誰かを探し出した。

「あれ？悠斗は？ ゆうとー！」ひろ子が大声で悠斗を呼んだ。

「ああ〜?」2階から悠斗の声が聞こえてきた。どうやら、ゆかりとひろ子の

旦那達とテレビゲームに夢中らしい。

しばらくして「なんだよ!いいところだったのにな〜!」とぶつぶつ言いながら悠斗が

食堂に現れた。

「ねえ、悠斗。アレ持って来てくれた?」ひろ子が悠斗の顔を見るなり聞いた。

「え?アレ…?ああ、アレね。持ってきたよ。」

悠斗は「ちよつと待ってて」と言い残し階段を駆け上った。

すぐに戻ってきた悠斗の手には大量の紙の束が握られている。

「なんだ、それ?」

洗いものを済ませた俺はエプロンで手をゴシゴシ拭きながら聞いた。

「ん?何でもないよ。広告。」

悠斗がひろ子の目の前にドサツと置いた。

「広告?」俺はテーブルの上に置かれたその広告を一枚手に取った。

それは、新聞の折り込みに入ってくる求人広告だった。これだけで

はない。

テーブルの上に置かれた広告はすべて求人広告だった。

「実はさあ……」ひろ子が広告を見ながらつぶやいた。

「いい仕事ないかな〜って思ってさ……」ひろ子は一番上の広告を取り眺め始めた。

「仕事？」

母ちゃんも目の前に広げられた広告の山から適当に一枚手にし眺め始めた。

「うん……なかなかうちも厳しくてね〜。悠斗に店から持って来て貰ったんだ〜」

ひろ子は、求人広告だけを片っ端から集めてきて！と悠斗に頼んでいたようだ。

それは毎日仕事配達をしている悠斗にしてみれば簡単なことだった。

「ひろ姉ちゃん、今はいい仕事ないよ〜」と生意気な口をきいたのは悠斗だった。

自分でもそれなりに協力しようと思ったらしく、条件が良さそうな仕事に赤ペン

で が付けてあった。

「そつだね…」

と言いながら、ひろ子は広告の隅々まで目を走らせた。

そんなやり取りを見ていたゆかりも「ゆかりも何かやろうかな」と言い出し、

ひろ子が退けた広告を広げた。

それからだった。

家族総出…と言っても、ひろ子、ゆかり、悠斗、母ちゃん、俺の五人で

『仕事探し大会』が始まった。

こうして見ると、世の中不景気で仕事がない。と言われているのが嘘なのでは

ないか？と思う程、求人広告はたくさんあった。

「これで何ヶ月分？」と悠斗に聞いてみると「はあ？一週間分だよ！」という

返事が返ってきて驚いた。

意外と仕事見つけるのって簡単なのかしら？

しかし、詳しく中身を見てその考えが甘いと言う事に気付いた。

確かに多種多様な求人が紙面には何十、何百と掲載されているが、どれも聞いた

こともない様な資格が必要な仕事や、時給が安い、運転手、深夜のみ、体力勝負：

など、なかなか好条件の仕事はないものだ。

ましてや、ひろ子のような赤子を持ったヤンママが出来る仕事は皆無に近かった。

昼間は子供を保育園に預けるにしても、働ける場所や時間は限られてくる。

仕事を探す事の難しさを、今更ながら思い知らされた気分だった。

ひろ子にも出来そうな求人を探していて、ふと思った。

俺は、ひろ子の仕事探しを手伝っている場合なのか？

俺が会社を辞め、園こに戻ってから三ヶ月が経つ。

俺はこの間、園この手伝いをしていた。

母ちゃんに少しでも楽をさせてやりたい。

そんな考えを言い訳に、俺は転職する努力もせず、ただ母ちゃんに甘えていただけ

なのでは無いか？

楽させて貰ってるのは俺の方なのかもしれない。

いや、それどころか俺は本来の目的を忘れてる。

俺は、父ちゃんの墓前に誓った。

『園（こ）を守る…』と。

残された一年間、正確には一年もない。

あの、ふざけた契約を白紙にするために一日でも早く何とかしなくてはならない。

突然、俺の胸中に焦りと不安が押し寄せた。

その時だった。

「やっぱしさあ…」

声を出したのは、ゆかりだった。「資格とかないと厳しいよね」

確かに、ゆかりの言う通りだ。

いい仕事が無い…とは言え、まったく無い訳では無い。

事実、これだけの求人が広告には載っている。

その中には、資格があればそこそこ好条件の仕事もいくつかある。

問題はその資格なのだが…

「やっぱ、ケアマネの勉強してみようかな…」

ひろ子がボソツと独り言の様につぶやいた。

「ケアマネ？」

母ちゃんが老眼鏡を外しながら聞き返した。

「うん。私の先輩がさあ、この前ケアマネ…ああ、正式にはケアマネジャーって

言っただけど、その資格を取ったんだあ。なんか、結構、合格率低いらしくて

相当勉強したみたいだけどね。」

ひろ子は大きな目をぱちくりさせながら言った。

「へえ、そうなんだあ…」

俺は小さく頷いた。

そして、しばらくの沈黙のあと、俺、母ちゃん、ゆかりの三人が声を揃えた。

「で？ケアマネって、なに？」

「ええええ！なに！？みんな知らないの？」

ひろ子がのけ反って驚いた。

はい、すみません。よく知りません。

母ちゃんとゆかりの顔を見てみたが、二人も俺と同じような顔をしていた。

仕方ない…。代表して俺が聞きますか。

「えっと…ケアマネって、確か…介護関係の何か…だよな？」

俺は知っている範囲で曖昧な確認をしてみると

「そ！」と一言返事をしたひろ子は、えっへんと咳払いをしてから説明を

はじめた。

「えっと、ケアマネ…ケアマネジャーってのはですね、簡単に言うと介護保険の

サービスを利用するお年寄りのためにケアプランっていう計画書みたいのを作る

人なんです。で、その介護保険のサービスってというのは…たとえば、ホーム

ヘルパーさんに家に来て貰って身の回りのお世話をして貰ったり、デイサービスや

デイケアと言って施設に通って介護やりハビリなどを受けるものもあります。

あ、それから自宅で介護が難しいお年寄りには介護施設に入所して介護を受けたり…

っていうのもありますね。そういういろんな介護サービスを、どうやって使っていけば

いいのか…を、利用者と話し合いながらプランを立てるのがケアマネジャーの主な

お仕事です！」

と、ひろ子はまるで市役所の職員ですか？という感じでスラスラと説明をしてくれた。

わざとらしい『ですます調』が気になったが、おかげで俺達にも何となく分かった。

そう言われてみれば、求人広告の中に『ケアマネジャー募集』という文字が度々出て

来ていた気がする。

…っと、その時だった。

俺の中で『何か』がザワつと蠢うごめいた。

それは言葉にならない感情だった…。

感情…ではないのかもしれない。なんとも言えないこの感覚………？
なんだろう？

何か分からないが、閃ひらき…にも似たこの感覚………。

今の、ひろ子の話の中に何かヒントがあるような気がしたが、それが何かが分からない。

だが、その『何か』の答えはすぐに出た。

ゆかりとひろ子の会話の中にその答えはあった………。

* * * * *

みんなで、あーだこーだ言いながら求人広告を眺めている時、ゆかりが言った。

「でもさー、けっこう大変なんですよ？ ああいう仕事って…」

「うん、でも…やりがいはあるそうだよね」

そう答えたひろ子は、子供の頃から面倒見がいい優しい子だった。

ひろ子なら、介護の仕事とかは向いているかもな…と思いながら俺は二人の会話に

耳を傾けていた。

「そうだね…でも、中には悪質な所もあるみたいだよ」

「そうなんだよねえ、この前もニュースでやってたよね…」

「うんうん、老人の虐待とか…あと不正請求とかねえ」

……ん？ 不正請求？ 俺は広告から目を離しゆかりの顔を見た。

「そそ、でもあの施設は結局、家族の通報で不正がバレたんですよ？」

「うん、やっぱり悪いことはバレちゃうんだよね〜」

俺はここで二人の会話に口を出した。

「ちょっと待ってくれ！そ、その施設って…不正がバレて、そのあとどうなったの？」

「え〜？ アキラ兄ちゃん、どうしたの？ 急にムキになって」

「あ、いや…別に…ただ、どうなったのかなあ〜って…」

俺は、苦笑いしながら必死に冷静さを装った。

「ふふ…変なの。うん、確かニュースでは、その施設は指定の取り消し？」

「って言ってたような…」

ひろ子が何かを思い出すように顎を擦りながら言った。

「指定…の、取り消し？」

俺には、そのペナルティが、どういう意味を持つのか…よくは分からなかったが

ひろ子とゆかりの話では、介護施設としての指定を取り消されるといふことは…

要するに、営業停止に追いやられること……のようだ。

その時。

俺は…俺の中で蠢いた『ざわつき』の正体をようやく捕まえた。

これだ！

「母ちゃん!!」

俺は、テーブルを両手でバン!と叩いて勢いよく立ちあがって叫んだ。

母ちゃんをはじめ、その場にいた全員が、突然の俺の行動に驚いて顔をあげた。

「どっしたの!?!」

ひろ子とゆかりが声を揃えた。

「母ちゃん、分かったよ…」

「え？ 何がだい？ どうしたの…急に…？」

母ちゃんは、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている。

「うん。 母ちゃん…。 あげぼの園、守れるかも…しれない。」

俺は、母ちゃんを目をまっすぐ見据えて言った。

「え？ どういうこと？」

そう聞いた母ちゃんに向かって、俺は、ゆっくりと腰をおろしてから言った。

「やっと、見つけた…」。

見つけたよ…。

あの、ふざけた契約を白紙にする方法を……」

第10章 『絶望』

俺は、その日なかなか寝付けなかった。

あの日以来、俺は毎日2段ベッドで寝ている。

他に広い部屋、大きなベッドもあったのだが何となくこの狭さ
が気に入ってしまった。

悠斗が持ってきた大量の求人広告の中には、結局ひろ子が働ける
なめばしい仕事は

なかった。

ひろ子は、『もう一度、家でゆっくり見てみるね』と言い広告の束
を持って帰った。

ゆかりもすっかり、ひろ子に感化されたく仕事探しを真剣に考
えだしたようだった。

求人広告に載っていた求人サイトのURLをメモして帰っていった。

俺は、さっき食堂でようやく見つけ出した解決の糸口を慎重に辿っ
ていた。

施設……不正……指定の取り消し……

何故、もっと早く気付かなかったのだろうか？

あの会社…丸川商事は、福祉事業で成長した会社だ。

毎年、数件の福祉施設を開設している。

そして、来年…ここにも新しい施設の建設が計画されている。

そのために、あけぼの園は…この家は立ち退きを迫られている。

アイツらの卑怯なやり方で母ちゃんは、契約書にサインをした。

この俺を守るために…

こんな契約を許す訳にはいかない。

俺は、父ちゃんにあけぼの園を守ると誓ったのだ。

この約束だけは絶対に守る。

そのための糸口をようやく見つけ出したのだ。

結論から言えば　　。

この契約を白紙に戻すためには、計画自体を潰すしかない。

問題は、その方法だ。

ひろ子たちがさっき言っていた。ああいう福祉施設は、県などの行政から

指定というものを受けているらしい。

要するに、営業許可みたいなものだろう。

その施設を運営する会社や法人などは、不正を起こすと当然それなりの

ペナルティが与えられるらしい。

その不正の内容にもよるのだろうが、その中でも最も厳しいペナルティが

『指定の取り消し』という訳だ。

結論は簡単だった。

あの会社の指定を取り消せばいいのだ。

丸川商事が、それほど重大な不正を働いていれば、の話だが……。

狭い2段ベッドの中で膝を折りながら考えた俺は、ここまですべてを整理し

終えたところでやっと迎えに来た睡魔に身を委ねた。

*
*
*
*
*

翌朝

俺は、一通りの家事を終えてから部屋に戻り、机の上から小説を手に取った。

そして、しおりひもを引っ張ってページを開いた。

第3章 『絶望』

私は、改めてバッグの中身を確認した。携帯電話のメモリーを全消去されたことにより

私の疑念は頂点に達していた。

警察、それに弁護士：何か大きな力が私を陥れようとしているのは
確実だった。

それに、妻と娘の失踪。私は、絶望の淵にいた。

ある日突然、身に覚えのない殺人容疑で3ヶ月間拘置所に入れられた。

ある日突然、理由も伝えられないまま釈放された。

そして、3ヶ月ぶりの我が家が：消えていた。家族とともに…。

拘置所に預けたバッグは、釈放の手続きの時、看守によって運ばれてきた。

「荷物はこれで間違いはないな？」と聞かれ、簡単に中身を確認しただけだった。

私は、コンビニの駐車場の片隅に座りこみ、バッグの口を大きく開き逆さまにして

バサバサと振った。バッグからは財布、手帳、定期入れ、眼鏡ケース、ハンカチなど

見慣れた私物がバサバサ落ちて駐車場に散乱した。

特に怪しい気配もなく、散乱した物たちを再びバッグに戻しているとき、見慣れぬ物が

転がっていることに気付いた。

これは、明らかに私の持ち物ではない。最初からこの駐車場に落ちていたものだろうか？

しかし、それが私のバッグから落ちた物だということは手にしてみてもすぐに分かった。

それは、USBメモリだった。

長さは5〜6センチ程の大きさで色は全体的にシルバー一色だった。その小さな本体の表面

にはメーカー名か商品名のどちらかと思われるロゴが赤い文字で印刷されている。

なぜ、そのUSBが私のバッグに入っていたものだと分かったか？ そのUSBメモリには

マジックで乱暴にこう書かれていたのだ。

『十文字』

紛れもなく私の名前だった。しかし、当然私はこんなものをバッグに入れた覚えはない。

確かに私は仕事でUSBメモリを使用することはあったが、このタイプのUSBメモリは使ったことがない。そもそも仕事で使用するUSBメモリには、厳しいセキュリティが設けられていて社外への持ち出しは厳禁だった。

「なんだ、これは？」

私は、アスファルトの地面にあぐらをかき思案した。何故、こんなものが私のバッグに入っているのだ？私が入れた物ではない。では…誰が？

答えは一つだった。拘置所で混入されたとしか考えられなかった。

しかし、何のために？

その謎を解明する方法は一つだ。そうだ、パソコンにこのUSBメモリを接続すればよいのだ。

その簡単な行為が、今の私には難しかった。なぜなら、私にはそのパソコンが手元にないのだ。私のパソコンは、自宅2階の書斎にあったが、今は…その自宅ごと消え失せている。

どこかに、このUSBを接続できる場所はないか？

この不可解な状況の謎を解明する手掛かりが、この小さなUSBの中に収められているという

ことは、私には本能的に分かっていた。

とにかく今の私にはどんな些細な情報でも必要だった。情報だ。情報が欲しい。私の身に今いったい何が起きているのだ！？私は、今しがたバッグに戻した黒革のサイフを取り出した。二つに折られている財布を開いて札入れを確認した。さすがに現金には手が付けられてはいなかった。所持金、5万3千円。幸い、クレジットカードやキャッシュカードなども無事なようだ。

さて、どうする！？ パソコンを購入するか？ 私は、迷った。いや、駄目だ！ネットの接続環境がない。私は、立ち上がり駅に向かって歩き出した。ほどなく駅に着き、私は自動改札に定期をかざす。だが、ゲートは開かなかった。まさか！？と思い定期券を見ると、案の定有効期間が先月で切れていた。仕方なくひと駅分のキップを購入し電車に飛び乗った。流れる車窓に目を泳がせ私は再び考えを巡らせた。

「これはいったい何なんだ！？ 誰が、何のために私を陥れようとしているのだ！？」

妻と娘のことが気がかりでならなかった。二人は今、どこで何をしているのか？ 私が拘留され、ひと月ほどの間は毎日の様に面会に来て涙を流していた妻と娘…。

あの涙の意味が私には分からなくなっていた。10分で電車は停車した。私は駅前の雑居ビルに飛び込んだ。入口には大きな『マンガ喫茶』の看板が立っている。そう、ここならパソコンが使えるはずだ。看板にもそう書いてある。

【マンガ喫茶 ドリーム】

- ・まんが
- ・インターネット
- ・DVD
- ・ゲーム
- ・マッサージ
- ・シャワー

私は、初めてマンガ喫茶に入った。私の住む街にもあったのかもしれないが、わざわざ隣駅のこの店を選んだのは、真っ先に頭に浮かんだのがいつも電車の中から見ていたこの店だったからだ。

今まで私はこういう店には無縁の生活を送っていたし、正直こんな店に入りにくいと思っている連中はろくなもんじゃなかった。まさか、私がこの店に入店することになるとは…。

店内は、予想以上に狭苦しく薄暗かった。そして、煙草の匂いと飲食物の匂いが混ざり合った異様な悪臭が鼻をついた。自動ドアが閉まり出入口付近で戸惑う私に

無愛想な男性店員が言った。「初めてですか？」

「あ、はい…」私は、小さく頷き受付カウンターに近付いた。

まず会員登録が必要と言われ、私は登録用紙に必要事項を記入した。『住所』の欄には空き地となった我が家の住所を書き、『お勤め先』の欄には

『無職』と記入した。

私は、無実の罪で拘留されて間もなく、会社から一方的に解雇通告を言い渡されていた。

すべての欄を埋め店員に用紙を渡す。店員は、無言のまま私の個人情報端末機械

に入力しはじめた。そして最後に身分証明書の提示を求められた。

私は、バッグから財布を取り出しその中に入っている免許証を……

ない！私は慌てて財布の中を隅々まで調べた。しかし免許証はどこにもない。

念のためバッグの中もすべて見たがやはり結果は同じだった。

『やられた……』私は、呻うめいて天井を仰いだ。

「免許証、家に忘れたみたい인데……」私は店員に聞いた。

「ああ、じゃあ保険証とかでもいいですよ」店員は機械的に答えた。

「保険証もないな……」保険証など普段から持ち歩いていなかった。

店員は、しばらくの沈黙したあと「じゃあ、無理ですね……」と冷たく言い放った。

「なんとかならないか？」私は詰め寄った。

「仕事で……今すぐ……パソコンを使いたい。」私は心の奥底から湧き出る苛立ち

を抑えながら懇願した。

店員は私の切羽詰まった様子を見て、一瞬眉を歪めたあと登録用紙に目を落とした。

そして、ニタッと口端を上げ「……無職じゃん」と呟いた。

確かに、その男はそう呟いた。私の聞き間違いではないはずだ。

私が気付いた時。

眼前のカウンターの上には若い男の体が横たわっていた。

俯せでカウンターの上に腹を下に倒れている。その両腕は私の目の前でだらんと

床に向かって垂れ下がっていた。

私は握りしめた自分の右手を見た。その時初めて私の右手に大量の血液がこびり

付いていることに気付いた。

私は、床に落ちた登録用紙を拾い上げ誰も気付いてないことを確認してから静かに

店を出た。

これから先、私はどうなっていくのだろうか…

さっきまで、私は絶望の淵を彷徨っていた。

だが、今はその絶望の淵から地獄の底へ私は自ら飛び込んでしまった様だ…。

*

*

*

*

*

ふう…

っと、短い溜息を一つ吐き出して本を閉じた。

しばらくの間、閉じた小説をぼんやりしながら見つめていた。

俺は考えていた…。

「そっか…そうだな…」そうつぶやくと本を机上に置いた。

そつだ、まずは情報だ。情報収集だ。

そして庭仕事をしていた母ちゃんに声をかけた。

「ちょっと出かけてくるわ…」

「あいよ」母ちゃんは一言返事を返し俺を見送った。

俺は、最近こうして外出することが多くなった。

「毎日どこに行ってるんだい？」と母ちゃんに一度だけ聞かれたことが

あったが「うん、ちょっとね…」とだけ答えた。

母ちゃんは「ふうーん」と、言ったきりそれ以上の詮索はなかった。

俺は小説『リバーズ』の主人公、十文字勇人よろしく情報収集に時間を

費やしていた。小説の話を参考にした訳ではないが、ほぼ毎日、隣駅の

マンガ喫茶に通った。もちろんマンガを読むのが目的ではない。

インターネットだ。

あけぼの園にもパソコンがあるにはあるのだが、悠斗の部屋に置いてある

ため使うのに躊躇した。

それよりも園でコソコソやるよりも、マンガ喫茶の狭い空間が集中出来る

調度よかった。

幸い、俺は簡単に会員登録が出来た。

俺はまず、介護保険の制度についてインターネットを使い調べはじめた。

それは、調べるといふよりも『学んだ』と言った方が合っているかもしれない。

約一週間をかけて、俺は介護保険制度の全般的な知識をほぼ習得した。

昔から勉強をするのは嫌いではなかった。

そして俺は市役所へ行き介護保険を担当する係の窓口を訪れた。

その目的は、俺の習得した知識をテストするためだった。

『親戚に介護が必要な年寄りがいるので、介護保険制度について詳しく』

聞きたい。』と、俺は、何も知らない振りをして職員から制度についての説明

を受けた。

テストの結果はこうだ。

俺の方が知識は上だった。所詮、市役所の職員など、この程度か…と思わせる

程の簡単な説明をされただけだった。

ただ単に俺がバカそうに見えて分かりやすく説明しただけなのかもしれないが、

ちよつと突っ込んだ質問をすると、職員はあからさまに面倒臭そうな顔をして

分厚いマニュアル本を開いた。俺の中に明確な答えはあったが、その答えを

いつになったらこの職員は口にするのかと待ってみた。

が、結局その上司、またその上司と交代したところで『あとで電話します。』

と言われ俺は明確な答えも聞けずに市役所を後にした。

これで、俺は基本的な介護保険に関する知識を身に付けた。と、思われる。

あとはいよいよ、本丸を崩すのみだ…。

俺は、自分が最近まで働いていた会社『丸川商事 株式会社』について調査を開始した。

第11章 『誤算』

俺の目論みは見事に外れた。

どんなに調べても調べても、丸川商事の経営する介護施設は優良施設だった。

実際のところ、丸川商事が直接施設を経営している訳ではない。

丸川商事の関連会社に『株式会社ハートランド』という会社があり、

丸川商事が手掛ける福祉施設、特別養護老人ホーム、有料老人ホーム、グループ

ホームなど…全てこのハートランドが経営していた。

あの男…丸川哲夫は、その『株式会社ハートランド』の会長を務めていた。

ネットで『丸川商事』『MK建設』『ハートランド』いろいろなキーワードで

検索をかけて、さらにそれらの口コミ情報を隅々まで調べた。

しかし、残念ながらそのいずれの企業にも、不正を働いているような事実は

発見できなかった。

やはり俺の考えが甘かった。

あれだけ卑劣で悪質な手段で手に入れた土地に建てた施設だ。

不正の一つや二つ当たり前の様に横行しているだろうと勝手に思い込んでいた。

だが違った。

ネットで見る限り、ハートランドが経営する福祉施設は、どれも好評で

常に入所待ちの老人が何十人も出ているらしい…。

今の世の中、ネットの情報がすべてだ。と、俺は思っている。

ネットでこれだけ探しても手に入れられない情報を、足を棒にして走り

回ったところで掴めるとはとても思えない。

「駄目かあ…」俺は思わず声をあげて背伸びをした。そして、ここがマンガ喫茶

だということ思い出し、はっと口を閉じた。

俺はソファをリクライニングさせて体を倒した。ふと腕時計に目をやった。

今日は、もうかれこれ6時間パソコンと睨めっこしている。

いい加減、目が疲れてきた。

俺は両腕を頭上に伸ばし大きな欠伸をしてから静かに目を閉じた。

今までの苦労は無駄だったのだろうか？

介護保険制度については、いつでもケアマネの資格が取れるんじゃないかと

思うほどの知識を習得したというのに…。

「あゝあ…」俺は深いため息をついてから体を起こして、テーブルの上に

置かれたドリンクバーのコーラをズルズルと啜った。

こんな無駄な時間を過ごすならば、あけぼの園の移転先を探した方が早い

のでは？とさえ思えてきた。

しかしまあ、介護保険の勉強をしてもまったく無駄になることもあるまい。

いずれ母ちゃんだって年をとれば介護が必要になるんだし…。

それに、ひろ子がもし本当にケアマネの資格を取ろうと考えている

なら、

少しは教えてやる事が出来るかもしれない…

そう自分に言い聞かせ、残ったコーラをズズズと一気に飲み干した。

その時…俺は、ふとひろ子の言葉を思い出した。

あの日、そう『仕事探し大会』の日、食堂で話したひろ子の言葉を。

*

*

*

*

*

「でもさ、介護の仕事って大変なんですよ？」

ゆかりが眉をひそめて聞いた。

「うん…でも、先輩の話ではやりがいもあるし、楽しいってよ」

ひろ子は小さく頷きながら答えた。

「へ、でも好きじゃないと出来ないよね…ああいう仕事って」

「そうだね…。まあ、わたし結構人の世話とか好きだし…いいかなって。」

「うん、ひろ子なら向いてるよ、きっと！」

「へへ、そうかな…でも先輩が言ってたけど、介護の仕事って結構裏ではいろいろあって大変みたいだよ」

「え〜！？そうなの〜？いろいろって何？」

「う〜ん…よく分かんないけど、相手がお年寄りだからね…本人はもちろん、家族とのトラブルも結構あるみたいだし…」

「そうなんだあ…ああいう仕事してる人って、みんないい人そうだから」

「トラブルなんて無さそうだけどね〜」

「それがさ〜、そうでもないみたいだよ。」

「と、いつと？」

「うん…特に施設とかはさあ、結局、入所者…つまりお年寄りを人質に」

「取ってるようなものじゃない？あ、言い方は悪いけどね…」

「う、うん…人質って…はは」

「でも、実際そうみたいだよ。施設に入る人って、家族から見放された

ような人中にはいるじゃない？」

「ああ、よく聞くね…」

「そういう家族にしてみたら、ちょっとくらい文句があっても、なかなか

施設に言えないらしいのよ」

「そういうものなの？」

「うん…だって、文句あるなら出てってくれ！って追い出されたら自分たちが

大変じゃない。」

「ああ、そうかあ…でも…いったいどんなトラブルがあるの？」

「うん…いろいろあるみたいだけど…先輩の話では、虐待とか日常的に

あるみたいだし」

「えー！！虐待！？」

「うん…。相手のお年寄りが認知症だと、そういう話は表に出ないしね…。」

「そっかあ、死人に口なし…あ、失礼！ 認知症に口なし…って訳か…ひどいね」

「うん。ま、そんなのはごく一部の悪徳施設なんだろうけどね…」

そんな会話を、俺はあの時なんとなく聞き流していた。

が、これだ！

ネットで探しまわっても見出せない答えはここにある！

俺は、急いで狭いブースを飛び出した。

*

*

*

*

*

俺は、マンガ喫茶を後にして電車で飛び乗った。

そして、『あけぼのちよう』とは逆方面に向かった。

夕方の上り列車には乗客はまばらだった。

授業をサボったのだろうか？終業時間には、まだ早いはずの女子高生の

グループがボックスシートで騒いでいる。

そのほかの乗客は、俺の他には5、6人いるか…みんな俯うつむいて居眠りを

している。

俺は、勢いでこの上り列車に飛び乗ったが、当てがある訳ではなかった。

ただ、俺の記憶の中に残っていた、ある施設がこの先にある。

俺はただ漠然と、そこを目指していた。

20分程で駅に到着し、俺は電車を降りた。

ここからは少し歩く…。

俺は覚悟を決めて歩きはじめた。

と、その時、駅前のバス乗り場に一台の派手なマイクロバスが入ってきた。

車体全体をピンク色にペイントされたそのマイクロバスは、前後左右に『特別

養護老人ホーム 『ほのぼの館』と施設の名前が書かれていた。

俺が目指している施設だ。

「デイサービスかデイケアの送迎かな？」

俺は最近覚えたての専門用語を使ってみたくて独り言を呟いた。

そして、そのマイクロバスに近づき半分下げられた窓から運転手に声をかけた。

「あの〜、すみません。」

俺に気付いた運転手は、窓を一番下まで下ろし「はい？」と愛想よく返事をした。

俺と同じ位の歳だろうか？ 意外に若いことに驚いた。

「あ、突然すいません…あの〜、これって、ほのぼの館のバスですよね…？」

俺は一步下がりが大袈裟に車体の横に書かれた施設名を見る振りをした。

「ええ、そうですね」運転手も窓から半身を乗り出し、自分のバスの腹を

除き込んだ。

「…ですよね。」俺は分かり切った質問をして恐縮です。という顔

をしながら

続けた。

「あの…伺いたいんですけど…そちらの施設に柏原さんって方、働いてませんか？」

突然の俺の質問に、運転手は一瞬答えを躊躇ためらったようだ。

一瞬だけ真顔になった。

それもそうだ。突然声をかけられて、そんなことを聞かれれば…。

「あ、すみません！運転手さんには分かりませんよ…変なこと聞いて

すみませんでした。」

俺は、苦笑いして頭を下げた。

そして「失礼します…」と小声で言い、その場を立ち去ろうとした時だった。

「いますよ！」運転手が答えた。

俺がはっとして顔をあげると、運転手の表情は元の愛想の良い笑顔に変わって

いた。

「柏原愛…ですよね？」

運転手は意外にも、フルネームを語った。

「あ、はい！ご存知ですか！」

よかった。まだいたか！

わざわざ来た甲斐があったと俺はほっとした。

俺が礼を言おうと口を開きかけた時、一瞬だけ早く運転手が言った。

「もちろん知ってますよ。柏原愛は、私の妻ですから…。」

運転手の言葉に俺は言葉を失った。

第12章 『邂逅』

「ま、マジっすか!？」

思わず呟いた。

「ええ、そうなんですよ…。」

運転手は照れ臭そうに笑った。男の俺から見ても嫌みのない笑顔だった。

伴竜一にでもなればいいのに…と思うほどのイケメンだった。

なぜ、こんなイケメン君が介護施設の運転手などしているのか…俺は何となく

違和感を感じた。

「そうだったんですかあ…。」俺が、大きく頷くと

「あ、すみません！ 出発しないと…。」

と運転手が後ろの座席の方を軽く振りかえった。

車内を覗きこむと、何人かの老人が座席に腰をおろしていた。

「あ!どうもすみません!」

俺は、とっさにバスから離れて頭を下げた。

運転手は、無言のまま微笑んで会釈すると窓を半分ほど上げた。

そして、ウインカーを出して発車の準備を整えた。

俺は、バスの通行の邪魔にならない様に2、3歩うしろに下がった。

その時、バスがウインカーを戻し運転手が再び窓を下げた。

そして全開になった窓から上半身を半分乗り出して俺に声をかけた。
きた。

「もしかして、これからうちの施設に行くつもりでしたか？」

俺は、見事に言い当てられ、思わず苦笑いをした。

「あ、はい。実は…そうなんですよ…」

* * * * *

「なんか…すいませんねえ」

俺は恐縮した。

「いえいえ、どうせ戻るところでしたから」

結局、こういう結果になった。

俺は、運転手の好意に甘えて便乗させてもらうことにした。

「よかつたら、乗って行きませんか？」

本当にそんなつもりで声をかけた訳ではないのだが、運転手は気前よく

声をかけてくれたのだ。俺は走りだしてすぐに運がよかつたのかも
しれない。

と運転手の好意に感謝した。

駅から歩いて行くつもりだったが、こうして車で走ってもかなりの
距離があった。

車内には、3人のおばあちゃんが座っていた。

バスに乗り込むとき丁寧に頭を下げると、おばあちゃんたちは目を
細めて

「あい。こんにちわ」と歓迎してくれた。

俺は、左側の最前列のシートに座った。

バスが、最初の信号を左折した時に運転手は口を開いた。

「入居者のご家族の方ですかあ？」

俺は一瞬「そうだ」と嘘をつこうとも思ったが、そんな嘘、すぐにバレることは

分かっていたので正直に話をすることにした。

「いや、実は…柏原さん…あ、いや、え〜っと、奥さんにお話しがあつて…」

俺は、自分でも軽く動揺していた。

俺のその言葉を聞いて、それまでじつと前方を見て運転していた彼が首を俺の

方に向けた。

「え！？ そうなんですか！？」

その表情は驚き半分…といった感じの複雑な表情だった。

「あ、はい」

俺は、素直に返事をした。まさか、変な勘違いしてないだろうな…？と、不安になったが、次の言葉でその心配は吹っ飛んだ。

「あ〜！ そうだったんだあ…ごめんなさい！ アイツ、今日休みなんですよ。」

運転手は、右手で自分の額をパチパチと叩いて

「あ、駅まで戻りますか!？」と再び顔をこちらに向けてきた。

「いえいえ!ー!そんな、ここまで来て結構ですよ!ー」

俺は両手を振った。

「そうですね、先に聞けばよかったですね」

運転手は、本当に申し訳なさそうに前を向いたまま軽く頭を下げた。

どこまで人がいいんだ?と、俺はもつと申し訳ない気分になった。

「いえいえ、本当に気にしないでください。」

俺は右手を振った。

そして、2つ目の信号を右折し少し走るとバスは停車した。

3人のおばあちゃん達は「はい、ありがとね!」と言い、バスを降りた。

俺と運転手は、そのおばあちゃん達がバスから降りる時に軽く手を貸し

無事に建物の中に入るのを見守った。

「あ、あの〜」運転手が、おばあちゃん達の姿が見えなくなったのを

確認してから言った。

「はい？」

「ちょっと、待っててもらっていいですか？」

「あ、はい。いいですけど…」

「ここじゃ、なんですから…」と言われ、俺は案内されるまま施設の中に通された。

初めて入る介護施設。

思ったほど暗いイメージは無い。

俺が、ここで待っててください。と通されたソファが置かれた玄関ホールは

さながら、ホテルのロビーといった雰囲気だ。

ところどころに手入れの行き届いた観葉植物がセンスよく配置され、壁には

落ち着いたきのある絵画が高そうな額縁とともに飾られている。

『金かかってそうだな…』俺が感じた第一印象だ。

外は、だいぶ日が傾き薄暗くなってきた。

そういえば、夕飯の支度の時間だな…と腕時計に目をやった時だっ

た。

「お待たせしました！」

さっきの運転手が小走りにやってきた。

「さ、行きましょう！」

「え…行くって…どこにですか？」

俺が聞くと

「駅まで送りますよ。もう俺も帰りですから」

と、運転手は車のカギがぶら下がったキーホルダーを俺の目の前でチャラチャラと振って見せた。

俺は、ここまで言われて断るのも逆に失礼かと思い、素直に甘えることにした。

*

*

*

*

*

職員の駐車場は施設の裏手にあった。俺と運転手は入って来た正面玄関から

ではなく、職員専用と思われる通用口から表に出た。

途中、何人かのスタッフと擦れ違ったが、みんなバタバタと忙しそ
うに動き

回っていた。

「みなさん忙しそうですね…」

俺は半歩前を歩く運転手に声をかけた。

「あ、ええ…ちょうど食事の時間なんですよ」

運転手は軽く横顔を見せながら答えた。

なるほど時計を見ると時刻は6時になろうとしていた。

運転手が、ワイヤレスキーのボタンを押した。

すると駐車場の一番奥からピュイッと解錠を知らせる音があがった。

外はどつぷりと日が暮れて駐車場には街灯の明かりが点いている。

車に向かう途中、運転手が言った。

「あ、そういえば…お名前お聞きしてなかったですよね…」

街灯に照らされた横顔は爽やかだった。

「あ、そうですね！すいません。春山と言います。」

俺は、負けじと爽やかな笑顔を作って見せたが、彼はもう車のドアに手をかけていた。そして

「……春山……さん？」

と、一瞬だけ表情を強張らせた。

俺が、助手席のドアを閉めると同時に運転手は口を開いた。

「僕は……」

と、何か言いかけて運転手は口をつぐんだ。

両手でハンドルを握りしめ考え込んでいるようだった。

どうしたのかと、俺が横顔を覗くと運転席の彼は、はにかみながらこう言った。

「春山さん、笑わないでくださいね……」

何を笑えと言うのか俺には理解できず、きょとんとした顔をしていると

彼は続けてこう言った。

「僕は……僕の名前は『伊集院』です。『伊集院 竜一』って言います。」

失礼だとは思ってたが笑ってしまった。いや、笑いを堪えた。

おいおい、小説の主人公みたいな名前のヤツがここにいたよ。と思
いながらも

「へえ、伊集院さんですかあ。かっこいい名前ですね！」

と感嘆の声をあげてみせた。

「ははは…嫌いなんですよね、この名字…。なんか、名前負けし
てますよね。」

そう照れ笑いをした伊集院だったが、なかなかどうしてそのイケメ
ンぶりなら

十分名前に相応しいと俺は心から思った。

「いやいや！全然。伊集院さんイケメンだし、ぴったりじゃないで
すか！」

俺はお世辞でもなく本心から言った。すると伊集院は、謙遜する訳
でもなく

「ありがとうございます。お世辞でも嬉しいです。」と笑顔で頭を
下げてから

こう続けた。

「でも、妻は嫌がってますよ…この名前…。あ！そういえば、妻で

すよね！

春山さん、アイツに用事があったんですよね？」

そこで、改めて俺と伊集院は愛の存在を思い出した。

*

*

*

*

*

『柏原 愛』あ、いや…今はもう『伊集院 愛』になっているようだ。

実は、俺は愛と付き合っていた。

いわゆる『元カノ』ってやつだ。伊集院にこのことは当然言えるはずが

ないのだが、彼は気を利かしてこう言いだした。

「春山さん、ちょっと待っててください。」

そしてジーンズのポケットから携帯電話を取り出して電話をかけた。めた。

まさか。

と一瞬嫌な予感がしたが、その予感は的中した。

「あ、愛？オレ、オレ！今から帰るんだけどさあ、お客さん連れて行くから…」

おいおいおい！勘弁してくれ！

俺は慌てて電話中の伊集院の横で両手を振った。「いいですって！いいですって！」

しかし、伊集院はそんな俺のことを品のいい笑顔で制し話を続けている。

「うん、そう…。なんか愛に話があるみたい…。春山さんっていう人…」

あゝあ…名前、言っちゃったよ…。

俺は、この先どういう展開が待っているのか、興味と恐怖が入り混じった複雑な

心境だった。

電話の向こうから、かすかに愛の声が漏れている。「代わって…」と聞こえた

ような気がしたが、それは気のせいではなかった。

「春山さん、愛が代わってって…」伊集院が電話を俺に差し出した。きた。

俺は、もうどうにでもなれ！とばかりに携帯を受け取り耳にあてた。

「もしもし？」

心なしか、俺の声は上ずっていた。

「どづいづいと？」

伊集院 愛（旧姓、柏原愛）が電話口の向こうで言った。

「なんで、アキラがうちの旦那と一緒にいるの！？」

愛の動揺が電話からも伝わってきた。

それは俺が聞きたいです…。

「あ、はい…ちょっと愛…あ、いや柏原さんにお話しがあって…

それで、施設に行こうと思ったら…たまたまご主人に駅でお会いして…

それで…」

俺は、しどろもどろだった。伊集院に怪しまれていないだろうか？

とりあえず、俺はご主人の手前、タメ口わマズイだろうと判断し

敬語で話をした。

そんな俺の心遣いなどまったく気にする様子も無く、愛はタメ口で

話を

続けている。

「え！？どういうこと！？なんでアキラが施設に来んのよ！私に話
って何！？」

と大声を出している。俺は、愛の声が携帯から漏れないようにと思
いっきり

電話を左耳に押し当てた。

『話って何！？』と聞かれても、こんな状況で電話で話すなんて出
来る訳がない。

「あ、いや…たいした話じゃないんだけど…」

んな訳ないだろ。めっちゃめっちゃ大変な話だったが、こう言うしかな
かった。

そんな困った俺を見兼ねたのか伊集院が俺の目の前に左手を差し出
してきた。

携帯電話をよこせという意味のようだ。

俺は、なにやら話を続けていた愛に「ご主人に代わります！」と警
告してから

伊集院に携帯を返した。

伊集院は電話を耳にあて「じゃ、今から帰るね！」と短く一言だけ告げると

電話を切った。

「さ、行きましょう！」

伊集院は車を発進させた。そんなイケメンの彼の横顔は心なしか楽しげに見えた。

* * * * *

伊集院宅は、マンションの5階だった。

高級マンションという感じではないが、かと言って古臭い感じもしない。

清潔でお洒落なマンションだった。

何階建てなのか正確には分からないが、伊集院が押したエレベーターのボタンは

中央付近だったので10階建てくらいだろうか？

伊集院は、部屋の前に着くとインターホンを押してから、すぐに自分の持っている

鍵でドアを開けた。

これが伊集院家のしきたりなのだろう…あのインターホンは帰ったことを知らせる

ためのようだ。

そしてついに、玄関ドアが開き、緊張の瞬間がやってきた。

「どうぞ〜」伊集院は、にこやかに微笑んで俺を中に招いた。

俺が伊集院に続いて玄関に入ると「おかえり」と聞き覚えのある声に出迎えられた。

「突然すいません！」

俺は、愛の顔をまともに見れず、深々と頭を下げてごまかした。

「いらつしゃい！」そう言った愛の声は意外なほど明るく、てつきり嫌みのひとつ

でも言われることを覚悟していた俺は拍子抜けした。

俺が恐る恐る顔を上げると、愛は「お久しぶり」と含み笑いをしてきたが、俺は

必死で冷静さを保ちながら「ご無沙汰してます」と他人行儀な挨拶をした。

まさか、こんな展開になるなんて…

俺は、生きた心地がしなかった。

リビングに通された俺は、借りてきた猫状態だった。

まずは、出されたコーヒーをひとくち啜った。

そして、部屋の中に一通り目をやる。

「いい、部屋ですね…」とりあえず、当たり障りのないことを言うてみた。

「あんまり見ないでね。散らかってるんだから…」

愛は、伊集院のコーヒーをテーブルに置きながら言った。

そして、彼の隣に並んで座ると、テーブルを挟んで俺と向き合った。

ここで初めて、約2年ぶりに元カノの顔を見た。

髪が少し伸びた様だが、2年の歳月はまったく感じられなかった。

「で、春山さん。愛に話というのは…?」

そう言うと、伊集院がコーヒーカップを口元に運んだ。

「あ、ええ…実は……。俺は迷った。」

確かに俺は愛に話があった。

しかし、本当は愛と二人きりで話をしたかった。

『したかった』と言うよりも話を『聞きたかった』

愛の旦那を目の前に、話を切り出すことを俺は躊躇^{ためら}った。

言葉に詰まった俺を見て、愛と伊集院が顔を見合わせた。

と同時に、俺も伊集院の顔を見た。

愛と俺の視線が伊集院の整った顔に向けられた。

それに気付いた伊集院は

「ああ〜！もしかして!？」

そう叫ぶと俺と愛の顔を交互に見た。

「もしかして!？俺…お邪魔!？俺…空気読めてなかった!？」

なかなか感がいい男だ。

だが、その通りだ。とも言えず「いえいえ…そんなことは…」と首を振った。

「ただ…」俺は重い口を開いた。

「ただ…？」愛がなにかに期待するような顔で相槌をうつた。

「うん、ただ…話、長くなりそうだから…」

本心だった。俺はここに来る途中、愛との会話に伊集院が加わることは

覚悟していた。だから、彼がこの席にいることは構わなかった。

しかし、愛に俺の話をどこからどう説明すれば良いのか…簡潔に話せる

自信がなかった。

こんな夕食時の時間に突然お邪魔したうえに、俺のプライベートな話を

何時間も聞かせるのは申し訳ないと思った。

そんな、言葉を詰まらせている俺に伊集院が聞いてきた、

「あの、春山さん…もし良ければメシ食っていきませんか？」

「は？」俺は、呆気にとられた。

伊集院は、困惑した俺の表情を楽しんでいるかのように微笑んでいる。

その笑顔が社交辞令で食事に誘っているのではない、と語っていた。

隣に視線を移すと、愛と目が合った。

愛も伊集院と同じ笑顔を見せながら「そうしなよ!」と同意した。

こうして、伊集院宅での不思議な夕食が始まり、その夕食はいつしか宴会へと発展していった。

第13章 『真実』

「ほら愛！アキラ君のビール、空だよ。」

「あ、失礼しました！アキラくん。はい、どーぞ！」

「あ、サンキュ…竜一くんも飲んでないじゃん！」

「え〜！？めっちゃ飲んでるって！あ、愛も梅酒もつとやれば？」

「うん、飲んじゃおっかな〜！」

「うおし！じゃあ乾杯だあ！！！」

『かんぱーーーーーい！！』

打ち解けるにはそれほど時間はかからなかった。

本来、人付き合いが苦手な俺だが、初対面の男性と酒を飲んで

盛り上がるなんて有り得ないことだ。伊集院が愛の旦那という

こともあるが、それよりも伊集院竜一という男の懐の深さが、そう

させたのかもしれない。

何度目かの乾杯を済ませた時、俺の携帯からトトロが流れた。

「ギャハハハ！トトロだよ！トトロ〜！」

俺は、大ウケした二人の横を通りリビングを出た。

電話は母ちゃんからだった。

そういえば、今はいつたい何時なんだろうか？

母ちゃんに、遅くなると連絡するのをすっかり忘れていた。

「もしもし？」

「あ、アキラかい！？」

「ああ、ごめん！母ちゃん、連絡するの忘れてた！」

「あんた…どこにいるの？ 随分まわりが騒がしいみたいだけど…」

「うん、ちょっと友達と…偶然会っちゃってさ…」

「あ、そうなの？ じゃあ夕飯はいいね？」

「あ、うん。ごめん、いま飲んでるから…」

「わかった。じゃあ、久しぶりなんだから楽しんできなさい」

そう言うと母ちゃんは電話を切った。

俺は電話を終え、リビングへ戻った。

「あ、おかえり〜!」

今度は新しいワインが登場してきた。伊集院が一生懸命コルク栓と格闘

している。

「アキラくん、電話だれ〜? もしかして…コレ〜?」

コルク栓との勝負を諦めた伊集院が真っ赤な顔で俺に小指を立てて聞いた。

ワインは愛に手渡され、慣れた手つきで『スポン!』とコルクを抜いた。

「いやいや…そんなんじゃないっすよ! おふくろですよ」

俺が苦笑いして答えると、グラスにワインを注いでいた愛が手を止めた。

「え? おふくろ…って…お母ちゃん?」

さっきまで陽気に騒いでいた愛の顔が一瞬、真顔になった。

「あ…うん。」

俺はその愛の表情で気付いた。

そうか…愛は知っていたのだ。

俺が、何年もの間…母ちゃんに連絡していなかった事を…。

そして、俺が施設で育ったということ。

だが、俺が会社を辞め、あけぼの園に戻ったことまでは、さすがに知る由も

ないはずだ。

「ん？」

愛の様子を見て、伊集院が身を乗り出してきた。

「あ…ああ…」俺は、言葉に詰まった。

恐らく今の一瞬で伊集院は、愛と俺の間に自分が知らない事情があることを

悟ったはずだ。

どうやって話を切り出そうかと、俺が考えあぐねていると愛が声をあげた。

「あ、そういえば！ 竜一に話したっけ？」

「え？なにを？」伊集院はワインボトルを取ってグラスに注ぎながら聞いた。

「あのね…この春山さんって…」

ああ！！ここで言っちゃいますかあ！？

だが、さすがの愛も、この先の言葉を一瞬ためらった。

「元カレだろ？」

伊集院があっさり答えた。

「え？」愛が驚いて顔をあげた。俺も同時に伊集院を見た。

伊集院は真顔だったが、すぐに元の笑顔に戻りワインをぐびっとひとくち飲んだ。

そして

「見てればわかるって！」と言うと、アハハと笑った。

俺は、その笑い声に救われた思いだった。

恐らく、愛も同じ気持ちだったと思う。安堵の表情で一緒に笑っていた。

「なんだあ！バレてた〜？」

俺が、おどけて言うと

「まあね〜！これでも俺…人を見る目はあるからね〜」と自信ありげに

伊集院が言った。

確かにその言葉に嘘は無いように感じた。

この男が、ただ者ではないという雰囲気は、最初に会った時から感じていた。

しかし、何故この男が介護施設で送迎バスの運転手などしているのか？

それが分からなかった。

だが、俺がその質問を口にするよりも先に、聞いてきたのは伊集院の方だった。

「ところでさ〜、元カレのアキラ君は、元カノの愛にどんな話があった訳？」

この質問は、伊集院の嫌みでは無かった。

俺が愛に本題を切り出すためのきっかけを、わざと作ってくれたよ
うな気がした。

「あ、そうだよね…。そのために来たんだよね…。」

おかげで、これで気兼ねなく話ができそうだ。

酒の力も借りて、俺は話を始める決意をした。

* * * *

「え〜っと…まずは、伊集院さん。」

「竜一でいいよ。」

「あ、そうっすか…。じゃあ、竜一…くん。」

「はい。」

「俺は、今日…愛…あ、いや奥さんに話があってあの施設を訪れたんだ。」

「うんうん、そうみたいだね」

「で、その話なんだが…本題に入る前に、まず、俺と愛のことを説明

させてくれ。」

俺は、竜一に妙な疑いをかけられなくなかったので、このことだけはきちんと

説明しておきたかった。それは、愛とて同じらしく、愛も」そうだね」と

あいごち
相槌をうった。

「うん。じゃあ、よろしく」竜一は、小さく頷いた。

「うん。実は…俺と愛は、竜一もご察しの通り昔付き合っていたんだ。

こんなこと旦那さんにカミングアウトするようなことじゃないんだろうけど、

もちろん別れた後は、お互いに一切連絡もしてないし、本当に何も無いから

それだけ変な誤解はしないで欲しい。」

俺は一応、念を押した。

「うんうん。それは分かってる。」竜一が言った。

「ありがとう。それで、俺と愛が付き合うことになったきっかけと言っのが…

そつだな…あれは、まだ愛が大学病院で働いている時だったよな。」

俺は愛の顔をチラッと見た。

愛は「うん。そつ…」と同意した。

「愛は、あの頃…大学病院で看護師をしてたんだ。あ、竜一もそれは知ってるか？」

で、俺は仕事で、よくその病院に出入りしてたんだ。え、俺の仕事？俺は、あの頃

営業マンをしてて医療機器を取り扱ってた関係で、いろんな病院に出入りしてたんだ。

それで、看護師の柏原…あ、いや…愛と出会った。

最初は、いわゆる合コンってやつ？俺は、もともと人付き合いとかスツゲー苦手だから

…え？見えない？あはは、本当だよ。な！愛？そう、それで、合コンなんて本当は

気乗りしなかったんだけど、同僚の奴が…あ、夏樹っていうんだけど、そいつが

『お前、毎日病院に出入りしてるんだから、ナースと合コンでもセツティングしろよ！』

と、しつこく言うので、仕方なしに愛に声をかけたんだ。

そしたら、意外にも二つ返事でOKもらって、一度だけ飲みに行っただよ。

そこで、俺は緊張して…というか、ほとんど覚えてないんだけど、

たぶん飲み過ぎたん

だろうな。恥ずかしい話、ぶっ倒れたんだ。でも、そこはナース達との合コンだから

応急手当は迅速かつ冷静だった。俺は、たまたま隣に座ってた愛に介抱されたん

だけど、あとで聞いたらその時、俺…すげー失態を働いたらしくて…。

あ、愛…そこんとこ詳しい説明はいいから。

それで、数日後、また病院で顔を合わせた時に平謝りしたんだ。そしたら、愛は

『じゃあ、あの時のお詫びに食事ごちそうしてください！』とかいうもんだから

仕方なしに、とっておきの店に連れて行ってやったんだよ。」

俺が、こう説明をすると我慢しきれなかったのか、愛が口を挟んできた。

「そう！そのとっておきの店ってのがさ〜！」愛は口を尖らせて竜一に言った。

「え？なにになに？」竜一も興味津津のようだった。

「定食屋だよ〜！信じられる〜！？」

ガハハハ！と竜一は大声で笑った。それにすられ思わず俺と愛も大笑いした。

「だって！しょうがないじゃん！女と食事なんてしたことなかったんだもん！」

俺は真顔になり、ふくれて見せた。

「でも、あの定食屋…美味かったべ？」

俺が言うと、「そうそう！それが美味しいのよ！」と愛もそこは同調した。

「で、愛が言うには…俺の、そんな飾らないところが良かったらしく…」

成り行きで付き合うようになった。…と言うわけ。「と、俺は愛に

「こんな感じでどうでしょう？」とお伺いをたてた。

愛は「『成り行きで』ってのが気に入らないけど、まあ、だいたいそんな

感じかな…」と概ね了解してくれた。

そして、ここから先は、俺が催促した訳でもなく愛の方から話をはじめた。

「でも、付き合い初めて1年くらい…かな？ アキラの仕事がすっ

ごい忙しく

なってきたのと、ほら、私のお母さん…が倒れたりして、なかなか
会えなく

なってきたて…それで、自然消滅？ みたいな感じになっちゃったの
よね…。」

「うんうん」俺もそれを聞いて何度か頷いた。

それまで、黙って耳を傾けていた竜一は、グラスにワインを足しゆ
つくりと

口を開いた。

「へえ…そうだったんだ…。で？アキラくんは、愛が『ほのぼの
館』で

働いてるのを何で知ってたの？ 愛があ施設の施設に行ったのって、確
か…。」

竜一は愛の顔を覗き込んだ。

「ちょうど1年前」愛がきっぱりと言った。その部分に関しては、
愛も

不思議なようだった。

「うん、実は…ほのぼの館の親会社って…うちの会社なんだよ。」

俺が言つと「え〜!? アキラ、ハートランドに転職したの!？」
と愛は驚いた。

「あ、違う違う!俺の会社は『丸川商事』ハートランドは丸川商事の子会社

なんだよ。…で、うちの会社の営業マンで福祉施設担当の奴がいる
んだけど、

ほのぼの館に柏原愛って看護師が入って来たけど、あの子…春山の
元カノじゃ

ね〜の? って聞かれたことがあったんだ…あ、ほら!あの時の合
コンに来てた

桜庭って奴!覚えてない?」

「うん。覚えてない!」愛は気持ちよくきっぱり言い切った。

そして「でも、知らなかったな…」と目を丸くして言った。

「ははは…世間って狭いもんだよな…」俺は、テーブルの上のチー
ズをひとかけら

口に放り込んだ。

「本当だね〜」と、愛は竜一と目を合わせて頷いていた。

「ま、俺としては、風の噂ぐらいにしか考えてなかったから、ホン
トにほのぼの館

に愛がいるかどうかなんて、今日、駅で竜一君に会うまでは半信半疑だったよ。」

俺は右のこめかみの辺りを掻いた。

「じゃあ、なんているかどうかも分からない私をわざわざ訪ねて来たの？」

愛はワイングラスを小さくくるくる回しながら聞いてきた。

ごもつともな質問だった。

「もしかして、”より”を戻したかったとか!？」愛が笑いながら言った。

もちろん冗談で…だ。

俺は一瞬たじろいで竜一の顔を見たが、彼は相変わらずの笑顔で俺と愛の

やり取りを楽しそうに眺めている。

「ま、まさか!」

俺は、冗談だと分かっていたが、旦那の手前わざとらしく否定しておいた。

「ははは…だよ。てか、あたし人妻だし!」

そついつと、愛はペロツと舌を出して竜一に微笑んだ。

「そつだよ！ てか、ビックリしたよ。」俺は、目を丸くした。

「え？何に？ あたしが結婚してたこと？」「愛はにやけながら言った。

「うん。それもそつだけど、愛が本当にほのぼの館にいてさ…」

「え、そつ？」

「うん、だって…愛、病院の仕事、好きだったじゃん。まさか転職する

とは思わなかったよ。まあ、今も同じ看護師の仕事なんだろうけど…」

俺は、本心からそつ思っていた。

愛は、看護師という仕事が天職だ！と昔よく言っていた。

大学病院での仕事も、周りのスタッフはいい人ばかりで、もし許される

ならば一生ここで働きたい。と言っていたからだ。

俺が、このことを口にした途端、ほんの少しだけ愛の表情が曇った
ような

気がした。

そんな愛の表情を写したように竜一の顔からも笑顔が消えていた。

「もしかして…何かあったのか？」

俺は、聞かずにはいらなかった。

リビングの空気が一瞬重たくなったような気がした。

そして、口を開いたのは、今まで無言で話を聞いていた竜一だった。

「愛…アキラくんになら話してもいいんじゃないか？」

俺は、その竜一の言葉で一瞬にして酔いが覚めた。

愛にいったい何があったのだ！？

第14章 『理由』

「うん、そうだね……」

竜一に促つなされて、愛は小さく頷いた。

「実はね、アキラ……あたしがアキラと別れる少し前、あたしのお母さんが

倒れたでしょ？」

愛が言った。

「ああ、確か……脳梗塞だったよな……」

「うん、そう……。幸い一命は取り留めたけど、お母さんはあの時の後遺症で

左半身に麻痺が残ったの……。あ、それはアキラも知ってるよね。

よくお見舞いに来てくれたもの。

それでね……あの時って、あたし大学病院で看護師してたじゃない？

アキラの言うとおりに、あたし……あの病院が大好きでさあ、大袈裟じゃなくて

本気で一生あそこで働いてもいいって思ってたわ。

それで、私はその大学病院にお母さんを転院させたの。うん、そう…。リハビリ

目的だね。あの病院の理学療法士って結構評判いいのよ。

で、2ヶ月くらいかな…リハビリのおかげでお母さんもだいぶ動けるようになって

ようやく退院できたの。

あ、もうその頃は、アキラとはほとんど連絡取ってなかったよね…。

それでね、退院したのはいいんだけど、ほら、うちって母一人、娘一人じゃない。

お母さんも完全には麻痺が取れてないから、私も家に一人で置いとくのが心配

だったのよ…。」

愛がここまでの話をする間、俺は「うんうん」と頷きながら、愛の表情が

少しずつ暗くなっていくのを感じていた。

そして、一息つくくと愛は話を再開した。

「それでね…。あたしはお母さんのことを施設に入れることにしたの。

お母さんも、そうしたいって言ってたしね。あ、あの時ってお母さん…まだ

65歳になってなかったけど、要介護認定は受けられたのね。」

俺はここで思わず口を挟んだ。

「ああ、65歳になってなくても脳血管疾患だから、認定は受けられるよな」

「う、うん…。アキラ、ずいぶん詳しいね。どうしたの？」

「あ、いや…。別に…あ、で？」

「あ、うん。それでね…お母さんは、施設に入所することになったのよ。」

「そうかあ…。まあ、でもその方が何かと安心だよな。24時間介護だろ？」

「うん…その、はず…だったんだけど…ね……」

明らかに愛の様子がおかしかった。大きな瞳が潤んでいた。

「うん？ 『だった』…って？」俺は、聞いてはいけないことを聞いてしまった

のだろうか？ 次の瞬間、愛の大きな瞳から一筋の涙がこぼれた。

そして、そんな愛に代わり竜一がゆっくりと口を開いた。

「アキラくん…愛のお母さんは、施設に入所後しばらくして亡くなつたんだ…」

俺は、言葉を失った。

愛のお母さんが亡くなった。

俺は、そう遠くない過去の記憶を呼び起こした。

愛の母親は、とても気丈な女性で、愛が幼いころ父親を亡くしてから女手ひとつで愛を育てあげた。俺も詳しく知っている訳ではないが、とても

強くて優しい女性だった。

その女性（お母さん）が…亡くなった…。

俺の目から自然と涙がこぼれた。

「……………そうなんだ…。それは…なんて言ったらいいか…愛。」

大変だったな…ごめんな。俺、なんにも知らなくて…。」

「ううん…。あたしこそ、こんな暗い話を聞かせちゃってごめんね。」

愛は、涙をぬぐって無理やり笑顔を作ってみせた。

「あ、いや…そうだったんだあ…ねえ、もしかして…」

お母さん亡くなったのって…やっぱり脳梗塞の再発…とか？」

俺が聞くと、愛と竜一がほぼ同時に口を開いたが、言葉を発したのは愛だった。

「ううん、違うの…。」

実はね、お母さんは…その施設で…殺されたの…。」

俺は、一瞬何を言われたのか分からなかった。

その言葉を理解するのに、かなりの時間を費やした。

そして、ようやく愛の母親が『殺された』と聞かされたことに気が付き、改めて

驚いた。

「…え？ 殺され…た？」これを聞くのが精一杯だった。

「うん。そうなの…。殺されたの…。」

愛が、宙を睨んだ。

その時、俺の中に嫌な考えが浮かんだ。俺は、『まさか』と思いな
がらも

その考えを確認せずにはいられなかった。

「なあ、愛…もしかして、その施設って…。」

俺の質問に、愛はゆっくりと、そしてしっかりと答えた。

「うん。そう。『ほのぼの館』あたしと竜一が働いている施設…。」

「え！？」俺は、再び言葉を失った。

しかし…どうしても、もうひとつだけ確認しておくことがあった。

「愛…もうひとつ教えてくれ。愛が病院辞めたのって…。」

俺が皆まで言わずとも、愛はその答えを語ってくれた。

「うん、お母さんが死んでからだよ……。」

それが、どのような意味なのか…

その言葉の意味を教えてくれたのは、伊集院 竜一だった。

「アキラくん……。実は…

愛は、母親の死の真相を探るために

あの施設で働いているんだ。」

「……え？　じゃあ、もしかして…竜一も…」

「ああ、そうだ。」

俺も、愛の母親の死の真相を知りたい。

それで、あの施設に潜り込んだんだ…。

愛の夫になりすましてな…。」

俺は、頭を思いっきり鈍器で殴られた様な錯覚に陥った。

それが、竜一の言葉を聞いたからなのか

それともワインのせいなのか…

よく分からなかったが、気付いたとき

俺は見知らぬベッドの中にいた。

第15章 『同志』

目を覚ますと、また『見知らぬ天井』が目に入ってきた。

しばらくの間、俺は仰向けで横になったまま動けずにいた。

薄暗い部屋の中、見知らぬ天井を見つめながら俺は考えた。

ここはどこだ？

その答えはすぐに出た。

そうだ。俺は、愛のマンションにいたのだ。

そして、愛の旦那だという伊集院竜一と3人で酒を飲み、

そして…

そこから先の記憶が……はっきりとしなかった。

頭の中に白い霧がかかっているようだった。

どうやら、俺は飲み慣れない酒を飲み過ぎたようだ…。

酔い潰れて知らぬ間に寝てしまった。

寝ている間に俺は、酷い悪夢を見ていた。

そうだ、あれは夢だったんだ……。悪い夢を見ていたに違いない。

俺はベッドから這い出して、立ち上がった。

猛烈な吐き気と頭痛が俺を襲った。

フラフラになりながら、壁伝いに部屋を出た。

左に目をやると短い廊下の突き当たりのガラス戸から蛍光灯の明かりが

もれていた。

俺は、このままトイレに駆け込みたい衝動を抑え、リビングに通じる

ドアを開けた。

「あ、起きた〜？」 言ったのは、竜一だった。

俺は、どれくらいの時間寝ていたのだろうか？

さっきまで酒とつまみで賑わっていたテーブルが、すっかり綺麗に

片付けられて、ノートパソコンが1台置かれていた。

竜一は、そのパソコンに向かって座っている。

愛の姿は、リビングには……なかった。

「ごめん……調子に乗って飲み過ぎた……」口を開くと同時に吐き気がこみあげてきた。

「ははは……愛が言ってたよ。アキラは昔から酒が弱いんだって……」
ち！余計なことを……あの頃に比べりゃ、ちつとは強くなっていると
思っ

いたが、世間ではまだまだ俺は下戸の部類なのだろう。

「あ、うん……そうなんだよ……」

俺は、否定できなかった。必死に苦笑いをして頭を掻いた。

「ところで、……愛は？」

俺が、竜一の対面に腰を下ろすと同時に竜一は立ち上がり
冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを持ってきた。

「はい、どうぞ。」

「あ、サンキュ」俺は、一気に3分の1を胃袋に流し込み酒の濃度を薄くした。

「愛は……寝たよ。明日、早番なんだって……。」竜一は、コーヒーを飲んでいた。

「そっか…。」時計を見ると11時になるうとしている。

「あーやっべ！こんな時間かよ！？ ごめん！こんな遅くまで！」

俺は慌てて立ち上がろうとしたが、急に動いたせいで目が回りよるけて

テーブルに手をついた。

「はははは…うちは全然大丈夫だから泊まっていきなよ。」

竜一は、笑顔で言った。

「あ…うん。じゃあ、そうさせて貰うわ…」

俺は、竜一の言葉に素直に甘えることにした。

「あ、コーヒー良ければ淹れるけど…？」

竜一が、立ち上がろうとしたのを俺は両手で制した。

「あーいい、いい！今コーヒー飲んだら吐きそうだわ…」

本当だった。実は、竜一の飲んでいるコーヒーの香りだけでも

ヤバかったのだ。

「あ、そう?」そう言うと竜一は、腰を戻してカップを口元に運んだ。

「もしかして……仕事?」

俺は、パソコンに向かってる竜一に声をかけた。

「あ、これ? 違う違う……。」竜一は、口元を緩めて言った。

「そっか……」俺は、邪魔をしないと思ったが、この状況で何をどうすれば良いのか分からず、とりあえずペットボトルの

水を飲んでから、再び竜一に声をかけた。

「なあ、もし……良かったら、聞かせてくれないか?」

竜一は、パソコン画面から俺の顔に視線を移した。

そして、俺の質問の答えの代わりにノートパソコンを180度回転させて俺の方に画面を向けた。

「これ、見てくれ……」

俺は、目を丸くして竜一の顔を見た。竜一の顔からは笑顔が消え真剣な眼差しになっていた。

俺は、竜一が差し出したパソコンの画面に視線を落とした。

そこには、何やらエクセル表らしきものが写し出されている。

「ん？」俺は、画面を覗き込んだ。

そして、そのエクセルシートに書かれた内容を見て、俺は思わず

両手を口にあてた。

「こーこれって……!？」

俺は、両手は下ろしたが口はあんぐりと開いたままだった。

そんな俺の顔を見て、竜一は再びノートパソコンを180度回転させ

自分の方に画面を向けながらこう言った。

「これが、あの施設の実態だよ…。」

俺は、再び猛烈な酔いに襲われたのかと思う程の眩暈を覚えた。

なんとか冷静さを保ちながら、俺はパソコン越しに竜一の顔を見据えた。

竜一は、画面に目を落としたまま何も言わなかった。

竜一が、何故この画面を俺に見せたのか…たまたま、悪いタイミングで

俺が起き出した訳ではなさそうだ。

おそらく竜一は、この画面を俺に見せるために待っていたのだろう。

そして、俺は、ペットボトルに残った水を飲み干してから、

竜一にこう告げた。

「竜一、実は…俺の目的も”それ”なんだ…。」

竜一は、静かに顔をあげて俺を見た。

第16章 『後悔』

私は、叔母の葬儀が終わってからずっと、主を失った我が家に帰っていた。

あの日以来、私は、ほとんど外出もしなければ誰とも口をきいていなかった。

叔母が急逝したという知らせは、予想外の展開をもたらした。

いや…私は、いつかこうなることを心のどこかで覚悟していたのかもしれない。

叔母の葬儀には、こんなに居たのか？と思うほど全国各地から親戚と名乗る

人達が集まってきた。

アヤちゃん、大変だったわねえ…

アヤちゃん、これから困ったことがあつたら何でも言ってね。

…と、名前も知らないおじさんやおばさん達が、私に声をかけてくれた。

みんな、一人ぼっちになった私にとっても親切だった。

しかし、その親切の理由が私には分かっていた。

叔母の父…つまり私の祖父は、大企業の創業者だった。

男児に恵まれず、跡取りが居なかった祖父は次女に婿養子をとらせ、血の繋がりが

ない息子を後継者にするはずだった。

私の叔父…つまり私の『育ての父』のことだ。

しかし、その父は祖父よりも先に亡くなることとなった。

たとえ血の繋がりが無いにしろ、娘婿を後継者にできることになり喜んでいた

祖父は、ショックからか…その後間もなく亡くなった。

一代で大企業を築き上げた祖父の死は、テレビニュースで報道されたほどだった。

そんな祖父が残した莫大な遺産は、『遺言』により叔母がそのほとんどを相続した。

そして、その叔母…私の育ての母もついに亡くなってしまった。

当然、祖父から受け継いだ遺産は、一人娘の私に相続されることになる…。

顔も名前も知らない親戚たちが、私に親切を押し売りするのは、そんな冬月家の

遺産が目当てだという事は、私の様な小娘にもすぐに分かった。

金でも株でも不動産でも、欲しければ好きなだけ持って行ってくれ。

私は、内心そう思っていた。

しかし、祖父と父が残した会社や、その弁護士など…いろいろな力がそれを

許さなかった。

そして、気付けば…私は、この若さで何十億円という資産を手に入っていた。

叔母が亡くなり、毎日のように我が家には人が出入りしていた。

ほとんどは会社関係の人間…中には、弁護士、政治家…様々な人種が私を

訪ねてきた。

私が相続した莫大な資産について、忠告、警告、恐喝、様々な欲望と陰謀を

秘めた連中に私は毎日振り回された。

私には、何がなんだか分からなかった。

私はすべてを弁護士に委ねた…。

私を幼少の頃から知っている、信頼の出来る弁護士だった。

彼がいなければ、たぶん私はノイローゼになっていたかもしれない。

とにかく、彼のおかげで何とか私は大人の判断を誤らずに済んだ。

叔母が亡くなったあの日　。

私は、深夜の病院でいつまでもいつまでも泣き叫んだ。

声と涙が枯れ果てるまで泣き続けていた。

私が叔母のために、あれほど悲しめるとは正直自分でも驚いた。

私は、二度と動かない叔母の亡骸なきがらに抱き付き叫んでいた。

「ママ！ママ！ママ！ママ！ママ！ママ！……」

そして、通夜、葬儀、相続…と目まぐるしい日々が続き、私は叔母の

死を悲しむ暇も与えられなかった。

* * * * *

あれから4ヶ月。

ようやく、私の元に時間ときの流れが戻ってきた。

これまでの私は、ただ見えない力に押し流されて生きてきた様に思う。

すべてにケリが付き、私にはようやく落ち着いて物事を考える時間が与えられた。

私は、今まで出来なかった家の中の整理をやつとはじめることが出来た。

リビングに置かれたアンティークのサイドボードの引き出しからは、大量の

薬が出てきた。ニトログリセリン……。

昔から心臓が弱かった叔母が常に手離さなかった薬だ。

そして、私は、叔父が亡くなってから手付かずだった書斎に入った。

私がこの書斎に入るのは、恐らく初めてだ。

壁一面、床から天井まで収められた本の数の多さに私は驚いた。

叔父は、これだけの本を全部読んだのだろうか？

私は、叔父…育ての父との思い出がほとんどなかった。

話をした記憶もなかった。

そんな父が、何を考え私のことをどう思っていたのか…未だに分からない。

それは、叔母に対しても同じだった。

約20年…この家で、あの叔母と…あの叔父に…育てられたというのに

私は育ての両親のことを何も知らなかった。

叔父は、毎日この部屋で…この大量の本を読んでいたのだろうか？

片付けをしようと思った書斎だったが、私には本一冊動かすことが

出来なかった。

動かしてはいけない気がした。

この部屋にも大きなアンティークの机が置いてある。

叔父が使っていた机だ。

私は、その机の引き出しに手をかけた。

カギがかかっていた。

自宅の、しかも自分の書斎でカギをかけるなんて…：どれだけ大切なものが

この引き出しの中に仕舞われているのか…：私には想像もつかなかったが

それほどまでに大切に仕舞った物ならば、見るのも失礼だろう…：と
思い

私は書斎を出た。

次の日、私はリビングに掃除機をかけた。

それほど汚れてはいなかったが、天気も良かったので窓を開け空気を入れ換えをするついでだった。

綺麗に見えて、フローリングには意外と埃が溜まっていた。

私は、リビングの中央に2つある革張りの大きなソファの一つを

やっとの思いで動かして、その下に溜まっている綿埃を掃除機のスルで

一気に吸い込んだ。

そして、もう片方のソファーも動かそうとした時だった。

『ゴトン』

と、ソファーの下で何かが床にぶつかる音がした。

ん？ と、私はソファーの下を覗き込んだ。

そこには、一冊の分厚い本が置いてあった。

『置いてあった』というよりは『落ちていた』と言った方が正しいのかもしれない。

明らかに、その本はソファーの裏に隠してあったものが、動かした拍子に

床に落ちたものだ。

私は、手を伸ばしその本を拾い上げた。

茶色いベルベット調のカバーがかかったその本は、ゴムのベルトが巻き付けられて

いた。

私は、胸の鼓動が激しくなっていくのを感じていた。

革張りのソファーに浅く腰を下ろして、その本をよく観察した。

その高級なカバーと巻き付けられたベルトからも、その本が持ち主にとってとても

大切な本であるということはすぐに読みとれた。

しかし、その大切な本が何故こんなソファーの下に隠されていたのか…

いや、大切だからこそ、ここに隠してあったのかもしれない。

私は、しばらく葛藤した末に黒いベルトを外して、慎重に表紙をめくった。

その本の正体は…… 叔母の日記だった。

* * * * *

4月×日

アヤが今日、小学校に入学した。
正直、私がアヤのランドセル姿を見れるなんて…夢にも思っていなかった。

小さな体に大きなランドセルがとても重そうだった。

黄色い帽子も良く似合っていた。

この子が小学校を卒業する時…私の心臓は動いているのだろうか？
それを思うと、せっかくの入学式だと言うのに

アヤを抱きしめる事ができない自分を情けなく思う。

アヤ…入学おめでとう

* * * * *

私は、自分の目を疑った…。

「そんな馬鹿な…」

そう呟いて、ページをめくった。

* * * * *

8月×日

アヤの友達が夏休みに家族で旅行に行くらしい。

アヤは何も言わないが、あの子も本当は行きたいのだろうか？

あの子は何も言わない…。言えなくしたのは私だ。

今年の夏休みこそは、アヤに楽しい思い出を作っ
てあげたい。しかし、私には…アヤを旅行どころか、遊
びに連れて行ってやることも出来ない。出来るの
かもしれないが、この心臓が…それを考えると
私は、ついアヤに冷たくしてしまう。許して…
アヤ…ごめんなさい。本当にごめんなさい。

* * * * *

私は、夢中ですべてのページに目を通した。

この日記は、毎日記されていた訳ではなかつた。

私に何かがあることに書かれているようだった。

* * * * *

10月×日

今日、アヤが18回目の誕生日を迎えた。

今年もアヤの誕生日を迎えられたことに感謝している。

最近、発作が多くなってきた。

せめて、あと2回…アヤが二十歳になるまでは…

私の心臓よ…耐えてください。

アヤ…誕生日おめでとう。

* * * * *

私は、ゆっくりと一枚一枚ページをめくって叔母の日記を読んだ。
知らぬ間に涙が溢れていた。

日記の上に大粒の涙が幾つもいくつも零れ落ちた。

そして、日記は残すところ最後の数ページになった

* * * * *

1月×日

ついに、アヤが成人式を迎えることになった。

アヤの晴れ着姿をこの目で見られるなんて夢のようだ。

黄色い帽子に大きなランドセルを背負って入学した日が昨日のこと
の様に思い出

される。

アヤは今年、短大を卒業する…春には、いよいよ社会人だ。

私の役目はようやく終わる…。

まさか、この日を迎えられるなんて本当に思っていなかった。こんなことならば、もっと素直にアヤを愛すればよかった…。あんな『決意』をしなければ良かったと後悔している。最近、発作の回数がさらに多くなっている…。自分でも、よくここまで頑張ったと思う。アヤが小学校を卒業するまでは、何とか…と思っていたのにまさか、成人式まで迎えることが出来ようとは。

大好きな、お姉ちゃん。

あなたが産んだ娘は今日、成人式を迎えました。あなたに似てとても美しい娘に成長しました。

私は、あの時の決意を今でも守り通しています。でも、毎日のように葛藤しています。

これで良かったのでしょうか？

…いいはずはありませんよね。

私には、やはり親になる資格はなかったのです。

お姉ちゃん、なんで死んでしまったの？

あんなに可愛い娘を置いて…。

お姉ちゃん、私はあなたには謝りません。

あなたは、私に世界一大切な宝を授けてくれました。

でも、その宝は私には尊過ぎました。

私は、あの子を愛する余り、愛してやることができませんでした。

お姉ちゃん、私が言っている意味が分かりますか？

きつと分かりませんよね…。

私はあの時、決意したのです。

アヤを愛することはやめよう…と。

アヤにも、私を愛さないようにさせなくては…と。

大好きなお姉ちゃん。

アヤは、あなたの娘です。

最近、ますますあなたに似てきました。

私は、アヤの顔を見るたびに胸が締め付けれます。

涙がこみ上げてきます。何も考えず抱きしめることが出来たら
どんなに楽でしょう？

あの子を愛せば愛すほど、辛いのです。苦しいのです。

お姉ちゃん…

でも、その私の苦しみも、もうすぐ終わります。

アヤは、無事に成人することが出来ました。

あの子なら、一人でもきつと強く生きてくれると信じています。
きつと幸せになってくれると信じています。

私の心臓の灯は、もうそろそろ消えることでしょうか…。

あと、もう少しです。

私が、アヤを愛せるのも、愛せないのも…もう少しです。

*

*

*

*

*

私は、この日の日記を読み冷静でいることは無理だった。

一人、部屋の中を歩きまわり、うろたえた。

大きな家のすべての部屋のドアを開け、誰もいないことを確認するたびに

喉の奥から嗚咽が漏れた。

どの部屋にもどの部屋にも、叔母の姿はなかった。

「ママ！ママ！どこにいるの！？」

私は、ほとんど半狂乱しながら家中を探したが、叔母はどこにもいなかった。

そして、和室の仏壇の前に叔母の遺影を見つけて膝をついた。

叔母は、そこにいた。

黒い額縁の中の叔母は、優しく微笑んでいた。

初めて見る叔母の笑顔だった。

私は、さらに大粒の涙を零して泣いた。

「ママ！ごめんなさい！ごめんなさい！……」

私は、写真の叔母に向かって何度も何度も謝った。

しかし、微笑んだ叔母は何も答えてはくれなかった。

第17章 『手紙』

叔母の遺影の前で、私は泣き崩れた。

あの日、叔母が亡くなった日…。

病院で泣いた時のように…私は、声と涙が枯れるまで泣いた。

そして、私は泣き疲れていつの間にか寝てしまった。

どれくらいの時間が過ぎたのだろうか？

西側の窓から柔らかな夕陽が差し込み、和室の中をオレンジ色に

染めていた。

私は、ゆっくり体を起こした。

何もする気になれず、叔母の遺影をただぼんやり眺めながら畳の上に

座りこんでいた。

私の目の前では、叔母の日記が夕陽に照らされていた。

私は、日記を手を取った。

もう一度、最初の1ページか読み返そうとして、表紙をめくり

そして、すぐに閉じた。

苦しくて読めなかったのだ。

しかし。

しばらく、ぼんやりと日記を見つめた。

最後の1ページ。

私は、最後の1ページ……この日記に書かれた最後の1ページを、まだ読んでいなかった。

日記を裏返し、後ろからページをめくった。

なにも書かれていない空白のページが何枚か続き、ついに最後の日記が

書かれたページに辿り着いた。

日記の最後のページは、私がこの家を出た日に書かれたものだった。

* * * * *

×月×日

今日、アヤがこの家を出て行った。
私の役目は、これですべて終わりです。

* * * * *

この日を最後に日記は終わっていた。

初めから、この日で最後にするつもりで書かれたものなのか

それとも、まだこの先も何かあれば書くつもりだったのか…

今となつては分からないが、最後の日記にしてはあまりにも簡単な
内容だった。

ほかに、何か書かれているのではないか?と思い、ここから先の
ページも慎重にめくってみたが、残りのページはすべて白紙のまま
だった。

そして最後の白紙のページをめくり、背表紙に辿り着いた。

私は、叔母の日記をすべて読み終えた。

そして、その日記を閉じようとした時だった。

背表紙に何か違和感を感じた。

この日記帳は、表紙が分厚いハードタイプになっており見るからに高級そうな作りをしている。

紙質も普通の紙とは違い、軟らかく、それでいてしっかりとしたコシが

ある上質な紙が使われている。

この日記帳に書きこむには、鉛筆やボールペンは相応しくない。

高級な万年筆で書くのが一番似合うと思わせる材質だった。

事実、叔母はこの日記にはすべて万年筆を使用していた。

私が、この日記に妙な違和感を感じたのは、その背表紙の“厚さ”だった。

分厚い表紙のこの日記には、ベルベット素材のブックカバーがかけられている。

このブックカバーは後から叔母がかけたものだろう…。

ベルベット素材のカバーは、表紙と背表紙をすっぽりと覆う作りになっており

後からかけたにしては、ぴったりのサイズだった。

私を感じた違和感の正体は、このブックカバーと背表紙の間にあった。

背表紙の内側と、それをすっぽり覆ったブックカバーの間に何か挟んで

あることに気付いた。

私は、このカバーを日記帳から外そうと試みたが、思いのほか密着して

それは出来なかった。

カバーと背表紙の隙間をわずかに広げ、覗きこんでみた。

確かに、そこには何か挟まれている。

メモ？ それは、いくつかに折りたたまれた紙片のようだった。

私は、自室からピンセットを持ち出して、その紙片を慎重に引き抜いた。

そして、その紙片を広げてみた。

そこには、細かい文字がびっしりと埋め尽くされていた。

それは、間違いなく叔母の筆跡だった。

広げた紙片は、B5サイズほどの大きさの紙が2枚。

これに隙間なく几帳面な文字が埋め尽くされている。

叔母の、わたし宛ての『手紙』だった。

* * * * *

アヤへ

この手紙を読んでいるということは、あの日記もすでに読んでいる
のでしょうかね。

もしも、この手紙とあの日記があなたの目に触れることなく処分さ
れてしまうならば、

それはそれで、いいことなのかもしれません。

あなたには、今から私が話すことを知る権利もあるし、知らずに生
きていく権利も

あるのです。どちらにしても、あなたにとってこの手紙は辛く悲し
い内容だと思い

ます。何も知りたくなければ、今すぐこの手紙と日記を処分してく
ださい。

でも、あなたがこの手紙を目にしているということは、あなたはこの真実を知るべき

運命にあったのかもしれない。

アヤ。あなたは今いくつになるのでしょうか？

何故こんなことを聞くのかというと、アヤ。あなたが、この手紙を読んでいる頃、

私はもうこの世にはいないかもしれないからです。

あなたは今日、我が家を出て行きました。

そう、就職のためです。あなたが、この手紙を見つけた時、あなたがいくつになつて

いるのか…私には想像もできません。もしかすると、もう結婚して子供もいて幸せな

家庭を築いているかもそれませんね。そうであつて欲しいと心から願っています。

いざ、あなたに手紙を書くとなると、何から書けばいいのか…正直迷います。

私は、あなたに話さなければならぬことが多すぎるのです。これが、私があなたに

送る最初で最後の手紙です。我慢してどうか最後まで読んでください。

アヤ。

まずは、あなたの母親のことです。あなたを産んだ母親は、あなたも知っている通り

事故で亡くなりました。いいえ、あなたの母親だけではありません。あなたの父親も

そうでした。あなたの実の両親は、あなたが生まれて間もなく交通事故に遭い一緒に

この世を去ったのです。

あれは、あなたが生まれてまだ3ヶ月の頃でした。

とても寒い冬のことです。あの年は、例年になく雪の多い年でした。あの日も、数日前から降り続いた大雪で、この辺りも一面銀世界でした。まるで、雪国にでも来たかのようにでした。

あの日、あなたは母親の腕に抱かれて父親の運転する車で外出していたのです。

どこに向かっていたかは、誰にもわかりません。きっと食事にも出かけたのかも

しれませんね…。姉は、外食が好きな女性むすめでしたから。

そこで事故が起こりました。あなた達の車は、雪の国道を走っていました。その時

対向車を走る大型トラックが雪でハンドルを取られ制御不能となり、あなた達の車に

正面からぶつかったのです。あなたの父親は即死でした。そして、あなたと母親は

すぐに病院に運ばれました。母親は重体でしたが、あなたは母親の腕の中で奇跡的に

ほとんど無傷でした。私が病院に駆け付けた時、姉は虫の息でした。そして、息を

引き取る間際に姉は私にこう云ったのです。「アヤを…お願い…」と。

私は、夢中で姉に声をかけました。「何言ってるの!?!お姉ちゃん!アヤはあなたの子

よ!元気になってあなたが育てなくてどうするの!?!」と…。しかし、そんな私の

叫びが聞こえたのかどうか…あなたの母親は静かに息を引き取りました。

アヤ。そしてあなたは私の元へやってきたのです。あなたも知っているとおおり、私達

夫婦には実の子供はいませんでした。二人とも子供が嫌いだったから……と言つのは

本当はただの強がりです。私もあの人も、子供は大好きなのです。結婚する時には

子供は5人くらい欲しいと。あの人は言っていたくらいです。でも、どうして私達が

子供を作らなかったのか……出来なかったのです。結婚後しばらくして、なかなか

子供に恵まれなかった私達は、軽い気持ちで検査をしました。そして、その検査で

あの人に決定的な原因があることが分かりました。私達夫婦には子供は絶対に出来な

い。という結果でした。私は毎晩のように泣きました。

しかし、私が悲しめば悲しむほど、あの人を苦しめるだけだということに気付き、

私は子供のことは諦めることにしました。あの人も「二人で生きて行こう」と言っ

てくれました。そんな時に、姉の事故がありました。そして、あなたが私達夫婦の

子供となったのです。

しかし、私には素直にあなたのことを迎え入れるだけの心の準備がなかったのです。

アヤ。私は、恐ろしい女です。母親になる資格などないので

正直に言います。

子供が出来なかった私は、姉が妊娠したことを知り嫉妬しました。それだけではありません。生まれて初めて人を妬ねたみました。

素直に『おめでと』『などと言つ気持ちにはなれませんでした。姉が出産を間近に

迎えたころ私は、毎晩のように姉が流産することを祈るようになって

ていました。

最低な人間と言われても仕方がありません。本当のことなのです。しかし、姉は無事に元気な赤ちゃんを出産しました。アヤ、あなたです。

赤ん坊の頃のあなたは、それはもう可愛かった。愛くるしかった。

親ばかりいいえ

『叔母ばかり』と言われるかもしれませんが、あなたは本当に可愛かったのです。

でも、所詮あなたは姉の子……。私は、いつしか、あなたのその愛らしさが憎しみに

変わってしまったのです。いいえ、勘違いしないでください。私が憎しみを持った

のは、あなたにはありません。姉です。私は、姉さえこの世から居なくなれば

愛しいアヤは私達夫婦のものになるのではないかと信じられないような恐ろしい

ことを考えるようになりました。

そして、また私は毎日のように姉のことを妬み呪うようになっていったのです。

そんな呪いが通じたとは思いませんが、結果的に私が望んだとおりの事となって

しまいました。私は自分のことが恐ろしくなりました。悪魔や鬼の様な私には、

アヤの母親になる資格などないと思いました。

しかし、姉は最期に私に『アヤをお願い……』と託して息を引き取りました。

私は、悩みました。葛藤しました。そして、最終的にあなたを引き取ることを決意

したのです。その時、私は姉に……あなたの母親に誓いをたてたのです。

『アヤを愛さない…と。』

アヤ　。

あなたは、何を勝手なことを！と怒るかもしれませんがね。

事実、あなたには、私の誓いのせいで幼い頃から辛い思いばかりさせてきました。

でも、本当は私は姉との誓いを破っていたのです。あなたは覚えていないかもしれ

ませんが、私達夫婦はあなたのことを溺愛していました。

目の中に入れても痛くないとは、本当にこのことなのだと思います。

しかし、姉との誓いを破った罰は下されたのです。

あなたが3才の時でした。

私は、胸に痛みを覚え診察を受けました。そして、私の心臓には爆弾が埋め込まれ

ていることを知りました。手術もできない状態でした。

医者は、その爆弾はいつ爆発してもおかしくないと言いました。

私の心臓は、明日…いや、今この瞬間に止まってしまつかもしれないのです。

私は、そのことを聞き、すぐに『罰はちが当たった』と思いました。

そうです。姉との誓いを破った罰です。

私は、姉にアヤを愛さない。と誓いました。

しかし、私達夫婦は人目も憚はばからず、あなたのことを溺愛しました。

姉を恨み、妬み…そして、姉を死に追いやって、その娘を奪い…自分だけ幸せを

手に入れようとした罰が当たったのです。

私は、その時に改めて『誓い』をたてたのです。

今度は、姉にはありません。私自信に…いいえ、アヤ、あなたにです。

私は、この先二度とあなたのことを抱き締めない。愛さない。と心に誓ったのです。

アヤ…でも、これだけは分かってください。それは、私が本当にあなたのことを

愛していたからです。言っていることが矛盾しているようですが…
…そうなのです。

私は、私の心臓は、いつ止まるか分からない状態です。もしも、今までの様に

あなたを溺愛し、抱き締め、あなたに愛情を注ぎ込み続けたら…きっと、あなたは

私のことを本当の母と慕い、愛してくれることでしょう。

しかし、そんな愛する母をあなたは近い将来必ず失うことになるのです。

実の母親を失ったあなたは、二度も愛する母を失うことになってしまふのです。

だから、私は、あなたを愛することをやめました。

そして、あなたから愛されない努力をしました。

どうやら、その努力は実ったようです。あなたは、私のことを叔母さんと呼び、

必要最低限の会話しかしなくなりました。それでいいのです。

私には、それが一番の望みだったのです。私は、いつでもあなたの前から消える

覚悟ができていました。しかし、なかなかお迎えは来てくれませんでした。

医者は、長くて1年…と宣告しました。しかし、どうでしょう？

私は、あなたが成人して就職するこの年まで生き長らえました。

約20年間、あなたには謝っても謝りきれません。でも、私にとってもこの20年

は地獄の日々でした。愛するあなたを目の前にして抱き締めてやることも出来ない

のですから…。

私は、あなたに愛情を与えてあげられない代わりに、たくさんの本を授けました。

私も、昔そうだったように、本は友達になっけてくれます。時には先生にも、親に

さえなっけてくれます。幸い、あなたは本が大好きな子でした。

私は、あなたにたくさんの本を与えて育てました。そのせいでしょうか？

あなたは、いつだったか『小説家になりたい』と言ったことがありましたね。

私は、正直驚きました。私が昔、夢見たことと同じことをあなたが口にしたのです

から…しかし、私達は反対しました。『小説家など職業ではない』と冷たく言っ

てしまいました。本心ではありません。あなたには、小説など空想の世界ではなく

現実の世界でしっかり地に足を付けた生き方をして欲しかったのです。

あなたが就職をした丸川商事は、あの人…お父さんが頭を下げて内定を取り付けて

くれた会社です。あなたは、気が進まないでしょうが、実はお父さんはあなたのため

のために毎日毎日、あの会社に出向いて頭を下げていたのです。

お父さんは、とても不器用な人でしたが、あなたを思う気持ちは私と同じでした。

まさか、この私よりも先に逝ってしまうなんて…。

これ以上、お父さんの話はやめておきますね。辛くなりますから。

あ、そうそう。アヤ…あなたは一度も足を踏み入れたことが無いかもしれません

お父さんの書斎の机の上に葉巻入れがあります。それを見てください。

それで、お父さんのあなたに対する気持ちがすぐに分かるはずですよ。

アヤ…最近私は、発作が頻繁に起こるようになっていました。

私の心臓は、もう限界かもしれません。ここまで耐えてくれて感謝しています。

アヤ…こんな不器用な愛し方しかできない私を許してください。

いいえ、許してなんてとても言えませんね。私を一生許さないでください。

どうか、私を…こんなバカな母親を恨んでください。そうすれば、あなたの悲しみ

も少しは和らぐかもしれません。

アヤ…最後に一度でいいからあなたを抱き締めたかった。

大好きよ。アヤ。

アヤ…ありがとう。

そして、ごめんね…。

アヤ…私の愛しい娘…。

*

*

*

*

*

叔母の手紙を読んで、不思議と涙は出なかった…。

涙は枯れ果てたのだろうか。

私は、さっそく書斎に向かった。

机の上の葉巻入れ…これか？

机の上に木製の小さな箱がある。

焦げ茶色のその木箱のふたには何語か分からないが筆記体で何かが書かれている。

私は、その蓋を開けてみた。中には、葉巻が6本きちんと並んで収められていた。その葉巻をすべて箱から取り出してみたが、特に目に付くものは見当たらなかった。

おかしいな…と思い、その箱を手に取りよく見てみると、葉巻が収まっていた部分の下が引き出しの様な構造になっている。

その引き出し部分を引くと、中には小さなカギが一つだけ入っていた。

私には、そのカギが何のカギなのか、すぐに分かった。

机の引き出しだ。

私の予想は的中した。カチャンと軽い音とともに、叔父の机の引き出しが

解錠された。

私は、引き出しの取っ手に手をかけた。胸の鼓動が速くなるのを感じた。

引き出しは意外と軽かった。

半分ほど引き出すと、その中には…何も入っていなかった。

もう半分を引き出すと、空の引き出しの一番奥に一枚の紙片が見えた。

「また手紙か？」一瞬、憂鬱になった。

しかし、その紙片は手紙ではなかった。

これほどまでに、叔父が大切に仕舞っていたものとは何だろうか？

それは、古ぼけた写真だった…

私は、その写真を手に取った。

枯れ果てたはずの涙が再び頬を流れた。

その写真には、にっこり微笑んだ叔父と叔母、そして小さな私の姿が写っていた。

どこからどうみても、幸せな家族の写真だった。

裏を見てみると。

『19××年×月×日

アヤ3才 動物園にて』

と書かれていた。

第18章 『作戦』

【新着メールあり 1件】

送信者は、伊集院 竜一だった。

『今日17時、いつもの店で』

相変わらず色気も素っ気もないメールだ。

まあ、男から絵文字だらけのメールを貰っても嬉しくないのだが…。

『了解』

俺も、負けずと一言だけメールを返信した。

あの日から、俺と竜一はマメに連絡を取り合っている。

「母ちゃん、俺、今日晩メシいらさないから」

俺は、庭で畑の雑草を取っている母ちゃんに向かって声をかけた。

「あいよ。また竜ちゃんかい？」

「ああ、あと一歩なんだ…。」

俺は、そう言い残して部屋に戻った。

実は、あのあと何度か竜一は、この施設に来ている。

母ちゃんは、すっかり竜一のことを気に入ったようだ。

俺達の計画のことも母ちゃんは『好きにきなさい』と、大賛成とまでは

いかないものの特に反対もしなかった。

その俺達の計画の目的は2つある。

一つは、以前から竜一と愛が密かに動いている。

『愛の母親の死の真相を掴む』こと。

そしてもう一つは、丸川商事が関係している施設などの不正を見つけて出し、

それを公おおやにすることで連中の計画を潰すことだ。

もちろん、その計画とは『あけぼの園』を立ち退かせて福祉施設を建てるといふ

計画だ。

俺は、あの日　　。

竜一の話聞いた時、愛の母親の死の真相…これこそが、俺が探していた

ものだ。と直感した。

愛は、自分の母親の死について、施設は何かを隠していると考えている。

その『何か』が何なのか？

それは、おそらく施設にとっては隠しておきたい話に違いない。

俺が、探しているものは、まさにそれなのだ。

丸川商事が経営する施設の影の部分を探き、それをネタに俺は丸川商事の介護事業所と

しての指定を取り消してやろうと考えていた。

竜一には、俺の方から『手を組まないか？』と打診した。

竜一は、俺の話すべて聞いたうえでお互い協力し合うことに同意した。

もちろん、そのことは愛にも話し、愛も『その方が心強い』と言ってくれた。

計画は、なかなか順調だった。

と言っても、俺はほとんど何もしていない。

以前、俺がマンガ喫茶であれほどの時間を費やし調べてもヒットしなかった情報が、

竜一のパソコンの中には数えきれないほど記録されていた。

これだけの情報を調べ上げるのに、どれだけの時間と労力を費やしたのか：

竜一と愛の本気さが俺には十分理解できた。

竜一と愛が集めた情報、そのほとんどが、丸川商事が経営する介護施設での不正請求に

関するもので、中には明らかに高齢者虐待ではないか？と疑わしい事例もいくつか

見受けられた。

俺達は、その一つ一つを検証するため、関係者からの情報収集に走り回った。

ときには、入所者本人やその家族、友人、知人、同業者の介護サービス事業者など

からも話を聞いた。

そして、その情報をもとに俺達は、いよいよ行動を開始しようとしていたのだ。

* * * * *

竜一と待ち合わせをした『いつもの店』それは、ある定食屋だった。

そう…俺が昔、愛と付き合っつきっかけになった、あの定食屋である。

竜一は、あの時の愛の話を聞いて、どうしてもその定食屋が気になっ
たらしく

愛に聞き出してこっそり通っていたのだ。

偶然、その定食屋は、竜一たちのマンションと俺の家『あけぼの園』
の中間地点に

あったため、待ち合わせにも丁度良かった。

初めてその店で待ち合わせをした時、竜一が店のおばちゃんに『い
つもの』と注文

していたのには驚いた。

約束の5分前。

俺が店に入ると、竜一はもう席に座っていた。

店内には、竜一以外の客はいない。

竜一は、モツ煮込みを肴さかなにすでに一杯はじめていた。

「よお！早いな…」

小汚い定食屋には似合わない、上下グレーのスーツに身を包んだ竜一が俺に手をあげた。

「早くなって…5時の約束だろ？」

俺は店内の掛時計に目をやった。

「え〜？ あ、もうそんな時間かあ…」

竜一は、ビール瓶を持ち上げ空になったグラスに手酌した。

この男は何時から飲んでるんだ？ と思いながら、俺が竜一の向かいの

椅子に座った時、カウンター越しにおばちゃんの元気な声が聞こえた。

「いらっしゃいませ〜！」

俺は迷わずウーロン茶を注文した。

「なに？飲まないの？」

竜一は、まるで不思議な物を見るような目付きで俺を見た。

「あ、うん…話が終わったらな」

「そっか、そうだね。話の途中で寝られても困るしな」

うるせー。どうせ酒、弱いですよ…。

竜一のイヤミは聞こえない振りをして俺は話を切り出した。

「で？　どんな状況？」

「ああ…うん。実は、明日…例の医者に会うことになった。」

竜一は、急に真面目な顔に変わった。

「そうか…やっとOKしてくれたんだな」

と、俺が頷いたとき、おばちゃんがウーロン茶を運んできた。

「アキラくんもモツ煮食べるかい？」

「あ、うん。ちょうだい」

俺はおばちゃんの方に顔を向けて笑顔で答えた。

そして、おばちゃんが「はいよー」と言い、厨房に戻っていく姿を見送りながら

竜一に聞いた。

「なあ、竜一…明日、俺も一緒に行っていいいか？」

竜一は、俺の言葉が聞こえたのか聞こえなかったのか…モツ煮を口の中に放り込み

ビールで流し込んだあと、ゆっくりとこう答えた。

「もちろんだよ。最初からそのつもりだから。」

明日、竜一が会う約束を取り付けた『例の医者』とは、以前ほのぼのの館の嘱託医を

していた医師のことだ。

定期的に施設を訪問し、愛の母親のことも毎月診察していた医者だ。ところが、その医者は愛の母親が亡くなってすぐに施設の嘱託医を辞めてしまった。

いや…辞めさせられた。と言った方が正確なのかもしれない。

その理由を、施設の職員達は誰一人として知らなかった。いや、知らされていなかった。

施設長ですら、本当の理由は聞かされていなかった。

親会社から、ある日突然『嘱託医を変更する。』と通告されたりしい。

* * * * *

『例の医師』との待ち合わせの日

竜一は、いつもの定食屋でいいかな？　と語っていたが、さすがにそれはどうかと思い

その近くのファミリールレストランで会うことにした。

駐車場で待つこと10分：その医師はやってきた。

いかにも高級そうなシルバーのBMWだ。

医者という職業はやはり儲かるようだ。

そのBMWから降りてきた男性は意外と若かったので俺は少し驚いた。

もつと年配の男なのかと想像していたが、どう見てもまだ40代にしか見えない。

俺達も車から降りて、お互い軽い挨拶を交わしてから店に入った。

店員に案内され、俺達はボックス席に腰を下ろした。

その医師は、丁寧に名刺を差し出し菊地と名乗ってきた。

『菊地 義弘』

ほのぼの館と同じ市内にある『菊地内科医院』の院長をしている。

ほのぼの館へは、嘱託医として施設の開設当初から月1回訪問し入所者の健康チェックを

依頼されていた。

もちろん、愛の母親のこともよく知っている人物だ。

「お忙しいのにお時間を作って頂きまして、ありがとうございます。」

竜一は、改めて頭を下げた。

俺も、それに続き頭を下げた。

「いえいえ、こちらこそ…何度もお断りしてしまつて…」

と、軽く頭を下げながら菊地はバツが悪そうな顔をした。

そして「それで、私に聞きたいことと言つのは…なんでしょうか？」と、軽く眉をよせた。

「あ、はい…」

いきなり話を切り出され、心の準備ができていなかった俺と竜一は一瞬たじろいた。

が、その時タイミング良く店員がメニューと水を運んで来たので救われた。

竜一は、菊地の前にメニューを差し出して「何か注文してからにしましょう」と

微笑んだ。

「あ、そうですね…」と苦笑いした菊地も心なしか緊張しているようだった。

散々迷った挙句、結局俺達3人はドリンクバーだけを注文し、それぞれコーヒーを

入れて再び席に座った。

「先生、実はですね…」

いよいよ竜一が、話を切り出した。

「はい」 菊地は、コーヒーカップを口元に運びかけて元に戻した。

「柏原 節子さんという方、ご存じですよね？」

俺と竜一は無意識に菊地の表情に注目した。

菊地は、意識的に俺達と目を合わせないようにしているのか、コーヒーにミルクを入れ

スプーンでくるくるかき回しはじめた。

「柏原さん？ …もちろん知ってますが…なにか？」

コーヒーから静かにスプーンを引き抜いた菊地が言った。

「ですよね…。ところで先生」

竜一がまっすぐな視線を菊地に向けた。

柏原節子の名を聞いた菊地の顔が緊張して見えた。

「先生、単刀直入に聞きます。柏原節子さんは何故亡くなったのですか？」

本当に単刀直入だった。

この質問を聞いた菊地は、しばらく沈黙してから静かに口を開いた。

「柏原節子さん…のことですか…。亡くなられたんですよね…。」

と言い、菊池はゆっくり視線を落とした。

そして

「あの…ひとつ聞かせてください。」

菊池はゆっくりと視線を上げ竜一の顔を覗き込んだ。

「えーっと…伊集院さん…とおっしゃいましたか？」

失礼ですが…あなたは、柏原節子さんとは…どの様なご関係で？」
菊地の質問も当然だった。

竜一は、今日この場に菊地を呼び出した理由を告げてはいなかった。ただ『ほのぼのの館であった事について話を聞きたい。』と言っただけだった。

だが、これだけでも菊池には、何を聞かれるのか…おおよその察しはついていたのかも
しれない。

「あ、ああ！そうですね。まずは…そうですね。失礼しました。」
竜一は、苦笑いをした。

「僕は、柏原節子の娘…柏原愛の夫なんです。つまり、柏原節子は僕の

義母なんです。」

竜一はキツパリと言いきった。

その時、隣で聞いていた俺は、不謹慎だが思わず吹き出しそうになった。

なぜなら
竜一と愛は、夫婦でも何でもないということを知っていた。

実のところ、恋人同士でもないらしい…。

一言で言えば、『同居人』とでも言うのだろうか？

愛と竜一が住んでいるマンションは、もともと愛が一人で住んでいた。

そこに竜一が転がり込んだかたちだ。

この二人が奇妙な同居生活を始めたのは、愛の母親が死んでしばらく経って

からのことだったらしい。

ある日、愛が勤める病院に一人の若い男性が救急車で運ばれてきた。

その男の名は『伊集院 竜一』

バイクで転倒し足の骨を折っていた。そして、その竜一の担当ナースとして

就いたのが愛…そう、柏原愛だ。

若いイケメン患者と美人ナース、あとは想像通りの展開で…と言いたいところ

だが、熱を上げたのは竜一だけだったようだ。

竜一は、愛に一目惚れし退院後も猛アタックし続けた。

その甲斐あつてか、竜一は愛と『良いお友達』にまでこぎつけた。

まあ、俺の目から見たら愛だって満更まんごうではないはずだ。

おそらく、あの愛のことだ…竜一を焦こらして楽しんでいるのだろう。

でなければ、部屋に転がり込んだ竜一を素直に受け入れる訳がない。

俺が愛から聞いた話によると、竜一は、母親を亡くした愛を懸命に支えて

くれたらしい。

愛は、竜一がいなければ立ち直ることは出来なかったと言っている。

「そうですね…」

竜一の自己紹介を聞いて、菊池は頷いた。

「柏原さんの…義理の息子さん、という事ですね」

菊池はそういつと再び頷いた。

「ええ、そんなんです。おもて向きは…ですけどね。」

そう躊躇ためどいなく言った竜一の口元が少しだけ緩んだ。

この事実を伝えるのを楽しんでいるようにも見える。

菊地と俺は同時に顔を上げた。

「え？」

もちろん、声を出したのは菊地のほうだ。

「おもて向きは？…ということ？」

菊地は目を丸くした。

俺も、少し前にこの話を聞いた時…今の菊池と同じリアクションをした様な気がする。

「はい、実は…」竜一が答えかけた時だった。

「柏原さんが亡くなったのと、何か関係が？」

さすがは医者だ。頭がいい。その通りだ。

竜一は「はい」と短く返事をしてから話を続けた。

「実は菊地先生、僕と愛は母の死に疑問を持っているんです。」

僕と愛が夫婦を装っているのは、その真相を探し出すためなんです。」

ここまで言い終えた竜一はコーヒーを一口飲んだ。

菊地も顔色ひとつ変えずにコーヒーに口をつけた。

「うむ…それで？」

菊地がゆっくりと口を開いた。

「はい。先生は、柏原節子の娘…愛がどこで働いているかご存知ですか？」

竜一の表情が挑戦的な顔付きに変わった。

「え？柏原さんの娘さんですか？ えーっと…」

菊地は、確かにあるはずの記憶を探し当てるため天井を見上げた。

その記憶はすぐにみつかった。

「あ、確か…どこかの大学病院で看護師をされているのでは…」

その答えは正解でもあり不正解でもあった。

「はい、その通りです。」竜一は言った。

「…ですよ。柏原さん、よく娘さんの話をしてましたから」

菊地が笑顔を見せた。

「でも…その病院は辞めました。」

竜一は、菊地とは対象的に真顔になり話を続けた。

「え？ 辞めたんですか？」

菊地も顔を強張らせた。

「はい、母親が亡くなったあと…辞めたんです。」

「そうでしたか…」

「はい。で、今は介護施設で看護師をしています。」

「え？ …いま、なんと？」

「はい、愛は今…介護施設…ほのぼの館で働いてるんですよ。」

菊地は、はっと息を飲み込んだ。

「え？ ほのぼの館…で？」

「ええ、そうです。さっきも言った様に、愛も僕も母の死には疑問を持っていません。愛は、母が亡くなった理由を施設に問い詰めました。

しかし、施設の説明は、突発的な心筋梗塞だと言っただけで詳しい

死因については何も説明がありませんでした。

囑託医から話を聞きたい。と言っても、辞めたと言われてしまいましたしね…。

そして、どうしても真実を知りたいと思った愛は、病院を辞めて、ほのぼの館で

働くことを決意しました。それが真実を知るための一番の近道と考えたからです。」

竜一は、一気に話した。

そして、残ったコーヒーを飲み干してから「ちょっとコーヒーおかわり」と言い

席を立った。

竜一が新しいコーヒーを運んで来る間、俺も菊地も無言だった。

言い様のない重苦しい沈黙に耐えていると菊地が口を開いた。

「そつだったんですか…」

その言葉が俺に言ったものなのか、菊地の独り言なのか分からないが、俺は

とりあえず「はい…」と小さく返事をしておいた。

竜一は、新しいコーヒーをテーブルに置くと菊地のカップに手を差し出し

「先生は？」と聞いた。

菊地は「あ、いや…自分で…」と言い席を立った。

菊地が席を離れたのを見届けてから竜一が俺に聞いてきた

「なんか言ってた？」

「あ、ううん。なんにも…」

俺は小さく首を振った。

菊地は席に戻ったと同時に口を開いた。

「そうでしたか…娘さんが、そこまで…」菊地は視線をコーヒーカップに

落とした。

そして竜一は言った。

「ええ…あ、そうそう！それで、僕と愛が何故夫婦を装ってるか…なんですけど、

僕は今までの話を愛にすべて聞いていたんです。

僕と愛は付き合っていましたから…。それで、僕は愛に提案したんです。

『本気でほのぼの館に忍び込む気なら、俺と結婚しよう！』と。

なぜなら、愛の苗字『柏原』は、そんなにある名前だと思えません。

もし、愛がほのぼの館の看護師募集に応募すると『柏原』という姓で柏原節子の

娘だというのがバレるかもしれない。

だったら、いつそのこと俺と結婚して姓を変えて忍び込むのはどうだ？と

言ったんです。」

竜一の告白に菊地も関心を抱いたようだ。

「ほう…」と微笑んだ。

俺は『伊集院』なんて冗談みたいな名前の奴が言う台詞か？せじふ

と心の中で突っ込みを入れて話の続きに耳を傾けた。

「それは…」

菊池が笑顔を浮かべながら言った。

「それは…プロポーズですか？」

「あ、いや…まあ、僕的にはそのつもりだったんですけど…ね」

竜一が照れたように笑った。

「で？彼女は？」

俺は、結果を知っていてわざと聞いてやった。

「うん…。NG」

竜一は腕で大きな×印を作った。

「あらら…」菊池が苦笑いした。

「愛に言われました。」竜一の表情が真剣な顔に変わった。

「この問題が解決するまで待ってくれ…って。」

要するに、愛はいずれ竜一と結婚する気にいるようだ。

ただ、この問題で自分が納得できる結果が出るまでは、結婚はしない。

と心に決めているらしい。

ただ、竜一の言うとおり柏原の姓を隠し、『伊集院』と名乗ることは同意した。

その真意は定かではないが、これで二人の偽装夫婦生活がはじまっ

たのである。

「それで…先生。もう一度お聞きしますけど」

竜一は、とりあえず自分の紹介を一通り澄ますと、再び本題に入った。

「柏原節子さんのことで、知っている事があれば何でもいいので教えてください。」

菊池は沈黙した。

しかし、竜一の質問の答えを拒んでいる訳ではない。

むしろ菊池は、このことを話す機会が得られて内心嬉しかったのかもしれない。

菊池は時間をかけて頭の中で話の整理をした。

そして、ゆっくりと話を始めた。

そう…

柏原節子の死の真相を　　。

第19章 『真相』

「あれは事故でした…」

菊地がポツリと呟いた。

「え？」俺と竜一は同時に声をあげた。

「柏原さんは、病死ではありません…事故だったんです。」

菊地は、そういう言葉を詰まらせ下唇を噛んだ。

「事故？ ……どういことですか？」

竜一は身を乗り出して菊地に迫った。

と、その時

ピピピピピ…！

突然、けたたましい携帯電話の着信音が響いた。

「…んだよ！こんな時に…」

それは、竜一の携帯電話だった。竜一は軽く舌打ちをして電話を開き

「あ…。」

と、画面に表示された発信者の名前を見ると同時に「ちょっとすいません…」

と菊地に小さく頭を下げた電話に出た。

「もしもし？ どうした？ うん。うん。え？ そうなの？

うん、分かった。じゃあ。」

と、簡単な会話で竜一は電話を切った。

そして

「先生、申し訳ありません。その話…少し待ってください。」

竜一は唐突に言った。

「え？」

「いま、愛がここに向かっていているそうです。すみませんが

話は、愛が来てからにしてください。」

そう言って、竜一は丁寧に頭を下げた。

菊池は、竜一に向かって軽く微笑むと

「そうですね…そうですね。娘さんにも聞いて頂いた方がいいですね。」

と、自分自身にも言い聞かせるように何度も頷いた。

さて、困った。

ただでさえ、重苦しかった雰囲気だったのに…愛の到着まで、どうやって

この時間を繋ごうか？ と、俺は菊池と竜一の顔を順番に覗きこんだ。

しかし、菊池も竜一も涼しい顔でコーヒーを啜っている。

俺は、この空気に耐えられずトイレへ逃げ込もうと腰を浮かした時だった。

「あのお…？」

声を出したのは菊池だった。俺に向かって話しかけていた。

俺は、浮かしかけた腰を元に戻して

「あ、はい？」

と、素っ頓狂な声を出した。

菊池は俺の顔を見て微笑みながら聞いてきた。

「あの〜、ところで…あなたは伊集院さんの…？」

菊池は恐縮したように苦笑いを見せたが、それ以上に恐縮したのは俺のほう

だった。

「あ！ああ！すみません。」

俺は、慌てて自己紹介をした。

「僕は、春山です。春山アキラと言います。訳あって、この伊集院くん達と

一緒に愛のお母さんが亡くなった理由を調べています。」

俺は、とりあえずここまで話すと菊池の顔色を窺った。

菊池は、俺の『訳あって』の部分には特に反応することもなく、そうですか。と

笑顔を見せた。

そして菊池が、ちょっと失礼。と言ってトイレへと席を立った。

俺と竜一は、この隙に…と、ドリンクバーから新しい飲み物を淹れ席に戻った。

それからしばらくして、トイレから戻ってきた菊池の手にも新しい
コーヒーが
持たれていた。

その時だった。竜一が店の入り口の方を見て「あ」と声を漏らし右
手を上げた。

愛だった。

愛は、仕事の帰りだった。今日は早番だったらしい。

愛は、菊池に会釈をするとボックス席の前で困った顔をした。

それに気付いた菊池が、「あ、ああ失礼！」と言って奥の方へ体を
移動させた。

すると愛は「あ、すみません！」と言い、無言で俺と目を合わせた。

俺は、その視線で愛の訴えにすぐに気付いて「あ、ごめん！」と、
自分のカップを

持って席を立ち、菊池の隣に移動した。

愛は、俺がどけた席に腰を下ろして竜一と並んだ。

店員が、愛の分の注文を聞きに来たが、愛は迷わずにケーキセット
を注文してから

当たり前のように竜一のコーヒーに口をつけた。

「菊池先生、お忙しいのに急にすみません。」

愛は、軽く頭を下げた。

「あ、いえいえ…私の方こそ…柏原さんのことは私もずっと気になっ
っていたんです。」

菊池の表情が一瞬曇った。

「愛、さっそくだけど…先生に話をしてもらっていいか？」

竜一は、隣の愛に声をかけた。

愛は「うん」と小さく頷いた。

「じゃあ、先生…すいません、さっきの話…お願いします。」と竜
一が言つと

菊池は「わかりました」と告白をはじめた。

*

*

*

*

*

「先ほども伊集院さんには言いましたが、柏原さん…あ、いや。愛
さん、あなた

のお母様は、病死ではありませんでした。」

「え？」愛は眉間に皺を寄せた。

「あれは、事故…だったんです…」

菊地の目は、真っ直ぐに愛の目を見据えている。

「事故？ どういうことですか？」愛が聞いた。

「はい。お母様は、愛さん、あなたもご存知の通り能梗塞の後遺症で軽い

片麻痺がありました。しかし、それ以外はとても健康な方でした。

年齢的にもまだ若かったですし、本当であれば介護施設に入る必要などなかった

と思います。

まあ、これはそれぞれご家庭の事情があるので私が口を挟む事ではないのですが…。

実は、私も柏原さんが亡くなったのを知った時にはとても驚きました。

二日前の定期検診で元気な姿を見たばかりでしたからね…。

あの日…。そう、あの日はたまたま私は休みで家にいました。

夕飯を済ませリビングで寛いでいた時です。携帯電話が鳴りました。それは施設からの呼び出しでした。というか、電話の相手は丸川と名乗る

人物で、ほのぼの館を経営する親会社の社長だと言っていました。

『電話では言えない。とにかく今すぐ施設に来て欲しい。』と言われました。

私ははじめ、イタズラかと思いました。その切羽詰まったタダならぬ雰囲気

とりあえず施設へ飛んで行きました。

そして……

施設に着いた私を待ちうけていたのは、恐ろしい現実でした。

菊池は、言葉を詰まらせて目を伏せた。

俺達3人は、菊池が話の続きをはじめの何を何も言わずに待った。

30秒ほどの沈黙のあと、菊池は再び口を開いた。

「私は施設に着くと、いきなりある個室へ案内されました。2階の一番奥の部屋……」

そうです、愛さんのお母様、柏原節子さんが入所されていた部屋です。

私の他に、その場に居合わせたのは、ほのぼの館の施設長、事務長、若い看護師、

そして、社長と呼ばれていた丸川という男性でした。

確か　　夜の9時過ぎだったと思います。

施設は、もう消灯時間で他の入所者のほとんどは就寝したのだと思っていました。

2階フロアはかなり静かでしたから…。

でも、違っていたんです。あの時　　他の入所者の方々は、1階のダイニングに集め

られていたんです。何をしていたのかは知りません。とにかく、動ける方達は皆

1階に集められていました。

私は柏原さんの部屋に入るよう施設長に促されたとき、とても嫌な予感を感じました。

残念ながらその予感は的中していたのです。

私が部屋に入ると、ベッドの上には柏原さん…愛さんのお母様が寝

かかれていました。

私にはすぐ、亡くなっていることが分かりました。

医者直感とでも言うのでしょうか？　まあ、あの状況なら誰でもそう思ったかも

しれませんが…。

『どういふことですか…？』私は、誰にという訳でもなく独り言のように呟きました。

その言葉に答えたのは、施設長でした。

『先生……実は、さきほど事故がありました……。』と施設長は小さく私に言いました。

その『事故』というのは、こつこついう事です。」

ここまで話した菊池は、再び言葉を詰まらせたが、今度はすぐに愛の目を見てこつこつ言った。

「愛さん。これから私が話すことは、あなたにとっては相当ショックな話だと思います。」

でも、私は　いつか、きちんとこのことを公にしなくては…と
思っていました。

もちろん、柏原さんのご家族には全てをお話して、きちんとお詫びしたいと考えて

いました。

それが…こんなかたちで実現するとは思いませんでしたが、この機会を与えて

いただいて感謝しています。

前置きが長くなりましたが、私はこの話をあなた達に伝えたあと警察に出頭するつもりです。

そして、すべてを告白します。これが、私にできる唯一の懺悔です。

「

と、菊池は前置きをした。

この男は、いったい何を言いだすのかと、俺達3人は目を丸くしていた。

警察？ 出頭？ あの施設でいったい何が起きたのだ？

菊池は、チラッと愛の顔色を窺った。

それに気付いた愛は小さく頷いて言った。

「先生、どんなことでも全部話してください。お願いします。」

その言葉を聞いて菊池も覚悟を決めたらしく、コーヒーで乾いた唇を湿らせてから話をはじめた。

「施設長が言った事故とは、こういうことです。」

あの日、夕食のあと、いつものように入所者の方達はそれぞれ思い思いの時間を

過ごしました。柏原さんは、いつも夕食後はロビーで少し休んだあと部屋に

戻って読書をされるのが日課だったそうですが、その日は隣の部屋の方と

少しだけお話をされていたそうです。

そして、一緒に2階へ上がりそれぞれのお部屋に戻ったのを何人かの職員が

確認しています。

これが柏原さんの最後の姿になったそうです。

柏原さんの異変に気付いたのは、それから少し経ってからです。職員

いつものように見回りをしている柏原さんの部屋に入りました。

その時、柏原さんはベッドの上につつ伏せで倒れていたそうです。

息は…ありませんでした。職員は慌てて施設長に報告し、施設長は親会社の

社長に連絡をしたそうです。

しかし…肝心な119番には誰も電話をしていませんでした。

さきほど、これは『事故』だと言いましたが、実際は『事件』と言った方が

正しいのかもしれない。

柏原さんは、中毒死でした。

彼女の食事には毒物が混入されていました。

その毒物とは、はっきりは分かりませんが…おそらく殺虫剤か除草剤の類だと

思われます。

…実は、あの施設では以前にも同じような事件がありました。

その時は、幸い大きな被害はありませんでしたけれど…。

まさか、こんな事が2度も起きてしまうなんて　　。」

菊池の表情がどんどん暗くなっていくのがはっきり分かった。

「　　毒？　先生、それじゃあ母は…誰かに殺されたということですか？」

愛が泣きそうな声を出した。

俺は、この話の結末を聞くのがとても辛かった。

しかし、愛が気丈にもこの話に真剣に耳を傾けているのを見て我慢する

ことにした。

「殺された…と言うには少し語弊があるのかもしれない。

なぜなら　　その犯人には罪の意識はまったく無かったのですから…。」

そう言うと、菊池は下唇を噛んで黙り込んだ。

第20章 『霊園』

菊地と別れた俺達3人は、竜一の運転で竜一と愛のマンションに向かっていた。

菊地の告白を聞いた俺達は、お互いかける言葉も見付けられず無言で外の風景を

眺めていた。

そして、車が赤信号で停車した時…その沈黙を破ったのは愛だった。

「ねえ、竜一。ちょっと寄って欲しい所があるんだけど…」

後部座席に座った愛が竜一の背中に声をかけた。

「ん？あ、ああ…いいけど…どこ？」

竜一は、バックミラー越しに愛の顔を見た。

「うん。……お母さんのお墓……に、行ってくれない？」

愛は窓の外に顔を向けながら呟くように言った。

助手席に座った俺には、その表情は窺い知れなかった。

愛のお母さんのお墓は意外と近かった。

愛と竜一の住むマンションからは、車で10分ほどの高台の場所だった。

市営の霊園で、管理人はいなかったがよく整備されていて綺麗な墓地だった。

『柏原家先祖代々之墓』と掘られた黒い墓石の前で、俺達3人はコンビニで

買った線香をあげ、手を合わせた。

3人ともかなりの長時間手を合わせていたが、一番最後まで手を合わせたのは

やはり愛だった。

俺と竜一は墓石の前にしゃがみ込み、いつまでも手を合わせる愛の背中を

そつと見守った。

愛は、そのまま寝てしまったのか？と思うほど長時間動かなかった。

そして、ようやく頭をあげてゆっくりと立ち上がった。

そんな愛の背中に竜一が優しく声をかけた。

「愛、気が済んだか？」

愛は、振り返って俺と竜一の顔を順番に見ると、微笑みながら小さく頷いた。

「うん。ありがと…。もう大丈夫」

そのあと俺は、マンションに來いと誘われたが「ちょっと用事を思い出した」と

言い、駅まで送ってもらい二人と別れた。

改札を通り過ぎると、ちょうど電車がホームに入ってきた。

俺は、その電車に乗り空いていたシートに腰を下ろした。

なんとなく、このまま帰る気にはなれず俺は『あけぼのちょう』の駅を

やり過ぎした。

そして次の駅で電車を下りた俺は、ある場所に向かった。

父ちゃんの墓だ。

さっき、愛が母親の墓にいつまでも手を合わせていたのを見て、俺も無性に墓参りがしたくなった。

父ちゃんの墓に来るのは命日の日以来だった…。

そういえば、あの日　　。

俺は、冬月とあけぼの園に6年振りに里帰りをして、その時はじめて

父ちゃんの死を知った。

あんなにショックを受けたのは生まれて初めてだった。

と同時に、あんなに後悔をしたのも初めてのことだった。

しかし、今の愛はきつと俺以上のショックを受けているに違いない。

そう思うと俺は愛のことが気の毒でならなかった。

だが、愛には竜一がいる。それだけでも愛にとっては随分と心の支

えに

なっているだろう。

父ちゃんの墓前には、比較的新しそうな花が活けてあった。

母ちゃんだろうか？

母ちゃんは、毎月ではないが月命日の日に墓参りをしているらしい。

最近行ってない。と言っていたが、この花を見る限り今月も来たようだ。

俺は、手ぶらで墓に来てしまったことに少し気が引けたが、墓前に手を合わせ

目を閉じた。

こんな時、何を祈れば良いのかわからないが、何も考えずに目を閉じると

自然と父ちゃんの姿が瞼の裏に映し出された。

俺は父ちゃんと結局、喧嘩したまま最後の別れをしてしまった。

母ちゃんの話では、父ちゃんは、最期の最期まで俺のことを心配していたという。

家を出て就職したあと、一回も連絡をよこさなかった俺に、母ちゃ

んは何度となく

連絡をしようと思ったらしいが、それを父ちゃんは許さなかった。

『便りがないのが元気な知らせだ』とばかりに、父ちゃんは、俺から連絡があるまで

絶対に電話をするな。手紙も出すな。と言っていたらしい。

そして、俺は父ちゃんが死んだ連絡さえ受け取ることが出来なかった。

父ちゃんが、死の間際にも『アキラには言うな…』と呟いたらしい。

母ちゃんは、その遺言を守り抜いていた。その父ちゃんの真意は今となっては、俺には

知る由もないが、父ちゃんは、俺が一人前になってあげぼの園に胸を張って帰ってくるまで

何があっても連絡をするまい。と、心に決めていたのだろう…と勝手に解釈している。

俺はガキの頃からあの施設が大好きだった。父ちゃんは、いたずらに連絡をして俺に

里ごころを植え付けたくなかったのかもしれない。

だが、俺は 。 そんな父ちゃんの気持ちを裏切っているのではないか？

そんなことを毎日のように考える。

しかし…俺は、父ちゃんと約束した。

父ちゃんが、最期まで俺を見守ってくれたように、俺は最後まであけぼの園を守る…と。

そのための準備は整った。

今日、菊地医師の話で、丸川商事が運営する介護施設の闇を暴くことができた。

菊地の話では、愛の母親は同じ入所者の老人に毒を盛られて殺されたという。

しかし、実際には、その老人に殺意など微塵もなかった。

重度の認知症だったのだ。

その老人は、施設の食事は味が薄くて美味しくないから…と、愛の母親の食事にこっそりと

毒を混入した。本人は調味料が何かのつもりだったのかもしれない

が、とにかく…それが

原因で愛の母親は死去した。

そして、驚いたことにあの施設は菊地を呼びつけて、こう言ったという。

『このことは、公表しないで欲しい。病死で片付けたい と。』

そして、愛の母親は救急搬送されることもなく、菊地の手によって死亡診断書が書かれ

心筋梗塞で亡くなったということになった。

これは、明らかに立派な犯罪だった。正式にこれが何罪に当たるのかは俺には分からないが、

素人の俺にでも、こんなことが許されることではない。ということ
は理解できた。

ファミレスで菊地は、この一件について、すべて告白した。

口止め料として、丸川社長から数百万円の現金を受け取っていることまで自供した。

そして、丸川は店を出る時に『これから警察に出頭してすべてを話す。』と言った。

しかし、愛はそれについて『少し待つて欲しい』と申し出た。

愛が何を考えてそのような発言をしたのか定かではないが、愛と竜一には、それなりの考えが

あつての申し出のようだったので、俺もあえてそれには触れなかった。

俺は、気が済むまで墓に手を合わせると霊園を後にした。

第21章 『地下』

あれから3日が過ぎたが、愛と竜一からは何の連絡もなかった。

俺の方からしようか…と、何度も考えたが連絡はしなかった。

あの二人が連絡をよこさないのは、まだその時ではないということなのだろう。

デリケートな問題だけに、俺から連絡するのは遠慮して待つことにした。

あの日　　。

そう、菊池医師の告白を聞いた翌日から、俺は毎朝、目が覚めると真っ先に

携帯のメールを確認するのが日課となっている。

4日目の朝も二人からメールはなかった。

俺は、朝の家事を一通り終わらせると部屋に戻った。

今日は、朝から久しぶりに快晴だ。部屋の換気をしようと俺は窓を思いつ切り

開け放した。

心地よい風が部屋の中を吹き抜けた。

俺は、部屋の奥から小さな椅子を、窓際まで運んできて腰を下ろした。

窓枠に両腕を重ねて置きその上に顎を乗せた。そして畑と化している庭を

ぼんやりと眺めた。奥の方では、母ちゃんが一生懸命野菜に水やりをしている。

俺は、そんな光景を見ながら考えた。

愛と竜一は、何故あの時、菊池が警察に出頭するのを止めたのだろうか？

もし俺が愛の立場だったら、一発くらいぶん殴っていたかもしれない。

あの場で冷静でいられただけでも、愛のことを大したものだと感心したが、

考えてみれば、菊池を責めたところで母親が帰ってくる訳でもないし、正直に

話してくれた菊池には愛も竜一も感謝しているのかもしれない。

あの時、確かに菊池は言っていた。

どれだけ本当のことを伝えようと思ったか…しかし、それをする
ことに

よって犯人探しが始まり、一人の老人が矢面に立たされてしまう。

それを菊池は懸念していた。

この事件…いや、事故の一番の原因は施設の管理体制なのだ。

あの認知症の老人に罪はないのだ。

菊池は、この事実を隠すことに自責の念を抱きながらも、どうして
もあの老人だけは

守りたかった。

悪いのは、施設の管理体制にあるのだから。

幸か不幸か施設はこの事故を隠そうとしている。

菊池は、施設の頼みを拒むことができずに嘘の死亡診断書を書いていた。

*

*

*

*

*

俺は、机の上から一冊の本を手に取り再び椅子に腰を下ろした。

すっかり途中で読むのをやめていた小説だ。

窓の外に目をやると母ちゃんは水やりを終えて、今度は野菜を収穫している。

俺は、しおりひもを指で引っ張りゆっくりと本を開いた。

*

*

*

*

*

【リバーズ】

第×章 『地下』

あれからいつたい何日、否、何週間が経ったのだろうか？私は、自分

がホームレス
になるなんて夢にも思っていなかった。

45年の人生の中で一度も考えたことがなかった。

しかし、現実には今こうしてガード下で寝起きしている。これをホームレスと呼ばずして何と呼ぶのだろうか。

私は子供の頃から一流の人間になるための教育を受けてきた。小学校こそ近所の公立の学校に通っていたが、中学、高校はいわゆる名門と呼ばれる進学校に進み首席で卒業した。

東大の受験に失敗したのは、私が味わった唯一の挫折となった。しかし、一浪して京大に入学し、大学卒業後は大手商社に就職した。会社では若くして部長にまで上り詰め、美しい妻と可愛い一人娘、そして少しだけ大きなマイホームを手に入れた。

人が欲しいと思うことの大半を私は手に入れていた。そう、私は『勝ち組』の人生を歩んできたのだ。当然、これから先も私は一流の人間として勝ち続けていくはずだった。

だが

人の人生なんて、いつどうなるか分からないものだ。私はある日突然、身に覚えのない殺人容疑で逮捕され数週間に渡り拘留された。

そして、釈放された時には、私は全てを失っていた。

そう、私は文字通り『全て』を失ったのだ。

妻と娘は姿を消し、マイホームは取り壊された。

仕事は：冤罪にも関わらず誤認逮捕された翌日、私は会社に解雇を突き付けられた。

このことを知らせに来た弁護士も今では連絡がとれなくなっている。いま私に残された財産といえば、逮捕前財布に入れておいた5万円ほどの現金と数枚のカードだけだった。

しかし、カードはすべて使用できなかった。おそらく何者かが意図的に解約をしたのだろう。

私の知らないところで、何か大きな力が働いていることは確かだった。得体の知れない何か私を陥れようとしている。

しかし、私には何も出来ない。ホームレスに成り下がった私には、この陰謀を暴く術も気力も残されていなかった。

それよりも、生きること必死だった。食料を見つける方が何よりも重要だった。

財布に残されていた現金は、一週間かからずに底をついた。家を失った私は手持ちの現金でビジネスホテルを泊まり歩き、レストランで食事をとっていた。

私はこれまでの人生で節約などというものとは無縁の生活を送ってきた。

金が無くなるという現実が私には理解できずにいた。だからこそ、この状況においても惜しみ無くホテルやレストランで金を使った。

こんなとき、本当はどうすれば良いのか？ どのような行動をとるべきなのか？

大学では教えてくれなかった。

そして気づいたとき、私は一文無しになっていた。

ホームレスになったのだ。

本当に辛いのは、最初の一週間だった。この現実を受け入れるのに私は一週間の時間を要した。

この時間が長いのか短いのか分からないが、私は一週間をかけて一人前のホームレスになった。

一文無しとなった初日と二日目、私は水以外何も口にできなかった。夜は24時間営

業のコンビニなどで時間を潰し駅前のベンチで座ったまま眠りについていた。

三日目ともなると、いよいよ空腹に耐えられなくなった。と言っても、私にはパ
ン一つ買うことも出来ない。本当に情けなかった。悲しかった。
しかし、嘆いている場合ではなかった。とにかく私は食料を求めて
当てもなく街
中をさまよった。

飽食の時代と言われている今、食べ物にありつくのがこれほど大変なことは
想像もしなかった。とにかく金がなくては話にならない。
金を払わずに食べ物を手に入れることの難しさを私は思い知らされ
た。

そしてついに…

私は、空腹に耐えきれず、一線を越えた。

コンビニで万引きをしたのだ。

店員の目を盗み、菓子パンを2個：上着のポケットにねじ込み急いで店を出た。

幸い、気付かれなかったようで追っ手はない。

私は、駅の公衆トイレの個室に駆け込み夢中でパンにかじりついた。

実に3日ぶりの食事だった。

自然と涙が溢れて来た。空腹を満たされた嬉しさと安堵感、それと

情けなさと

悔しさ…複雑な思いが頭の中を交差した。

そして私は、その日を境に度々コンビニやスーパーで万引きを行うようになっていた。

食べるために…。生きるために…。

こんな生活を続けるようになり1週間が過ぎた頃…
空腹と疲労で私の体力は限界に達していた。

万引きの味を知ってしまった私だったが、さすがに毎日はいできない。
1日置きにパンを1個だけ拝借することにしていった。

しかし、そんなもので大人一人の体力を維持出来る訳がない。

その日も、ふらつきながら私は歩道を歩いていた。

道行く人たちは皆、私とすれ違う時に揃って同じ表情を見せる。
眉を寄せ眉間にしわをつくる。好奇と哀れみの入り混じった目付きで私を見る。

そして通り過ぎるとすぐさま私のことは見なかったこととして処理されるのだ。

私は、めまいを覚え近くにあったベンチに倒れ込むように腰を下ろした。

すぐ隣に並んだベンチに座っていたカップルは、私の姿を見ると怪訝そうな顔を

残してすぐに立ち去った。

道行く人たちは皆、幸せそうな顔をしている。

私は改めて思った。幸せとは何だ？

今の私にとっての幸せは…何でもいい、腹いっぱい食べること。

清潔な毛布に

体を包み込み眠ること…そして、また家族とともに暮らすこと…。こんな平凡で当たり前のことが、今の私には果てしなく遠いことだった。

私は、ぼんやりと目の前を行き交う人々を眺めていた。そして、しばらく経った

あと自分が今いる場所にようやく気付いた。よく見るとここはデパートの前だ。

以前、何度か妻と娘と3人で買い物に来たことがある。

もし、今ここで妻と娘にばったり会ったら…彼女達は私に気付いてくれるの

だろうか？ いや、こんな変わり果てた夫、父親に気付くはずがない。

仮に気付いたとしても知らない振りをされてしまうかもしれない。妻と娘のことを考えると胸が熱くなる。涙が込み上げてくるのを必死で堪えた。

そのとき、ふつとある考えが浮かんだ。

私は、めまいに耐えながら、ゆっくりとベンチから立ち上がりデパートの自動ドアを開けた。

デパートの中に入り、私が向かった先は地下だった。開店して間もないからだろ

うか…客はまだほとんどいない。私は、エレベーターは使わず店員の目を避けるように階段へと向かった。

地下1階へ続く階段の手摺にしっかりと掴まり、ゆっくり一段一段

下りていくと、

階下からは、私の飢えた腹の虫を刺激するいい匂いが漂ってきた。

この香りは私が目指す先から流れてくる。地下食品売場だ。

私はようやく地下1階のフロアに下り立った。店内を見渡すと数人の店員が怪訝そ

うな目付きで私を見ている。そんな店員たちとなるべく目を合わせない様に私は歩きだした。

ここに来た目的は試食だ。以前、妻達とここを訪れた時に、これもか。という

ほど試食を勧められたのを思い出したのだ。

ここならば、満腹にはなれなくても少しは腹を満たせるかもしれない。私は試食

を出している店を探して店内をうろついた。

しかし、そんな私の考えは甘かった。

いくら無料の試食とは言え、店にとっては商品を売るための手段なのだ。浮浪者

の腹を満たすために試食品を置いている訳ではない。

店側も馴れたものだ。私が店内を物色しているのを見かけた途端、店先から試食

品を引っ込めはじめた。

それも1件や2件ではない。フロアにある店舗すべてが同じ行動に

出ているようだ。

きつと私と同じことを考えたホームレスが過去にもいたのだろうか…
デパートには
対策マニュアルがしっかりと作られているようだ。結局私は何も口
にすることが
出来ずにデパ地下をあとにする羽目になった。

また万引きをしなくてはいけないのだろうか…

うなだれながらフロアをひと回りして階段を昇ろうとした時だった。
店内に女性の声でアナウンスが流れた。

「地下1階、食品売場からお知らせいたします。ベーカリー『もみの樹』では、

ただいまから30分間、Mカード会員様限定のタイムサービスを行います。

Mカードを提示するだけで、もみの樹一番人気の特製あんぱんを先着50名様

にお一人様1個、無料で差し上げるサービスを実施いたします。

Mカードをお持ちのお客様は是非、地下1階食品売場『もみの樹』までお早め

にご来店くださいませ。」

信じられない告知だった。

捨てる神あれば拾う神あり。とは、まさにこのことか？ 私は階段に座り込むと

肩から下げたバッグを急いで床に下ろしてその中に手を突っ込んだ。

そして中身が空の財布を取り出した。

「確か…確か…」私は独りを呟きながら二つ折り財布を広げた。もちろん金が入っていないことは承知している。私が探したものは…

「あつた！これだ！」私は思わず声をあげた。昔、このデパートで妻にバッグをプレゼントした時に店員にしつこく勧められて作ったカードが財布の中に入っていたのだ。

クレジット機能も付いているデパートの会員カード。ブルーの下地にアルファベットの白いMの文字が大きくデザインされている。

間違いなく、さっきアナウンスで言っていた『Mカード』だ。

有効期限もまだ切れてはいない。前に試した時はクレジットカードとしての機能はもう果たしていなかったが、提示だけなら問題ないはずだ。私は、カードを握りしめて立ち上がった。

ベーカリーもみの樹はすぐに見つけられた。

階段ホールから売り場へ出てすぐ右手の奥にその店はあつた。アナウンスを聞き付けたのか、数人の客が店の前に集まってきている。

早くしなくては！ 私は焦る気持ちを抑えてゆっくりと店に近づい

た。

見る限り10人以上の客が並んでいる。私は、その列の最後尾に並ぼうとして一瞬躊躇した。

私が今、この位置に並ぶとその後ろには誰かが並ぶのだろうか…私がこの列に並ぶことは、店にとって明らかに営業妨害になるだろう。

私は、今すぐ列に加わりたい衝動を抑え少し離れた位置から様子を伺うことにした。

店の営業を心配した訳ではない。私が並んだせいでこのサービス自体が途中で打ち切られてしまうのを恐れたのだ。

すでにパンの配布ははじまっている。先頭にいた二人組の若い女性が焼きたてのパンを手に笑顔で私の前を通りすぎると香ばしい匂いが私の腹の虫を更に刺激した。

私はパンを受け取った客の人数をさりげなく数えた。たしかアナウンスでは先着50人と言っていた。私は残り10人を切ったところで列に入ろうとタイミングを伺っていた。

そして、いよいよその時が来た。私は列の最後尾に並んだ。

計算では、残るあんぱんは10個余り。私の前に並んでいるのは5、6人か…この位置なら
確実に私にもあんぱんが回ってくるはずだ。

最前列では、白い帽子を被った店員の女の子が、焼きたてのあんぱんをトレーから紙袋に

一つ一つ詰めて客に手渡しているのが見える。

私の番まで残り3人になった時だった。店員の手が止まった。同じ制服を着た年配の女性が近づいて何かを耳打ちしている。

パンを配っている店員の表情が一瞬曇った。

この年配の女性は店長だろうか？ 私は嫌な胸騒ぎがした。

その店長らしき女性は、一言二言耳打ちするとすぐに厨房へと消えていった。

あんぱんを配っていた店員は、その女性の背中を見送ったあと再び笑顔を浮かべて

あんぱん配りを再開した。

私の順番まではあと一人…

私は震える手でカードを握りしめ順番を待った。

そしてついに、前にいた女性がパンを受け取りその場から立ち去った。

いよいよ私の番だ…。

店員は、どんな対応をするのだろうか？ 私は恐る恐る近づいてカードを差し出した。

私を眼前にした店員の顔からは、先程までの笑顔が消えていた。その表情は怯えている様にも見える。

それもそうか。こんなボロボロの身なりをしたホームレスを目の前に

爽やかな笑顔でいられる訳がない。

私は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

私は、何も言わずにカードを差し出した。店員は、私が差し出したカードに目をやると

困ったような顔をしてチラツと厨房の方向に視線を移した。

どうやら私がMカードを持っていたのが想定外だったようだ。

おそらく、私がカードなしに試食のパンを貰いに来たと思っていたのだろう。

まあ、店にしてみればその方が断る口実になったのだろうが…。

店長らしき女性の耳打ちも、それを理由に断つて。ということだったのかもしれない。

しかし、残念ながら私はMカードを持っていたのだ。

店員が視線を送った先には、先程の店長らしき女性がしかめっ面でこちらの様子を窺っている。

私には、その表情が「そいつには渡すな」と訴えているように思えた。

「こんな…私でも…あんぱん、もらえますか？」

私は、小声で目の前の店員に聞いた。

断られても仕方がない…。この店員が悪いわけではないのだ。ダメならば諦めてすぐにこの場を去ろうと決めていた。

私が聞くと店員は、一瞬強張った表情を見せたが、何かを決意した

ように小さく頷いて

「カードを確認させていただきます。」と言った。

そして私の手からカードを受け取り、表と裏を交互に2、3回確認したあと動きを止めた。

偽造カードだとも思っているのだろうか？ 店員の表情は相変わらず固いままだ。

しかし、すぐに「ありがとうございます！」と笑顔になりカードを返してくれた。

そして

「はい！もみの樹、一番人気の特製あんぱんです！どうぞ！」

そう言つて焼き立てのあんぱんをひとつ袋に入れて私の前に差し出してきた。

「…え？」

私は思わず声をあげてしまった。

「…いいんですか？」

申し訳なさそうに質問する私に彼女は微笑んで言った。

「もちろんです！どうぞ」

私は、彼女が差し出したあんぱんを大切に両手で受け取った。

焼きたてのあんぱんは、紙袋の上からも温かさが伝わってくる。

その温もりに心までも熱くなった気がした。

そして私は「ありがとう、ありがとう…」と何度も深々と頭を下げてから

その場を去ろうと後ろを振り返った。

私がこの場にいることで店に迷惑をかけていることは分かっている。急いでここから離れようとした。が、そんな私の背中に店員が声をかけてきた。

「あの…お客様さま…」

私は、大切な宝物のように両手で包み込んだあんぱんを手に振り返った。

やっぱりこのあんぱんを返せ。とでも言いだすのかと思い、無意識に両手に力を込めた。

そんな私の考えとは裏腹に店員は意外なことを口にした。

「あのく、もしよろしければ…これもどうぞ…」

そう言った彼女の手には『もみの樹』と書かれた赤いビニール袋が下げられている。

中を覗き込むと、あんぱんがもう一つ入れられていた。

「え？なんで…」と、私が聞くと彼女は困ったように苦笑いをしながら答えた。

「あ、えつと…ひとつだけ、余ったので…すみません。もしよろしければ…」

私は、その言葉を聞いて自分の周囲を見回した。

私の他に客らしき姿は見当たらなかった。

どうやら、私の後ろに並んだ客は一人もいなかったようだ。

ひとつ余ったということは…確か、限定50名と言っていたので、

私は49人目だった

ということか…。それとも…

私の後ろに誰も並ばなかったのは、おそらく…いや、確実に私のせいであろう。

「私の方こそ…こんな汚い格好で…本当に申し訳ない。

とてもありがたいけど…それは、もらえません…これだけで十分です。ありがとうございます」

私は、本当は喉から手が出るほど欲しかったが、彼女の善意に恐縮

してしまい

何故か、そのあんぱんを受け取ることが出来なかった。

そして、もう一度深々と頭を下げた私は、振り返り急いで階段ホールへと向かって歩き出した。

階段ホールに辿りついた私は、階段の一番下の段に座りこみさつそく紙袋からあんぱんを取り出した。焼きたてパンの香ばしい香りが食欲をそそる。

私は、唾を飲み込んでかぶりついた。

美味かった。

私はこんなに美味しいあんぱんを、いや、食べ物を食べたのは生まれて初めてだった。

やっとありつけた食事なのだから美味くて当然なのだが、それ以上の…

言葉では言い表せない美味さだった。

逮捕される以前、私は妻との結婚記念日や娘の誕生日など、事あるごとに

高級レストランで食事をした。

有名ガイドブックに星がつけられるような店に何度となく通って、様々な

料理を食べてきた。

それらの料理は、もちろん美味うまいかったのだろうが、はっきり言って味など覚えていない。

だが、私は…このあんぱんの味だけはきつと一生忘れることはないだろう。

私はあんぱんの味を噛みしめながら無心で頬張った。涙がこぼれた。

その涙は、以前コンビニで万引きしたパンをトイレに隠れて食べた時に流した涙とは少し違う。

私は、溢れる涙を拭うこともせず、あんぱんにかぶりつきながら考えた。

絶対にこんな生活からは脱出しよう。

この事件の裏にある何かを必ず突き止めてやる。

そして、愛する家族との幸せな家庭を必ず取り戻してやる。

そして、必ず、またこのパン屋を訪れて、今度は自分の金でこのあんぱんを

購入しよう…。と、私は心に決めた。

最後の一口となったあんぱんを、口の中に放り込もうとした時だった。

「すみません」と、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

私が、ハツとして顔を上げると、そこにはさきほどのパン屋の店員の女の子が

私を見ていた。

白い帽子は脱いでいた。少し茶色く染まった髪を丁寧に頭の上でまとめている。

頬をピンク色に化粧しているせいかとても幼く見える。

どう見ても学生の年頃だ。高校生のアルバイト店員だろうか。

「すみません…」私と目が合うと、その子はもう一度呟くように言った。

私は、その声のトーンで彼女が何を言おうとしているのかを悟った。

「あ、ごめん！こんな所で食べて…迷惑だね。今すぐ消えるから。」
私は、一口分だけ残ったパンを大切に紙袋にしまってからヨロヨロと立ち上がった。

そして、その子に先程のお礼も含めてもう一度深く頭を下げたから上の階を目指して階段を上りはじめた。

「いえ、違ってます！」

彼女が、私に向かって声をかけたのは階段を5段ほど上った時だった。

「え？」私が振りかえると、彼女は急いで階段をかけ上がり私のすぐ近くまでやってきてこう言った。

「もしかして……奈々のお父さん……ですか？」

「…え？」

「人違いだったらすみません。さっきカードの名前を拝見して…もしかしたら…って。十文字さんって、滅多にない名前だから…友達のご家族かと…」

私が突然のことに呆気にとられて言葉を失っていると、彼女は頭を

ペコッと下げた。

「突然すいません！人違いですよね…ごめんなさい」

そう言うと、階段をトントンと駆け下りて「失礼します！」と言い残して彼女は

その場を去ろうとした。

「ちょっと待って！」

彼女の背中に私が声をかけると、彼女はすぐに足を止めて振り返った。

「キミ…奈々のことを知っているのか？」

そっ…奈々は、私の一人娘の名前なのだ。

『トットロ、トットロ…トットロ、トットロ…』

その時、突然着メロのトットロが流れた。

「なんだよ！いいところだったのに…！」

俺は、舌打ちをして小説を閉じた。そして机の上から携帯電話を取り上げて

画面を開いた。

『伊集院竜一』

竜一からだった。俺は、慌てて通話ボタンを押して電話に出た。

「もしもし?」

「あ、アキラ? 連絡遅くなってごめん!」

「本当だよ!…ったく! で? あれからどうなったんだよ!?」

「うん。そのことなんだけど…今夜会えるかな?」

「今夜? ああ、大丈夫だよ。」

「そっか、じゃあ、いつもの店で7時に…」

そういうと竜一は一方的に電話を切った。

第21章 『地下』(後書き)

はあ、21章ようやく書き終えた(汗)

第22章 『乾杯』

「遅い！」

俺が店に入るなり大声をあげたのは竜一だ。

遅いって…まだ約束の5分前なんですけど…

てか、だいぶ酔ってますか？

俺はこのまま店を出ようかと思ったがそういう訳にもいかない。

竜一の向かい側の椅子に腰をおろした。

「急にごめんね」竜一の隣に座っていた愛が声をかけてきた。

「大丈夫だよ。どうせ暇だし」

そう答えたのは竜一だった。

「お前が言うなよ。まあ、当たってるけど…」

俺は苦笑いしながら厨房の中にいるおばちゃんに手を上げた。

「はい、何にする？」

おばちゃんは横着してカウンター越しに注文を聞いてきた。

「ウーロン茶…あ、やっぱり生ビールにするわ」

「お！珍しいね。飲むの？」

竜一が皮肉たっぷりの笑顔で言ったきたので

「やっぱりウーロン茶！」と、おばちゃんにもう一度手を上げて

注文の変更をするフリをしてやった。

「あはは…だめだよ！今日は、無理してでも飲んでもらうよ」

そう言うと、竜一は、ジョッキに少し残った生ビールを一気に飲み干した。

「え？なんでだよ？」

俺の質問に答えたのは愛だった。

「今日はお祝いなんだって！」

そう言った愛は、竜一の空ジョッキを自分の前に引き寄せておばちゃんに

目で「おかわり」と合図した。

「お祝い？どういうことだよ」

「うん、あのね…」

愛が言いかけた時、おばちゃんが生ビールのジョッキを運んできた。

俺と竜一の前に置かれた中ジョッキからは真っ白でクリーミーな泡が
今にも溢れ落ちそうに顔を出している。

「よし！じゃあ揃ったところで…」

竜一が声をかけジョッキを持ち上げた。

俺は、何のお祝いなのかもわからず、とりあえず竜一に乗せられて
ジョッキに手をかけた。

乾杯の音頭を取ったのは愛だった。

「じゃあ、とりあえず…」

乾杯！

俺達3人はグラスを合わせた。

*

*

*

*

*

この日の『お祝い』の理由はこういうことだった

竜一と愛が結婚したのだ。

今日、市役所に婚姻届を提出してきた。と竜一がさりとら言った。俺は余りにも唐突な報告に、その意味を理解するのに時間がかかった。

「け、結婚って……はあ？」

「うん、そう」愛が微笑みながら答えた。

「母のこと……やっと心の整理がついたから……」

そう答えた愛の表情は確かに清々しく見える。

竜一も愛も本当に嬉しそうだった。

「あ……そうなんだ……」

俺は相変わらず何と言って良いのか分からず言葉を探していた。

そしてようやく探していた言葉を見つけて口に出すことができた。

「お、おめでとう」

「うん、ありがとう」

「でも……」

「ん？」

「心の整理がついたって……つまり……？」

「うん。この前、アキラと一緒に菊地先生の話聞いたじゃない」

「あ、うん。あれからどうなったのか…気になってたんだよ」

「うん、ごめんね。アキラには全部ケリがついたら話そうと思ってたから…」

「あ、いや…で？ そのケリは……ついたんだな？」

「うん。ついた。」

そして愛は、あのファミレスでの一件のあと何があったのかを語り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8595j/>

リバーズ

2011年10月6日18時40分発行